

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（231）

環境保健センター城山庁舎跡地文化財調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

か ご しま じょう に の まる あと
鹿児島城二之丸跡
(鹿児島市城山町)

2025年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



調査区から桜島を望む



鹿児島城二之丸跡出土木製品（将棋盤）

序 文

この報告書は、環境保健センター城山庁舎跡地文化財調査事業に伴い、令和5年度に実施した鹿児島城二之丸跡の発掘調査の記録です。

鹿児島城二之丸跡は、鹿児島市城山町に所在し、近世から近代にかけての遺構や遺物が発見されました。

遺構は、近世の柱穴列や溝状遺構が発見されました。この中でも、柱穴列は境となる塀の可能性があります。鹿児島城内の築城時から二之丸を拡大し整備していった当時の状況を知る上で重要な資料になることも期待されます。

遺物では、薩摩焼をはじめ、近世の瓦や陶磁器、木製品等を中心とした資料が出土しました。この中でも、将棋盤と考えられる木製品が土坑の中から出土しました。17世紀後半以降の将棋盤と考えられ、全国でも4例目の出土例となる可能性があることがわかりました。鹿児島でも将棋が親しまれ盛んであったことがうかがわれ、鹿児島城や城下の人々の暮らしや文化を解明する手がかりとなってくるものと思われまます。

本報告書が、鹿児島城跡の保全整備と二之丸跡の再発見につながり、県民の皆様をはじめとする多くの人々に活用され、埋蔵文化財に関する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたりご協力いただきました地域住民の皆様をはじめ、関係者の皆様・関係機関に厚く御礼を申し上げます。

令和7年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 中 村 和 美

報告書抄録

ふりがな	かごしまじょうにのまるあと							
書名	鹿児島城二之丸跡							
副書名	環境保健センター城山庁舎跡地文化財調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第231集							
編集者名	星野 清 黒木梨絵 平 美典							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 Tel 0995-48-5811							
発行年月日	2025年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
かごしまじょう 鹿児島城 にのまるあと 二之丸跡	かごしまけん 鹿児島県 かごしまし 鹿児島市 しろやまちょう 城山町	46201	201-62	31° 35' 40"	130° 33' 09"	2023. 8. 1 ～ 2023. 10. 27	800	環境保健センター城山庁舎跡地文化財調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
鹿児島城 二之丸跡	城郭	近世	溝状遺構2条 柱穴, 柱穴列 瓦列(雨樋遺構) 瓦溜り 土坑	瓦(平・丸瓦, 軒丸・軒平瓦), 中国陶磁器, 国産陶磁器(薩摩焼, 肥前系, 琉球) 瓦質土器, 土師器 木製品				
		近代	石列 礎石 石組排水溝	瓦, 陶磁器				
遺跡の概要	<p>本遺跡は鹿児島城二之丸の南端に位置する、近世～近代の複合遺跡である。特に近世期が主体で、近世の包含層が2面確認された。近世最上層のⅢ層からは、溝状遺構や瓦列の遺構が確認され、近世最下層のⅤ層からは柱穴列や溝状遺構、土坑等が確認された。遺物は17世紀から18世紀後半の遺物が多く出土した。柱穴列は調査区を東西に並んでおり、境となる塀のような建造物の控え柱跡と考えられる。柱穴の埋土は上層と下層の2層に分かれているため、2つの時期に建て替えられている可能性があることが明らかになった。築城からの区画が二之丸の整備・拡大に伴い、区画を境に改変された姿を知る上で重要な成果となった。</p> <p>また、土坑から出土した木製品は升目が刻まれており、自然科学分析や法量、出土した層から考えると近世以降の将棋盤と考えられる。全国でも4例目の可能性がある出土例で、当時の鹿児島城や城下の文化を知る上で貴重な資料である。</p>							



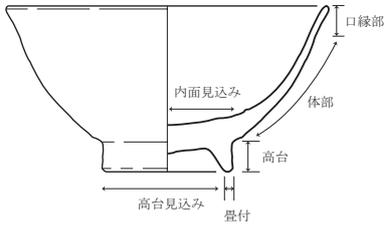
鹿児島城二之丸跡遺跡位置図 (S = 1 : 50,000)

例 言

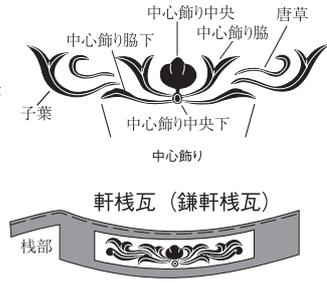
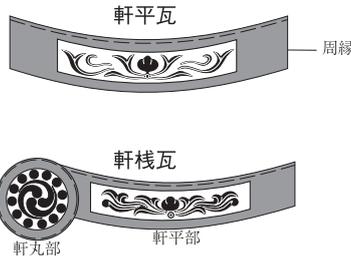
- 1 本書は、環境保健センター城山庁舎跡地文化財調査事業に伴う鹿児島城二之丸跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島市城山町に所在する。
- 3 発掘調査は、鹿児島県商工政策課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、令和5（2023）年8月1日から令和5（2023）年10月27日まで鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 5 調査区を5m間隔のマス目（グリッド）で区切った鹿児島城跡の調査グリッドを使用した。鹿児島城跡のグリッドは御角櫓南東角を基準として東側（国道10号線）の石垣に平行に軸及びグリッドを設定している。
- 6 整理作業・報告書作成作業は、令和6年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施し報告書を刊行した。
- 7 発掘調査における遺構等の実測図作成は、主に調査担当者が行い、担当職員の指示のもと、一部を株式会社九州文化財研究所に委託した。
- 8 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高度である。
- 9 本書で使用した方位は、すべて磁北である。
- 10 使用した土色は『新版標準土色帳』（2013 農林水産省 農林水産技術会議事務局監修）を参考にした。
- 11 発掘調査における写真撮影は調査担当者が行い、空中写真の撮影は、株式会社ふじたに委託した。
- 12 出土遺物の実測・トレースは、担当職員の指示のもと、整理作業員の協力を得て行った。一部の実測・トレースについては、株式会社九州文化財総合研究所に業務委託した。
- 13 出土遺物の写真撮影は、担当職員の指示のもと、整理作業員の協力を得て行った。
- 14 掲載遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、表、図版の番号は一致する。
- 15 遺物注記等で用いた記号は「二ノ丸」である。
- 16 遺物観察表で示した部位ごとの計測値は欠損している場合は（ ）を用いる。
- 17 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。基本的には瓦は $S = 1 / 4$ 、陶磁器は $S = 1 / 3$ とした。
- 18 本書で用いた陶磁器の表現は右図のとおりである。
- 19 本書で用いた瓦の部位の名称、計測部位は右図のとおりである。
- 20 本報告に係る自然科学分析は、炭素年代測定・樹種同定は株式会社パレオ・ラボに委託し、その成果品を掲載している。
- 21 木製品は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保存処理を行い、一部を株式会社吉田生物研究所に保存処理を委託した。
- 22 本書の執筆担当は、以下のとおりである。
第1章 星野 清，黒木 梨絵
第2章 星野 清，黒木 梨絵，平 美典
第3章 星野 清，黒木 梨絵
第4章 株式会社パレオ・ラボ
第5章 星野 清，黒木 梨絵
- 23 本報告遺跡に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し展示活用を図る予定である。

凡例

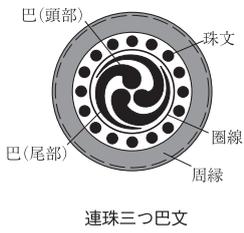
陶磁器部位



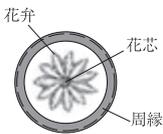
軒平瓦・軒棧瓦(軒平部)文様



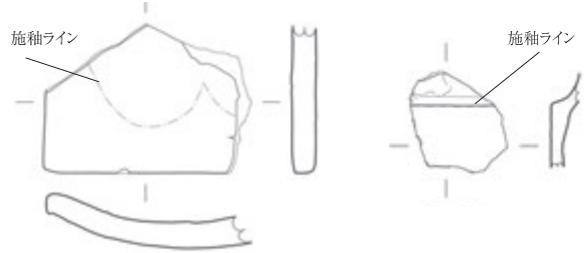
軒丸瓦文様



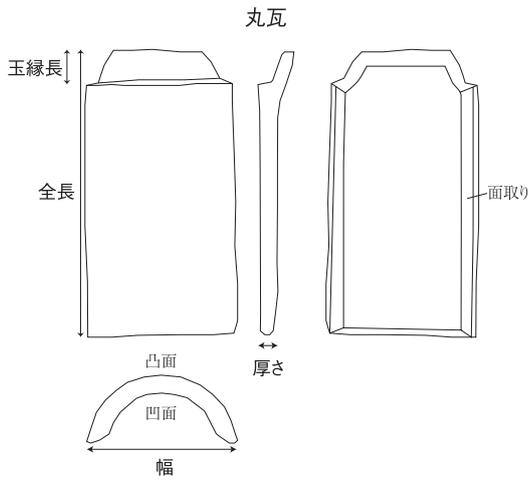
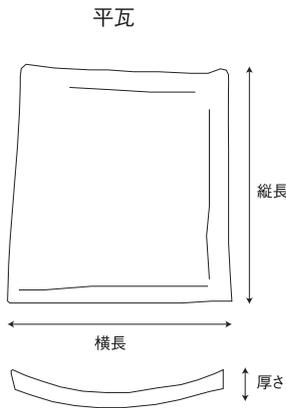
小菊瓦文様



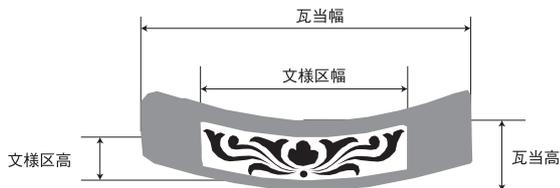
陶器瓦



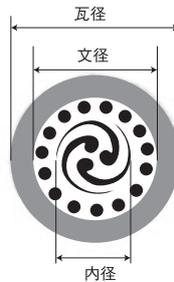
計測部位



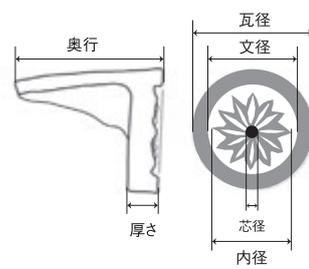
軒平瓦



軒丸瓦



小菊瓦



本文目次

第1章 発掘調査の経過	1	第4章 自然科学分析	59
第1節 調査に至るまでの経緯	1	第1節 放射性炭素年代測定	59
第2節 調査の体制と経過	1	第2節 樹種同定	61
第3節 整理・報告書作成	2	第5章 総括	63
第2章 地理的・歴史的環境	3	第1節 調査の成果	63
第1節 地理的環境	3	第2節 木製品の出土	66
第2節 歴史的環境	3	第3節 遺跡の残存状況	68
第3章 調査の方法と成果	14	写真図版	
第1節 調査の方法	14		
第2節 層序	15		
第3節 近世の調査成果	15		
第4節 近代以降の調査成果	54		

挿図目次

第1図 鹿兒島城下絵図等関連資料①	6	第27図 V層出土遺物②	37
第2図 鹿兒島城下絵図等関連資料②	7	第28図 III層(近世)検出遺構(SD 2・瓦列)および出土遺物	38
第3図 鹿兒島城下絵図等関連資料③	8	第29図 瓦列(雨樋遺構)出土遺物①	39
第4図 鹿兒島城下絵図等関連資料④	9	第30図 瓦列(雨樋遺構)出土遺物②	40
第5図 鹿兒島城跡過去の調査	10	第31図 瓦列(雨樋遺構)出土遺物③	41
第6図 周辺遺跡	12	第32図 瓦列(雨樋遺構)出土遺物④	42
第7図 調査範囲	14	第33図 瓦列(雨樋遺構)出土遺物⑤	43
第8図 土層断面図①	16	第34図 瓦列(雨樋遺構)出土遺物⑥	44
第9図 土層断面図②	17	第35図 瓦列(雨樋遺構)出土遺物⑦	45
第10図 土層断面図③	18	第36図 III層出土遺物	46
第11図 土層断面図④	19	第37図 遺構配置図(II層)および石組排水溝	46
第12図 III・V層遺構配置図	20	第38図 II層検出遺構・柱穴(P14・P15)	47
第13図 H～M-79'区柱穴列	21	第39図 攪乱出土遺物①	48
第14図 柱穴(P 1～P 9)	23	第40図 攪乱出土遺物②	49
第15図 柱穴(P10～P13, P25～P29)	25	第41図 攪乱出土遺物③	50
第16図 柱穴(P16～P24)	27	第42図 攪乱出土遺物④	51
第17図 柱穴内出土遺物(P 9・10・25～27)	28	第43図 攪乱出土遺物⑤	52
第18図 溝状遺構(SD 1)	29	第44図 攪乱出土遺物⑥	53
第19図 溝状遺構(SD 1)出土遺物①	30	第45図 攪乱出土遺物⑦	54
第20図 溝状遺構(SD 1)出土遺物②	31	第46図 暦年較正結果	60
第21図 溝状遺構(SD 1)出土遺物③	32	第47図 鹿兒島城二之丸跡出土木製品の光学顕微鏡写真	62
第22図 溝状遺構(SD 1)出土遺物④	33	第48図 調査区周辺絵図	63
第23図 土坑(SK 1)および出土遺物	34	第49図 調査区周辺拡大図『鹿兒島城屋形及びその周辺図』	64
第24図 瓦溜りおよび出土遺物①	35	第50図 鹿兒島城の柱跡	65
第25図 瓦溜り出土遺物②	36	第51図 出土将棋盤	67
第26図 V層出土遺物①	36	第52図 遺跡の残存状況	68

表目次

第1表 鹿兒島城(二之丸)関連年表	5	第8表 遺物観察表(瓦)	58
第2表 鹿兒島城跡過去の調査一覧	11	第9表 遺物観察表(土師器・瓦質土器)	58
第3表 周辺遺跡一覧	13	第10表 遺物観察表(土錘)	58
第4表 基本土層	15	第11表 遺物観察表(木製品)	58
第5表 遺物観察表(陶磁器)	55	第12表 測定試料および処理	59
第6表 遺物観察表(陶磁器)	56	第13表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	60
第7表 遺物観察表(陶磁器)	57	第14表 鹿兒島城二之丸跡出土木製品の樹種同定結果	61

写真図版

写真図版1 調査写真1	写真図版8 調査写真8
写真図版2 調査写真2	写真図版9 近世遺物1
写真図版3 調査写真3	写真図版10 近世遺物2
写真図版4 調査写真4	写真図版11 近世遺物3
写真図版5 調査写真5	写真図版12 近世遺物4
写真図版6 調査写真6	写真図版13 近世遺物5
写真図版7 調査写真7	

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

令和3年10月、鹿児島県商工会連合会及び鹿児島県中小企業団体中央会は、調査対象地を所管する県観光課に対し、鹿児島市城山町1-7の用地を「鹿児島県商工会館」建設地として貸付を受けたいとの要望を行った。

県観光課を通じて上記要望を把握した県商工政策課は、当該用地が周知の埋蔵文化財包蔵地「鹿児島城跡」であることから、当該用地における埋蔵文化財の取扱いについて県教育庁文化財課（以下、「文化財課」）に照会した。文化財課は、照会に対し、周知の埋蔵文化財包蔵地における一般的な扱いについて説明するとともに、当該用地が、平成27年度に鶴丸城御楼門建設協議会及び県（事務局：県生活・文化課（現県文化振興課））が作成した鹿児島城跡保存活用計画において「現状保存が望ましい」と定めた区域に属していること、さらに、県文化振興課が中心となって鹿児島城跡について国史跡指定を目指して関連事業を実施していることを回答した。

一方、当該用地の活用策については、県としての方針が定まっていないことから、県商工政策課は、当該用地における整備の可能性を検討するため、県観光課へ試掘調査のための土地使用承諾を依頼するとともに、文化財課へ試掘調査の依頼を行った。

なお、当該用地は昭和24年から県環境保健センターとして活用されており、平成26年度には県教育委員会が、県環境保健センター建物基礎撤去及び汚染土壌入替に伴う試掘調査を実施し、遺物包含層もしくは遺構の埋土が確認されたことから、二之丸に関わる遺構が残っていることが報告されている。

県商工政策課の依頼及び観光課の土地使用承諾を受け、文化財課では、当該用地について遺跡残存状況等を把握するために令和3年度に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、当該用地の現地表面から170cm～180cm下位には、鹿児島城当時の整地面が広く残存している可能性が極めて高いことを確認した。

ちなみに、当該用地は「鹿児島城屋形及びその周辺図」（第3図）との照合によると、鹿児島城二之丸の勘定所や奉行所の背後にある平地に相当する。

試掘調査の結果をもとに県商工政策課と文化財課が再度協議を行い、発掘調査を実施することとなった。発掘調査については、鹿児島市教育委員会と文化財課の協議の結果、県立埋蔵文化財センターが本調査を実施することとなった。

調査面積は800㎡、調査期間は令和5年8月1日（火）～令和5年10月27日（金）（実働52日）である。

第2節 調査の体制と経過

1 試掘調査

平成26年度

事業主体 鹿児島県環境保健センター
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査担当 県教育庁文化財課
埋蔵文化財係長 東 和幸
鹿児島市教育委員会文化財課
指導主事 井口 俊二
立会者 鹿児島県環境保健センター庶務部
主幹兼係長 今釜 健夫

令和3年度

事業主体 鹿児島県商工政策課
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査担当 県教育庁文化財課
埋蔵文化財係長 横手浩二郎
県立埋蔵文化財センター調査課
第一調査係長 三垣 恵一
文化財研究員 彌榮 久志
立会者 鹿児島市教育委員会文化財課
主幹兼文化財係長 小林 晋也
専門員 有川 孝行

2 本調査

令和5年度

事業主体 鹿児島県商工政策課
調査主体 鹿児島県教育委員会
調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 中村 和美
調査企画 調査課長 黒川 忠広
総務課長 荒瀬 勝己
第一調査係長 平 美典
調査担当 文化財主事 高吉 伸弥
文化財主事 星野 清
調査事務 総務課主査 斜木 吉夫
調査指導 県文化財保護審議会会長 本田 道輝
国史跡鹿児島城跡保全整備専門家検討会議委員長 三木 靖

3 調査経過

令和5年度

8月 環境整備，表土除去

J～M-77'～79'区掘り下げ
I層・II層掘り下げ，遺構調査，
石列・礎石検出
写真撮影，石列除去，掘り下げ

9月 J～M-77'～82'区掘り下げ

III層掘り下げ，遺構調査，遺物取り上げ
調査区東壁土層断面実測，写真撮影
J～M-79'区中央ベルト北壁，南壁土層断
面実測，写真撮影
K～M-79'～82'区地形測量，写真撮影
H～K-80'～81'区掘り下げ
溝状遺構，瓦溜り検出

10月 H～J-79'～82'区掘り下げ

溝状遺構，瓦溜り実測，写真撮影
IV・V層精査，遺構調査
柱穴列・土抗検出，実測，写真撮影
J-77'～82'区中央ベルト西壁実測
調査区南壁・西壁・北壁土層断面実測，写真撮
影
瓦列・石組排水溝検出，実測，写真撮影
10.6 空中撮影委託（株式会社ふじた）
10.16 県文化財保護審議会会長本田道輝氏に
よる調査指導
10.25 国史跡鹿児島城跡保全整備専門家検討
会議委員長三木 靖氏による調査指導
10.26 遺構配置図実測委託（九州文化財研究所）
遺物取り上げ
工事に影響を受けない場所を土木シートで保護

11月 埋め戻し

作成担当 文化財主事
文化財主事
事務担当 総務課主査

星野 清
黒木 梨絵
斜木 吉夫

報告書作成指導委員会

令和6年6月14日
黒川課長ほか6名
令和6年8月9日
黒川課長ほか6名
令和6年10月8日
黒川課長ほか6名
令和6年11月6日
黒川課長ほか6名
令和6年11月19日
黒川課長ほか6名

報告書作成検討委員会

令和6年11月22日
中村所長ほか6名

第3節 整理・報告書作成

令和6年度に整理・報告書作成として，出土遺物の水洗い，注記，包含層遺物の仕分け，接合作業，遺物の実測，図面のトレース・レイアウト，遺物写真の撮影，原稿執筆等の編集作業を行った。整理・報告書作成作業に関する調査体制は以下の通りである。

1 作成体制（令和6年度）

事業主体 鹿児島県商工政策課

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 中村 和美

調査企画 次長兼総務課長 南 安洋

調査課長 黒川 忠広

第一調査係長 平 美典

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

鹿児島城二之丸跡（以下、「二之丸跡」）は鹿児島市城山町に所在する。遺跡の地理学的位置は、北緯31° 35′ 40″，東経130° 33′ 09″で、標高は約8mである。

鹿児島市は薩摩半島東岸の鹿児島湾の南側から湾奥近くまで南北に長い市域となっている。南側はシラス台地を挟んで海岸から山岳部へ急傾斜で立ち上がっており、北側は台地部が広がる。城山町は鹿児島市の中心部にあり、町内には県立図書館、県立博物館、県歴史・美術センター黎明館、鹿児島市立美術館などの施設があり、隣接地には鹿児島市役所や国の出先機関など、公共施設が多く建ち並ぶ地域である。

遺跡周辺の地形を概観すると、台地及び丘陵部と低地部に分けられる。台地及び丘陵部は、基盤となる層に入戸火砕流堆積物及び新規火山灰層が堆積して形成された、いわゆるシラス台地である。本遺跡の背後に位置する城山は、北西部から連続する台地の縁辺部にある。低地部は、甲突川や稲荷川、永田川、田上川等によって形成された沖積地である。さらに、甲突川が抜ける薬師町付近では、砂州性微高地が発達している。この微高地は、縄文海進をピークとした海面上昇で海岸線が甲突川沿いに深く入り込んだ際に湾口部に発達したものと考えられる。上昇した海岸線は台地直下に波蝕台を形成し、やがて海面が安定期に入ると波蝕台が離水し、沖積地と共に段丘面を形成した。本遺跡は、その段丘面に立地している。

鹿児島城は本丸約11m、二之丸が約8m、御楼門に入る位置が約5mの標高で、緩やかな段丘地に位置する。周囲は堀で囲まれ、東側に鹿児島湾を望み、背後に城山を擁するという自然地形を巧みに生かした城づくり・地形で構成されている。

第2節 歴史的環境

1 中世の鹿児島城下

島津氏は初代から3代までは鎌倉在住の守護職であった。5代島津貞久が鹿児島に入り、その後、守護大名から実質的に薩摩・大隅・日向三国を支配する戦国大名となった。守護大名時の鹿児島は郡司の矢上氏や長谷場氏によって支配されていた。貞久は1341年、鹿児島郡司矢上高純の東福寺城（現在の鹿児島市清水町多賀山公園）を降し、居城としたことで島津氏の鹿児島進出が始まった。東福寺城には1343～1387年の44年間居城した。東福寺城は海に面した要害の城として重要な意義を有したが、居館や城下町を形成するには狭隘であった。そこで1387年7代元久は向かい側の精木川（稲荷川上流）を隔てた北西の丘陵に清水城を築き、麓には居館が置かれた（現在の鹿児島市立清水中学校あたり）。清水城に

は1387～1550年の163年間居城した。1550年に15代島津貴久が現在の鹿児島市立大龍小学校のあたりに内城を築いた。内城には1550～1602年の52年間居城した。内城は、薩摩・大隅・日向の三州統一及び九州一円の制覇を目指す拠点として、交通の利便性や城下町形成に有利であったが、防衛機能が乏しく一重の堀を巡らせた程度であった。そのため、関ヶ原の敗戦を機に移転問題が表面化した。そこで薩摩藩初代藩主忠恒（のちの家久）は、城山の山上に築かれた山城（上山城）及び麓に鹿児島城を築くこととなった。上山城はほぼ現在の城山の範囲にあり、家久は上山城の曲輪を生かしながら、本丸曲輪、二之丸曲輪を整えたと考えられる。

2 近世・近代の鹿児島城下

鹿児島城の築城年については、慶長6（1601）年説あるいは慶長7（1602）年説と諸説あり、資料によって異なるが、関ヶ原の戦い直後であるということはいえよう（鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画「2 鹿児島（鶴丸）城跡の論考 ①築城年について」より抜粋）。鹿児島城は、18代（初代藩主）島津家久によって築城された。山城（城山）と麓の居館（平城）からなる平山城であった。築城時直後は全体を上山城と呼んでいた。家久が家康に従うとすぐに島津氏の本城として江戸幕府に承認され、当時幕府は本城を地域名で呼んでいたため、鹿児島城という名称になった。合戦への備えを優先して構想されており、山城部分に曲輪が整備され、山の上に本丸と二之丸が置かれ、麓には屋形を創設した。やがて領国統治対策が主になると、その中心は山麓の居館部分に移り、居館部が本丸、二之丸と称されるようになった。

鹿児島城は、近世を通じて薩摩藩の藩政の中核として機能してきたが、明治4（1871）年に廃藩置県により廃城となり、29代忠義が本丸を去ることとなる。後には鎮西鎮台第2分営が設置された。明治6（1873）年の火災で本丸は焼失してしまう。御楼門もこの時に焼失たとされる。明治10（1877）年には二之丸が西南戦争で焼失する。西南戦争の最後の戦地となった鹿児島城の石垣及び石垣には、官軍から受けた砲弾や銃弾痕が多く残っている。

その後、本丸跡には明治17（1884）年には県立中学造士館、明治24（1901）年には官立第七高等学校造士館が設立される。昭和24（1949）年には鹿児島大学文理学部が創設され、昭和32（1957）年には鹿児島大学医学部が鴨池から移転される。昭和49（1974）年に鹿児島大学医学部が宇宿町へ移転すると、昭和53（1978）年より（仮称）明治100年記念館（現黎明館）建設のための発掘調査が行われた後、県歴史資料センター黎明館（現鹿児島

県歴史・美術センター黎明館)が設立された。

二之丸跡地には明治15(1882)年興業館が建設(後に旧県立博物館考古資料館として利用)された。明治25(1892)年鹿児島市役所が建設され、昭和13(1938)年に移転した。昭和14(1939)年には歴史館が建設され、昭和20(1945)年歴史館は焼失している。昭和29(1954)年には美術館を建設し、昭和55(1980)年には旧図書館を県立博物館として改装し、その年に鹿児島県立図書館を移設した。昭和57(1982)年には美術館を解体し、昭和61(1986)年鹿児島市立美術館が新設されている。

3 鹿児島城二之丸の変遷

鹿児島城の営作は慶長6(1601)年正月より始められたことが、「上井経兼日記」(『鹿児島市史』Ⅲ所収)にみられ(慶長7(1602)年説と諸説あり)、二之丸の創建の年代も恐らく本丸殿舎と同じころで当初より存在していたであろうと考えられている。殿舎を構え、完成をみるまでには十数年を要し、工事は寛永年間まで及んだことも記録にみられている。

慶長19(1614)年上山城主島津常久の死と、翌元和元年(1615)年の一国一城令に伴うその廃城によって麓の城館造りはかえって促進され、本丸(水濠を廻らした)とそれにつづく二之丸部分も体裁を整えるに至ったものと考えられている。(『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(5)鹿児島(鶴丸)城二之丸跡』1894年所収「鹿児島城二の丸の変遷について」五味克夫)

江戸時代中期以降は、藩主の居館や藩庁である麓の屋形(居館)が鹿児島城の中心となり、拡充された。第4代藩主吉貴～第7代藩主重年の代には、家格の固定化や武士身分の引き締め、城下を方限で区画し、稚児教育の強化を図るなど藩政が充実する。その中で、鹿児島城では、門や各諸設・建物等の呼称の決定や改称の記載が増加する。また、麓の屋形(居館)では本丸の御角櫓や石垣の修復、南泉院・東照宮の造立など整備が進む。

この時期、整備拡張されたのが二之丸である。当初の二之丸は、現在の二之丸跡の中に本丸に近い北から二之丸(現在の県立図書館付近)、御台所、御下屋敷(現在の市立美術館付近)と建物が並んでいたようで、それぞれに門があり、北から二之丸御門、御台所御門、御下屋敷御門があった。御下屋敷には、吉貴など隠居した藩主が暮らすこともあり、その際には作事が行われたようである(享保6(1721)年『鹿児島県史料 旧記雑録(追記)』3-1263)。また、享保8(1723)年にも大規模な庭普請も行われている。

延享4(1747)年に第5代藩主継豊が隠居した際には、その側室であるお嘉久(妙心院)が御台所跡に屋敷を建て、それが山下御用屋敷と呼ばれるようになる(『藩法集8 鹿児島藩』(下)-2577)。

第8代藩主重豪の代になると、天明5(1785)年に御下屋敷とその北側の山下御用屋敷を合わせて二之丸と呼称するようにし(『藩法集8 鹿児島藩』(下)-2579)、それぞれの門の呼称を「二之丸御門」→「矢来御門」、「両口御門」→「御台所御門」、「御下屋敷御門」→「二丸御門」、「御下屋敷裏御門」→「南御門」、「御勘定所門」→「御役所御門」、「随神門脇御中門」→「花園御門」へと改称した(『鹿児島県史料 旧記雑録(追録)』6-2196)。これにより、本丸北側にあった旧二之丸から旧御下屋敷に二之丸殿舎の中樞が移された(二之丸の拡大)。

この後、御下屋敷が二之丸殿舎へ建て替えられ(『鹿児島県史料 旧記雑録(追録)』6-2119)、御台所や二之丸御庭園の普請、旧二之丸の外御庭としての整備、二之丸南端に役所機能をもつ曲輪の設置など大規模な整備が行われる。さらに、重豪は鹿児島城全体の整備を進め、安永2(1773)年以降になると、防災のために設置された二之丸全面の明地(火除地)に聖堂・医学院・造士館(藩校)・演武館(武術道場、犬追物馬場も設置される)・諸役屋敷(御記録所・寺社奉行所・町奉行所等の役所)が創設された。さらに、堀や川に架かる橋への門・関所の設置、城下町に治暦の屋形である明時館(天文館)の設置、琉球仮屋を琉球館とするなど諸施設の改称を行い、屋形(居館)とその周辺を拡充した。(『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(215)鹿児島(鶴丸)城跡 -総括報告書-』2022年)

そして、今回調査対象となっている地域は、二之丸南端にあたり、「御勘定所」「御代官所」「宗門方」「山奉行所」が置かれたことが絵図からわかる。調査区は、二之丸が整備・拡大された時期に役所が置かれた周辺であったことが想定される

第1表 鹿児島城（二之丸）関連年表

番号	年号	西暦	主な出来事	出典
1	慶長18年	1613	初代藩主家久、当御城地大奥に移る。	雑録（後編）4-1074
2	延宝2年	1674	4代吉貴、鹿児島城便殿（「ニノマル」とルビ有）にて生まれる。	旧記雑録（追録）1-1625
3	天和3年	1683	二之丸作事開始。島津中務から島津帯刀の本屋敷まで二之丸とするため、新たに地引を行う。	古記
4	貞享元年	1684	二之丸作事終了。	古記
5	貞享元年	1684	二之丸のことを今後「御下屋敷」と呼ぶよう触が出される。	古記
6	元禄7年	1694	2代光久、鹿児島城四配亭にて死去。（四配亭の下の割書に「後改下屋敷」と有り）。	旧記雑録（追録）1-2467
7	宝永7年	1710	御里御門は、内唱として、御花園御門と呼ぶよう仰せ渡される。	藩法集8（下）
8	正徳3年	1713	火除けのために、鹿児島城下に火除地を設ける。鹿児島城下役座地および下町札辻より築地まで、春屋南市店境、土分の宅地を空き地とし、その後二之丸より下屋敷前まで火除地とすることを幕府に申し出た。坤隅（南西隅）の島津久達の宅地を下屋敷囲いの中とする。	旧記雑録（追録）3-207
9	享保6年	1721	本丸・下屋敷の殿舎の作事について役座の移動。藩主（5代継豊）の諸役座を本丸に直す。下屋敷は御隠居方（4代吉貴）として作事に取り掛かる。	旧記雑録（追録）3-1263
10	享保10年	1725	御下屋敷角辻番所と御厩角辻番所について高役番所と呼ぶよう仰せ渡される。	藩法集8（下）
11	延享4年	1747	御台所跡にお嘉久さまの家を作り、山下御用屋敷と呼ぶよう仰せ渡される。	藩法集8（下）
12	寛延2年	1749	四配邸は鹿児島城の便殿であったが、4代吉貴の隠居後に毀損する。去秋から再びこの地に殿舎を建て、今春に竣工。	旧記雑録（追録）5-426
13	寛延2年	1749	下屋敷の作事について、御座廻りが大方成就する。下屋敷の門、藩主の名代によって通り初め。	旧記雑録（追録）5-428・433
14	宝暦10年	1760	5代継豊、鹿児島城の四配亭便殿にて死去。享年60。	旧記雑録（追録）5-2414・2441・2442・2444～2446・2448～2450・2452・2453
15	安永3年	1774	国史館は初め府城本丸の内に有り、元禄9年4月23日府城火災に合い、宝永3年10月23日府城便殿四配邸の内に仮置く。正徳3年5月15日府城北御厩の内旧屋に設置。明和8年11月17日重豪は有司に命じ、府城の南に卜定し、安永3年5月14日に落成する。	旧記雑録（追録）6-1191
16	天明5年	1785	幕府に御嫡子様または御隠居様居宅と届出ている御屋敷地を内輪にて二之丸と呼ぶよう仰せ渡される。妙心院様（お嘉久さま）が住んでいた屋敷を山下御屋敷と読んでいたが、二丸一円に仰せつけ、当分、山下御鷹部屋あたりまでを山下と呼ぶよう仰せ渡される。その他、「二丸御門」→「矢来御門」、「南口御門」→「御台所御門」、「御下屋敷御門」→「二丸御門」、「御下屋敷浦御門」→「南御門」、「御勘定所門」→「御役所御門」、「随神門脇御中門」→「花園御門」へと改称指示。	旧記雑録（追録）6-2196、藩法集8（下）
17	天明5年	1785	この節、普請した御庭について、二之丸御庭と呼ぶよう仰せ渡される。	藩法集8（下）
18	天明7年	1787	二之丸の造営を起工するも京都で火災があり、費用負担のため、造営は暫く措かれる。	旧記雑録（追録）7-2
19	寛政4年	1792	二之丸造営再起工し、便室内庁完成。同4年4月27日に移徙の儀を執行。	旧記雑録（追録）7-112
20	文化3年	1806	大奥で御男子（泰之進）出生。島津図書養子とする。	旧記雑録（追録）7-840
21	嘉永6年	1853	島津斉彬は物産繁殖に傾倒し、御花園はもとより、二之丸操練場の側に草木試植園を設け、和漢洋諸種の草木などを植え付けていた。	島津斉彬文書下巻176・180-参考
22	万延2年	1861	文武の道に勤めること等を、万延2年1月25日山吹之間詰人数二之丸御茶屋に呼び出した際に命じた。	旧記雑録（追録）8-319
23	文久2年	1862	島津久光が二之丸住居のため、猶又公務の介助等、命じのことは厳重に相守るよう取計ること。	旧記雑録（追録）8-347の2・5
24	文久3年	1863	非常演習。御旗本一陣は御楼門橋詰め、国父公御旗本一陣は二之丸本門下に屯集。	忠義2-304
25	明治2年	1869	内厩方を二之丸に設置。	旧記雑録（追録）8-915の8
26	明治4年	1871	島津久光、積年の功労を賞され、島津忠義に与えた10万石の賞典のうち、5万石を家禄に与えられる。久光は四配亭に住んでいたが、戦火に遭ったのち玉里邸に移る。	旧記雑録（追録）8-1059
27	明治5年	1872	和泉久光と改称し、四配第に移住する。	旧記雑録（追録）8-327
28	明治5年	1872	島津久光の二之丸居住に関する事項。	旧記雑録（追録）8-341
29	明治10年	1877	政府軍の砲撃により二之丸焼失。	陸軍省大日記軍機要領之部明治10年9月22日「旧二之丸砲専の状況」

注「大奥」に関しては、成尾常久『鹿児島城屋形及びその周辺図』（鹿児島市立美術館蔵）などでは本丸にも描かれているが、二之丸に関する記載の可能性のあるものについては掲載した。



寛文10 (1670) 年
「薩藩御城下絵図」(部分) (鹿児島県立図書館所蔵)



元禄9 (1696) 年
「鹿兒島城絵図控」(部分) (東京大学史料編纂所所蔵)



正徳3 (1713) 年
「正徳三年御城下絵図」(部分) (鹿児島県立図書館所蔵)



宝暦6 (1756) 年
「薩摩国鹿兒島城絵図」(部分) (東京大学史料編纂所所蔵)

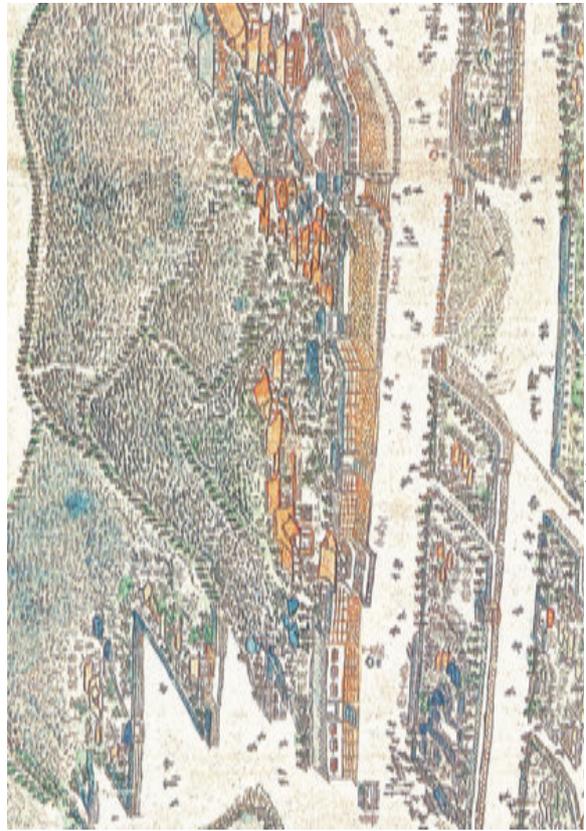
第1図 鹿兒島城下絵図等関連資料①



文政4 (1821) 年
「鹿兒島城下明細圖」(部分) (鹿兒島県立図書館所蔵)



天保14 (1843) 年
「天保年間鹿兒島城下絵図」(部分) (鹿兒島市立美術館所蔵)

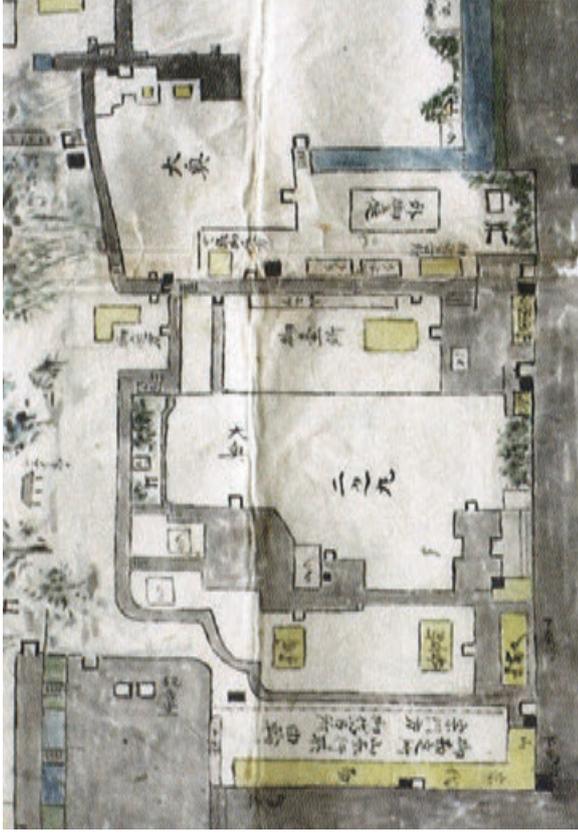


嘉永7 (1854) 年
「府城南面屋形前之圖」(部分) 高木善助『西陲畫帖』

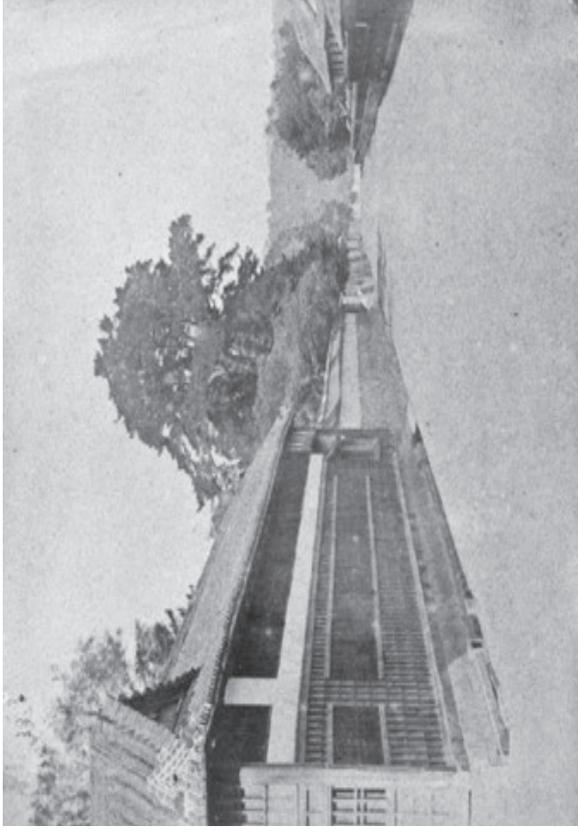


安政6 (1860) 年
「旧薩藩御城下絵図 東北部」(部分) (鹿兒島県立図書館所蔵)

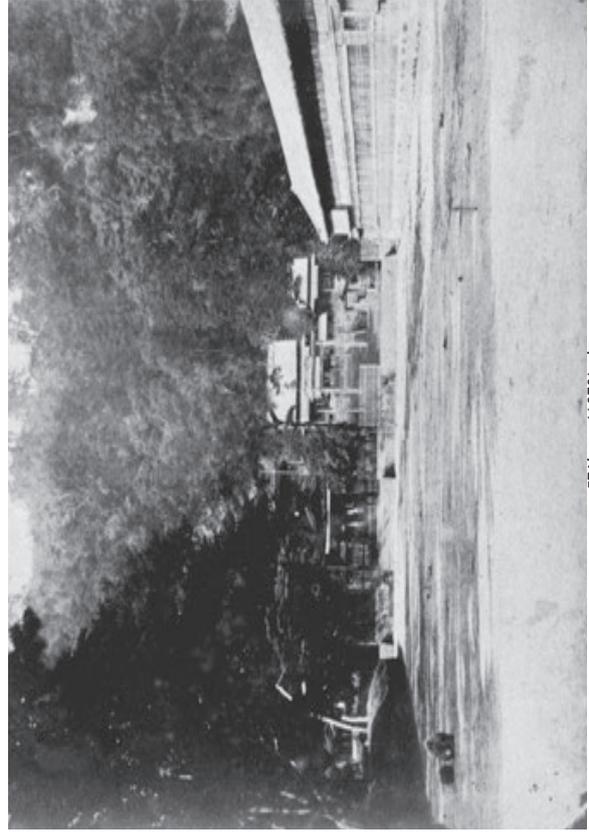
第2図 鹿兒島城下絵図等関連資料②



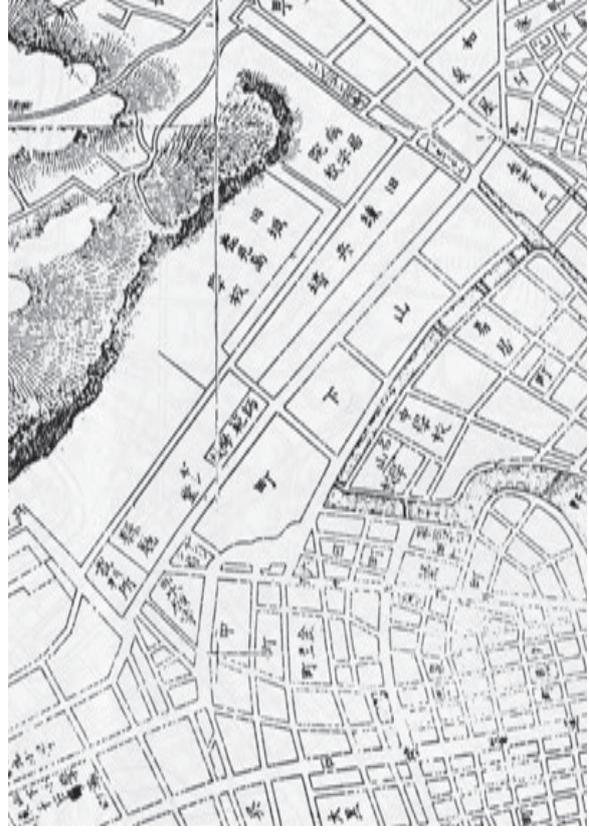
明治6 (1873) 年
『鹿児島城屋形及びその周辺図』成尾常矩 (部分) (鹿児島市立美術館蔵)



明治5 (1872) 年
「鹿児島二ノ丸郭街」藤崎直高
Image: TMM Image Archives (東京国立博物館所蔵)



明治5 (1872) 年
「鹿児島照国神社」藤崎直高
Image: TMM Image Archives (東京国立博物館所蔵)

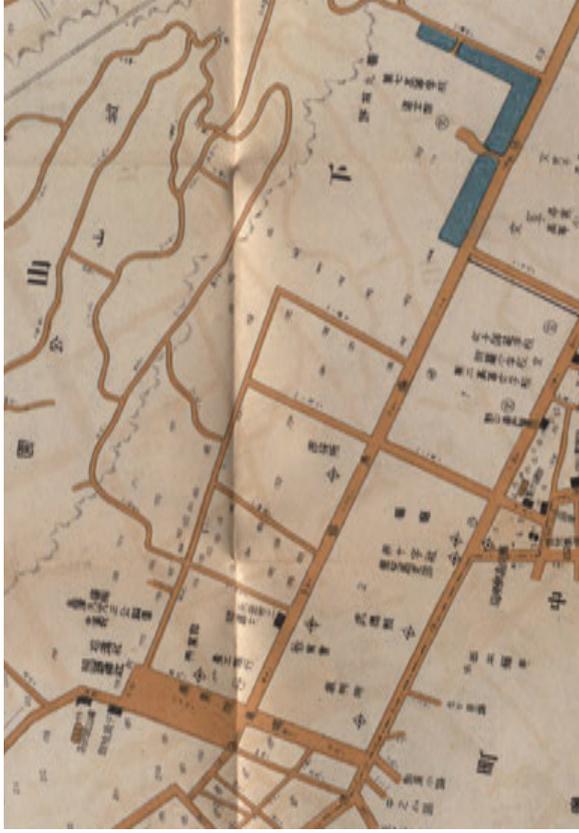


明治17 (1884) 年
「鹿児島市街略図」(部分) (鹿児島市1971)

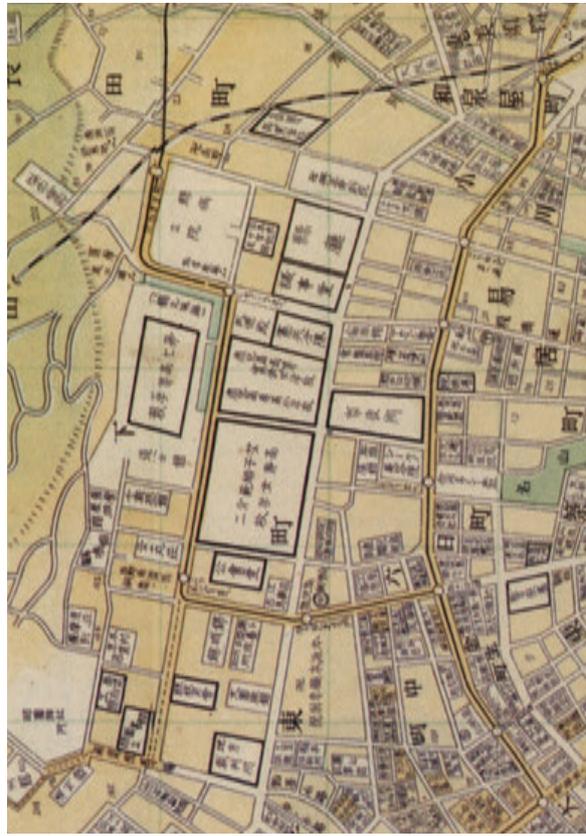
第3図 鹿児島城下絵図等関連資料③



明治30 (1897) 年
「鹿児島市街實地踏査圖」(部分) (藪田1908)



大正7年 (1918) 年
「鹿児島市街便覧圖 實地測量地番里程入」
(部分) (若松辰義 製・若田書房1918) (国立国会図書館蔵)

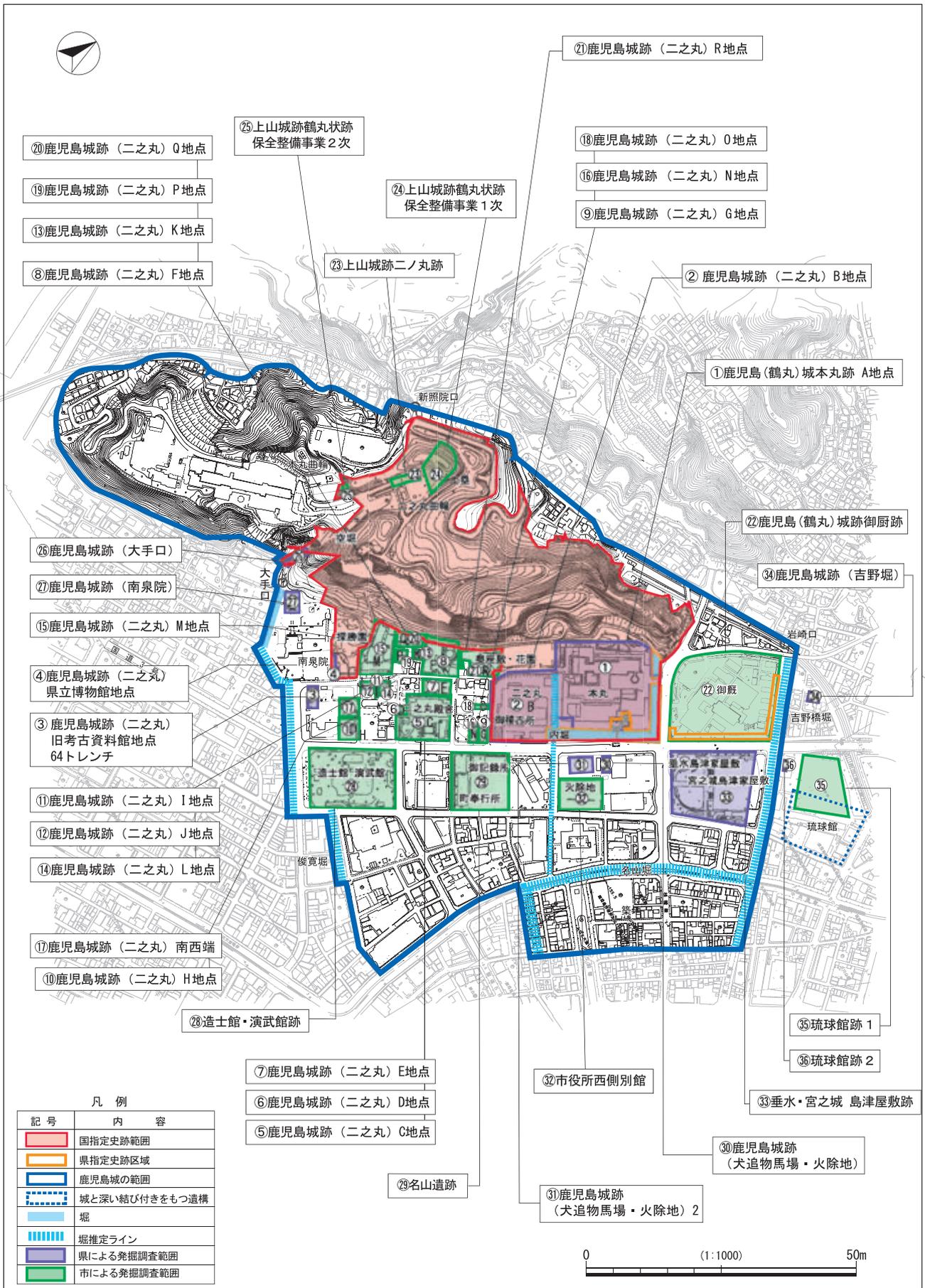


昭和14 (1939) 年
「鹿児島市職業別明細圖」(部分) (鹿児島市1995)



1948/3/30 (昭23) 米軍空撮 (国土地理院)
USA R-229-49

第4図 鹿児島城下絵図等関連資料④



凡例	
記号	内容
	国指定史跡範囲
	県指定史跡区域
	鹿兒島城の範囲
	城と深い結び付きをもつ遺構
	堀
	堀推定ライン
	県による発掘調査範囲
	市による発掘調査範囲

第5図 鹿兒島城跡過去の調査

第2表 鹿児島城跡過去の調査一覧

地図番号	地点名		調査の種類	調査主体	備考	
1	鹿児島(鶴丸)城本丸跡	本丸跡(A地点)	明治100周年記念館(現鹿児島県・歴史美術センター黎明館)(A地点)	本調査	鹿児島教委	本丸跡の建物の基礎が良好に残存を確認。建物などは元禄9年以降のもの。
			石垣修復工事(御角櫓跡)(A地点)	本調査	鹿児島教委	御角櫓跡の基礎の一部を確認
			鶴丸城跡保全整備事業石垣修復等	確認調査	鹿児島教委	御楼門の地下構造を確認。兵具所や能舞台跡、御角櫓跡等の基礎構造を確認。鹿児島城跡全体の排水構造を確認。
			鶴丸城跡保全整備事業		鹿児島埋セ	唐御門の礎石を確認。本丸大奥跡では、本丸大奥とその外側の道(御茶道通り)との境の塀を確認。
2	二之丸跡B地点	二之丸跡(B地点)	本調査	鹿児島教委	御稽古所、御台所等を確認。本丸と二ノ丸境の堰井堰を確認。	
		二之丸跡城跡保全整備事業	確認調査	鹿児島埋セ	昭和52年度確認された井堰を再確認し、構造等を記録。	
		鶴丸城跡保全整備事業	確認調査	鹿児島埋セ	明確な遺構は確認できず。	
	3	二之丸跡(旧考古資料館地点)	鶴丸城跡保全整備事業	確認調査	鹿児島埋セ	役所曲輪の長屋の基礎と考えられる遺構を確認。
	4	二之丸跡(県立博物館地点)	確認調査・本調査	確認・本調査	鹿児島埋セ	近世～近代と考えられる3列の布地業を確認。
	5	二之丸跡C地点	個人住宅建設	確認調査	鹿市教委	江戸時代後期の二之丸殿舎と考えられる建物跡を確認。
	6	二之丸跡D地点	マンション建設	確認調査	鹿市教委	鹿児島城に繋がる遺構なし
	7	二之丸跡E地点	マンション建設	本調査	鹿市教委	建物跡、水利施設等の二之丸跡に関わる多くの遺構を確認した。「二大」、「二裏」など二之丸を示唆する記銘が残された焙烙や磁器が出土した。
	8	二之丸跡F地点	近代文学館・メルヘン館建設	確認調査	鹿市教委	藩政期の排水溝を確認。
	9	二之丸跡G地点	宗教道場の建設	本調査	鹿市教委	水道石管は当時としては珍しい耐圧式。花十字紋K軒丸瓦が出土。
	10	二之丸跡H地点	マンション建設	確認調査	鹿市教委	近世二之丸跡の生活面はすでに消滅している。
	11	二之丸I地点	店舗建設	確認調査	鹿市教委	近世二之丸跡の生活面はすでに消滅している。
	12	二之丸J地点	集合住宅建設	確認調査	鹿市教委	鹿児島城に繋がる遺構、遺物なし。
	13	二之丸K地点	個人住宅建設	確認調査	鹿市教委	近現代の建物基礎が確認された。
	14	二之丸L地点	建物増築	確認調査	鹿市教委	鹿児島城に繋がる遺構、遺物なし。
	15	二之丸M地点	共同住宅建設	確認調査	鹿市教委	石垣は近代のものと考えられる。
	16	二之丸N地点	土地売買	確認調査	鹿市教委	多くの関連遺構、遺物が確認された。
	17	二之丸南西端	環境保健建物基礎撤去及び汚染土壌入れ替え	確認調査	鹿市教委	近世の遺物が確認された。
	18	二之丸O地点	宅地造成	確認調査	鹿市教委	鹿児島城に繋がる遺構なし
	19	二之丸P地点	個人住宅建設	確認調査	鹿市教委	鹿児島城に繋がる遺構なし
	20	二之丸Q地点	マンション建設	確認調査	鹿市教委	鹿児島城に繋がる遺構なし
21	二之丸R地点①	駐車場建設	確認調査	鹿市教委	近世の遺構・遺物が確認された。	
21	二之丸R地点②	温泉施設建設	確認調査	鹿市教委	近世の遺構・遺物が確認された。	
22	鹿児島(鶴丸)城跡(御厩跡)	治療棟増築及び駐車場改修・鹿児島医療センター増築工事	確認調査	鹿市教委	鹿児島城に繋がる遺構、遺物なし。	
鹿児島医療センター増築工事		本調査	鹿児島教委	確認：鹿児島城に繋がる遺構、遺物なし。 本調査：御厩跡関連遺構を確認、鋳造・火や鍛冶に関連する遺物が出土。中世の遺物が確認。		
23	二之丸跡	城山公園トンネル工事	確認調査	鹿児島教委	鹿児島城に繋がる遺構、遺物なし。	
24	上山城跡	二之丸跡・土塁(ドン広場)	確認調査	鹿児島教委	切土と盛土2種類の土塁を確認。	
25		本丸・二之丸曲輪間の空堀		鹿児島教委	土塁に伴う空堀を確認	
26	鹿児島城跡(大手口)	鶴丸城跡保全整備事業	確認調査	鹿児島埋セ	3時期の遺構を確認。大手口が江戸時代を通じて維持されていたことを証明	
27	鹿児島城跡(南泉院)	鶴丸城跡保全整備事業	確認調査	鹿児島埋セ	中世の遺構面を確認、南泉院造立以前の土塁、造立時の造成土を確認。	
28	造士館跡・演武館跡	中央公園地下駐車場建設	本調査	鹿児島教委	造士館に関連する排水溝等を確認。	
29	名山遺跡	1次	確認調査	鹿児島教委	城下町の排水施設を知る上で重要である。	
		2次		鹿児島教委	遺構は近代	
		3次		鹿児島教委	遺構は近代	
		5次		鹿児島教委	排水溝は、喜入氏屋敷と永吉島津家屋敷の境の溝の可能性はある。	
30	鹿児島城跡(犬追物馬場・火除地)	鹿児島第3合同庁舎整備事業	本調査	鹿児島埋セ	元禄9(1696)年の大火の処理層を確認。中世の遺構・遺物を確認。犬追物馬場の柵列を確認。	
31	鹿児島城跡(犬追物馬場・火除地)2	鹿児島第3合同庁舎整備事業	本調査	鹿児島埋セ	犬追物馬場の柵列と考えられる杭を確認。文献などから馬場の規模を復元	
32	市役所西側別館	鹿児島市役所本庁舎西別館建設	試掘	鹿児島教委	鹿児島城に繋がる遺構なし	
33	垂水・宮之城島津家屋敷跡	かごしま県民交流センター建設	本調査	鹿児島埋セ	京焼風陶器を中心とした墨書陶磁器を多く確認、イギリス・ドーソン製の皿を確認。	
34	鹿児島城跡(吉野堀)	鶴丸城跡保全整備事業	確認調査	鹿児島埋セ	吉野堀の埋土の可能性のある堆積を確認。	
35	琉球館跡	校庭整備事業	確認調査	鹿児島教委	他の遺跡に比べて琉球焼、清朝磁器の占める割合が高い。琉球館と種子島屋敷の遺構が確認された。	
		長田中学校銃剣道場改築		鹿児島教委	吉野堀の埋土を確認している可能性がある。	
36		鶴丸城跡保全整備事業(範囲確認)		鹿児島埋セ	吉野堀南側の土塁か?鹿児島城跡築城以前の中世の遺構を確認。	



第6図 周辺遺跡

第3表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	種類	時代	備考	遺跡 GIS
1	鹿児島(鶴丸)城跡	城山町	平地	縄文時代 古代 中世 近世 近現代	鹿児島県教委 1983『鹿児島(鶴丸)城本丸跡』 鹿児島市教委 1984『鹿児島(鶴丸)城二之丸跡 C 地点』 鹿児島県教委 1991『鹿児島城二之丸遺構編』 鹿児島県教委 1992『鹿児島城二之丸遺物編』 鹿児島市教委 1995『鹿児島(鶴丸)城二之丸跡 F 地点』 鹿児島市教委 2000『鹿児島(鶴丸)城二之丸跡 G 地点』 鶴丸城御楼門建設協議会・鹿児島県 2016『鹿児島(鶴丸)城跡保存活用計画』 鹿児島市教委 2017『鹿児島(鶴丸)城御厩跡』 鹿児島県埋セ 2020『鹿児島(鶴丸)城御楼門跡周辺』 鹿児島県立埋セ 2022『鹿児島(鶴丸)城跡—北御門周辺・御角橋跡周辺・能舞台跡ほか—』 鹿児島県立埋セ 2022『鹿児島(鶴丸)城跡—総括報告書—』ほか	201 062
2	仙巖園附花倉御仮屋庭園	吉野町 9700-1	-	近世		201 -
3	雀ヶ宮	吉野町雀ヶ宮深堀	台地	弥生時代, 古墳時代		201 027
4	矢来門	吉野町雀ヶ宮矢来門	丘陵	縄文時代 早期		201 104
5	集成館跡	吉野町磯	平地	近世		201 145
6	鹿児島紡績所跡	吉野町竜ヶ水	平地	近世	鹿児島市教委 2000『鹿児島紡績所跡 D 地点』 鹿児島県埋セ 2012『鹿児島紡績所跡・祇園之洲砲台跡・天保山砲台跡』	201 156
7	雀ヶ宮 B	吉野町雀ヶ宮	丘陵	縄文時代 草創期		201 142
8	前平	吉野町雀ヶ宮前平	台地	縄文時代 早期		201 005
9	滝ノ上火薬製造所跡	吉野町滝ノ上	平地	近世	鹿児島市教委 1998『滝ノ上火薬製造所跡』 鹿児島県埋セ 2021『滝ノ上火薬製造所跡・高熊山激戦地跡・笠取戦跡・岩川官軍墓地』	201 127
10	橋ノ口城跡	坂元町字城ノ後	台地	中世		201 069
11	清水城跡	清水町大興寺岡	丘陵	中世, 近世		201 055
12	東福寺城跡	清水町田之浦	丘陵	古代, 中世		201 054
13	尾頭小城跡	稲荷町字後迫	平地	中世		201 083
14	浜崎城跡	清水町田之浦	丘陵	中世		201 058
15	祇園之洲砲台跡	清水町祇園之洲	平地	近世	鹿児島市教委 1998『祇園之洲砲台跡』 鹿児島県埋セ 2012『鹿児島紡績所跡・祇園之洲砲台跡・天保山砲台跡』	201 146
16	浜町	浜町	平地	近世	鹿児島県立埋蔵文化財センター 2000『浜町遺跡』	201 132
17	大乘院跡	稲荷町清水中校庭	丘陵	中世, 近世	鹿児島市教委 1983『大乘院跡』 鹿児島市教委 1985『大乘院跡』	201 082
18	福昌寺跡	池之上町玉龍高校一帯	平地	中世, 近世	鹿児島市教委 2008『福昌寺跡』 鹿児島市教委 2014『県指定史跡 福昌寺跡島津家墓所』 鹿児島市教委 2014『鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書 IX —福昌寺跡—』	201 144
19	丸岡	坂元町たんたとう丸岡	丘陵	縄文時代 早期・後期		201 003
20	南洲神社	上竜尾町南洲神社境内	台地	縄文時代 早期		201 007
21	大龍遺跡群	大竜町・池之上町・春日町	台地	縄文時代 前期・中期・後期・晩期, 弥生時代, 古墳時代, 中世, 近世	鹿児島市教委 2001『大竜遺跡』 鹿児島市教委 2001『大竜遺跡』 鹿児島市教委 2001『大竜遺跡 B 地点』 鹿児島市教委 2014『鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書 IX —大竜遺跡 I・J 地点—』 鹿児島市教委文化財課 2017『鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書 XI—大竜遺跡 K 地点—』	201 009
22	内城跡	大竜町	平地	中世		201 056
23	催馬楽城跡	坂元町矢上	丘陵	中世		201 057
24	堅野冷水窯跡	冷水町堅野	丘陵	近世	社団法人鹿児島共済会南風病院 1976『堅野(冷水)窯跡』	201 143
25	琉球館跡	小川町	-	近世	鹿児島市教委 2003『鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書—共研公園遺跡・琉球館跡—』	201 159
26	垂水・宮之城島津家屋敷跡	山下町	平地	近世	鹿児島県埋セ 2003『垂水・宮之城島津家屋敷跡』	201 134
27	鹿児島城跡(犬追物馬場・火除地)	山下町 1 3 番 2 1 号	-	中世, 近世	鹿児島県埋セ 2021『鹿児島城跡(犬追物馬場・火除地)』 鹿児島県埋セ 2023『鹿児島城跡(犬追物馬場・火除地)』2	201 411
28	名山	山下町名山小校庭	平地	近世, 近現代	鹿児島市教委 1988『名山遺跡』 鹿児島市教委 2002『名山遺跡』	201 105
29	造士館・演武館跡	山下町 4-1, 4-2	平地	近世, 近現代	鹿児島市教委 2003『造士館・演武館跡』	201 106
30	上山城跡	新照院町	丘陵	中世		201 061
31	夏蔭城跡	草牟田町夏蔭	丘陵	中世, 近世, 近現代		201 133
32	伴掾館跡	伊敷町中福良	丘陵	古代, 中世		201 060
33	玉里邸跡	玉里町	-	近世	鹿児島市教委 2004『鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書 2—玉里邸跡・墓下遺跡—』 鹿児島市教委文化課 2015『名勝旧島津氏玉里邸庭園整備事業工事を完了報告書』	201 157
34	玉里	玉里町(旧練兵場跡)	平地	弥生時代 初頭~前期		201 020
35	共研公園	中央町	-	弥生時代, 古代	鹿児島市教委 2003『鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書—共研公園遺跡・琉球館跡—』	201 158
36	武	武一丁目	平地	弥生時代, 古墳時代, 中世	鹿児島市教委 2002『武遺跡 E 地点』 鹿児島市教委 2004『武遺跡 F 地点』 鹿児島市教委 2004『武遺跡 E 地点』	201 129
37	鹿大構内	郡元一丁目鹿大構内	平地	弥生時代, 古墳時代	鹿児島市教委 2014『鹿大構内遺跡郡元団地 JT 跡地』ほか	201 023

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

1 発掘調査の方法

本遺跡の調査は、鹿児島城グリッドを延長して5mグリッドを設置して行った。鹿児島城グリッドは御角櫓南東角を基準として東側（国道10号線）の石垣に平行に軸及びグリッドを設定している。北から南へ76'～83'、西から東へE～Nとグリッドを設定した。

本調査は、安全な作業環境を保持しつつ、鹿児島城の遺構を可能な限り保護するように調査を進めることとした。調査区が800㎡と狭いため、排土場と重機の通り道を確保しつつ、中央ベルトを設けて、北側と南側に分けて調査を行うこととし、まずは、北側の上層の攪乱部分を除去し、包含層の残存を確認する作業を行った。攪乱部は深さ170cm以上に達していたが、調査区の北東側のⅡ層では、石列と敷石のような凝灰岩を検出した。石列は人頭大からこぶし大までの凝灰岩の集合で成り、瓦やレンガ、ビンのかけら等も混入していた。上部にコンクリートが付着している礫も見られたため、比較的新しい時期の近代の遺構と判断し、石列の配置状況、敷石のような凝灰岩を写真等に記録し、石列の除去を行った後、人力によって掘り下げを行った。

次に南側に調査区を拡げ、重機によって表土や攪乱部を除去した後、人力による掘り下げを行った。南東側に土塁のような盛土を検出し、南西側に広い範囲で残存部分を確認したので調査を実施した。南西側の排土の置き場がなくなったため、ダンプによる土の搬出を行いながら調査を継続した。Ⅲ層以下は遺構が検出された段階で写真撮影、配置図・実測図等の測量・記録作業を行った。また、重機の通り道であった北西側は、中央ベルトの土層断面の調査により、攪乱部分が下層まで掘り込んでいることが想定されたが、確認のため東西トレンチを設定し下層を確認し、写真撮影・実測図等の測量・記録作業を行った。

2 遺構の認定と調査方法

検出された遺構については、遺構の種類ごとに検出された順で遺構名と遺構番号を付与した。

遺構検出はⅡ層・Ⅲ層・Ⅳ層・Ⅴ層上面で試みた。攪乱も多く、層序を慎重に把握しながら行った。

Ⅱ層からは、石列や礎石、石組排水溝を検出した。Ⅲ層からは瓦列（雨樋遺構）や溝状遺構を検出した。Ⅴ層からは、柱穴列や土坑、瓦溜り、溝状遺構などを検出した。

遺構の調査については、それぞれの遺構の特徴に適した道具（移植ごて、お玉杓子、竹べら等）を用いて慎重に調査を行った。記録は検出状況の写真撮影を行った後、

平面プランの実測、半掘、半掘状況写真撮影、断面実測、埋土の記録、出土遺物の写真撮影、実測、遺物取上げ、完掘、完掘状況写真撮影、完掘状況実測を行った。

遺物は、小片や攪乱部分にからむものはグリッドごとを一括して取上げを行い、その他の遺物は、遺物出土状況の写真撮影を行った後、平板による遺物取上げを行った。

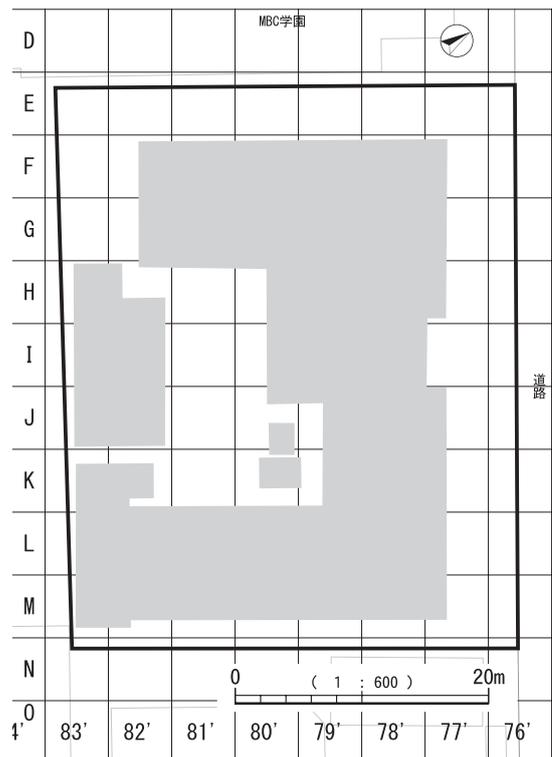
保護の方法は、現地で建築事務所と打合わせを行い、工事の影響を受けない（基礎や梁がない）範囲と深度についてはそれ以上の調査を行わず、指導助言やこれまでの御楼門跡等の調査時の手法などを参考にシートで覆い、その上に土嚢をのせて保護した。

調査終了後は、埋め戻しを行い、立入禁止柵の設置など安全対策を実施した。発掘調査完了後、商工政策課へ引き渡しを行った。

3 整理作業の方法

整理作業は、令和6年度に行い、最初に遺物の水洗や注記、接合などの基礎整理作業を行った。

注記は注記記号「二ノ丸」を頭に「調査区」、「層」、「遺構名」の順で記入した。基礎整理作業後、実測遺物の選別・実測・拓本・トレース等の製図作業を行った。木製品に関しては、乾燥に注意しながら、分類・実測・トレース等の製図作業を行った後、自然科学分析、保存処理を行った。



第7図 調査範囲（アミカケは旧環境保健センター建物）

第2節 層序

1 層序

調査区は、平成27年に旧環境保健センター建物基礎の解体工事に伴った土壌汚染除去のための土壌の入れ替えが行われていた。

調査前に重機で表土を除去すると、地表面から約2.0m掘削されていることが確認され、この層が入れ替え土壌（I層）であることが明らかとなった。また、調査区の場合によっては、建物基礎の除去などもあり、入れ替えられた土壌の層厚には偏りがあることが確認された。

I層（表土）除去後、II層（黒色砂質土）の残存が確認された。特に調査区北東側は良好に堆積していたが、調査区全体は攪乱が多く、層判別が困難な箇所も多かった。また、II層中からはガラス片やコンクリートなども出土することから、II層は近代から現代に相当する攪乱層と判断し、出土遺物はII層出土の遺物としてではなく、攪乱として取り上げた。

遺構では、凝灰岩製の石組排水溝や石列などが確認されたが、石組排水溝については原位置を留めてはいないと考えられる。

III層はH～K-80'・81'区のみ台地状に残存しており、周辺は削平されていた。III層が残存していた箇所から丸瓦を利用した瓦列（雨樋遺構）や溝状遺構（SD2）が検出され、遺物は陶磁器や瓦が出土した。硬くしまった層で、近世の造成面と考えられる。

IV層は赤褐色砂質土で、鉄分を含む硬質土である。調査区のほぼ全域の堆積が確認されたが、L・M-80'～82'区はIV層が削平されており、確認できなかった。遺構、遺物は確認されなかったが、III層と一連の近世の造成面と考えられる。

グライ層はIV・V層間にH～K-77'～82'に確認された水分を含む黒灰色粘質土である。土壌中には細かな砂がラミナ堆積していた。一定期間水分が滞留していたと考えられる。

J区以西部はVI層以下が水分を多く含む層であり、湧水が確認された。この層を掘り込んだ廃棄土坑と考えられるSK1内から木製品が多く出土した。

V層は調査区全体での層の広がりを確認された。褐灰色砂質土で硬くしまり、鉄分を多く含む。近世の造成面と考えられる。

V層からピット列や溝状遺構（SD1）などの遺構のほか、近世遺物も多く出土した。遺物は被熱したものも散見され、二之丸の作事や拡張による大きな改変前の近世前期の層と想定される。

VI層は、砂層で無遺物層である。J区を境に、西側（H・I区）は水分を含んだ黒灰色砂層で、東側（J～M区）は水分を含まない乾燥した砂層であった。

VI層の砂層は鹿児島城東側（名山遺跡・鹿児島城跡（火

第4表 基本土層

	時期	特徴		層厚
I層	表土	表土	旧環境保健センター建物建て替え時の入れ替え土壌	150～240 cm
II層	近代～現代	黒色砂質土（白パミス混）	近代～現代の攪乱層	10～20 cm
III層	近世1 (グライ層)	黒褐色硬質土	造成面	30～50 cm
IV層		赤褐色砂質土（砂混）	鉄分沈殿層	10～20 cm
		黒灰色粘質土（部分堆積）		10～20 cm
V層	近世2	褐灰色砂質硬質土（鉄分沈殿層）	造成面	10～20 cm
VI層	無遺物層	黒灰色～黄橙色砂	細かな砂層	—

除地・犬迫物馬場）など）でも確認されている層である。

VI層の堆積等から調査区は西側へ地理的に傾斜していることから、VI層の脆弱な層上に大規模な造成を行い、二之丸の造成を行ったことが明らかとなった。

よって、本調査区ではVI層は築城前の層、VI層以上の近世の造成面が2面（III・V層）残存していることが調査の成果から確認された。

第3節 近世の調査成果

1 概要

本遺跡で残存していた近世相当層はIII～V層であった。各層が全面に堆積しているわけではなく、所々で各層があったり、なかったりする。造成や削平による影響であろう。

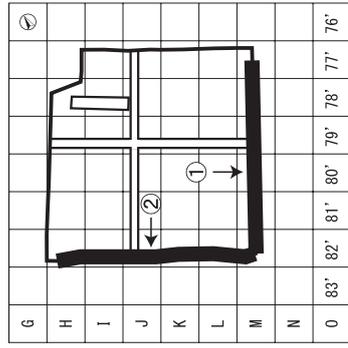
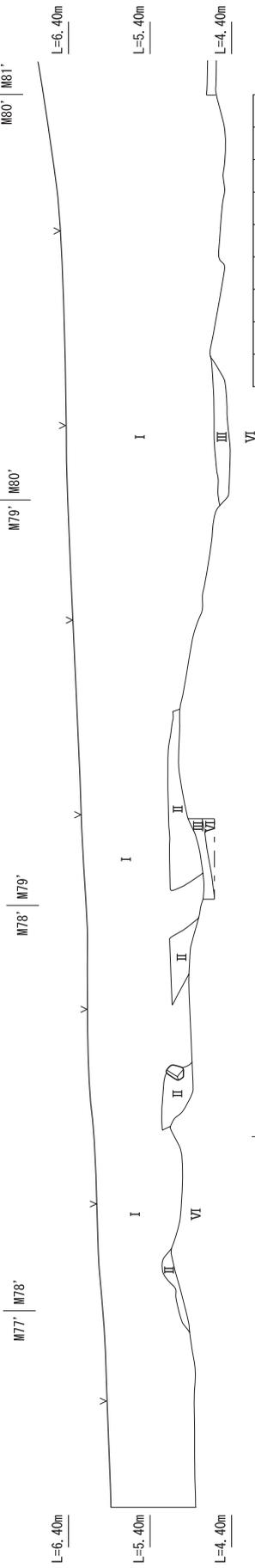
III層は調査区の中央部に台地状に堆積しており、瓦列と溝状遺構（SD2）が検出された。17世紀後半から19世紀の瓦や陶磁器が出土したことから、近世期の造成土と考えられる。

IV層は調査区のほぼ全面に堆積していたが、東側では削平され確認することができなかった。遺構や遺物は検出されなかったが、III層と一連の造成面と考えられる。

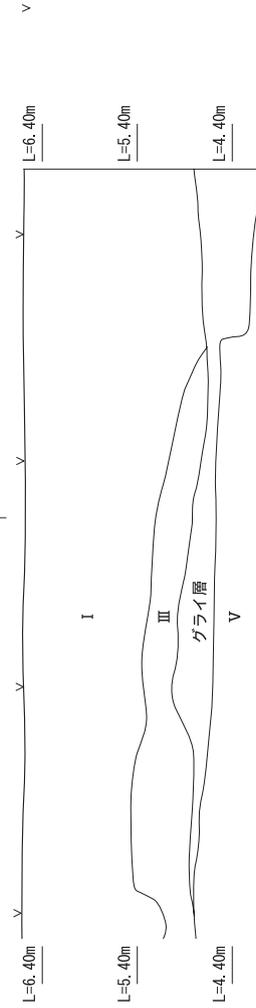
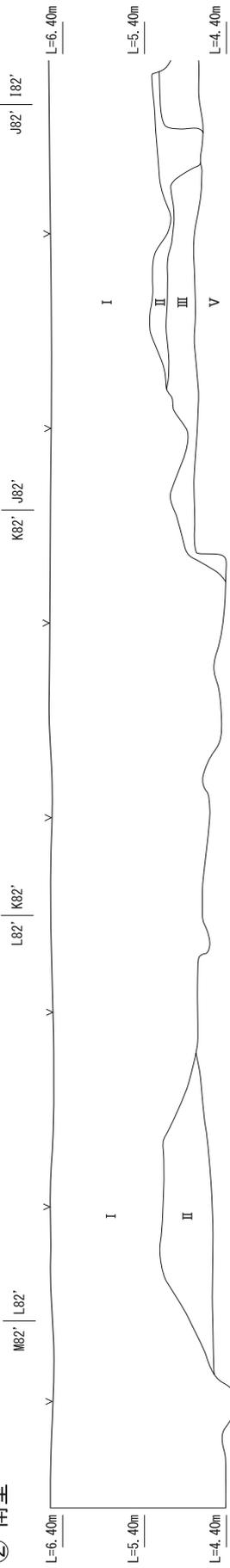
V層は調査区のほぼ全面に堆積していたと考えられる。V層からは溝状遺構（SD1）が検出され、溝状遺構（SD1）と関連する土坑や瓦溜りが検出された。溝状遺構（SD1）が低く下がる堀のようになっているところでは、水成堆積した跡が見られ、水分を多く含む黒灰色粘質土からは、陶磁器や木片が多く検出されている。また、調査区の中央部では、ほぼ東西に縦断する柱穴列も検出されている。根石を伴う柱穴も多く、埋土からは陶磁器が検出されている。

本節では、遺構が検出された層ごとに各遺構・遺物等についてまとめ、各層の詳細な時期については、遺構・遺物等を踏まえ、後述する。

① 東壁

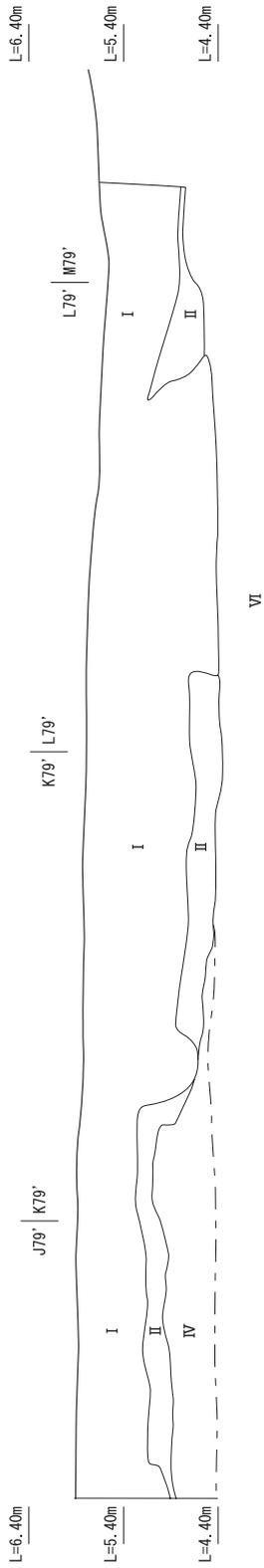


② 南壁

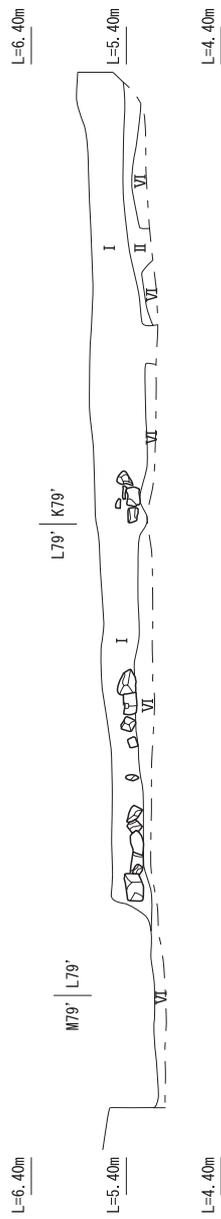


第8図 土層断面図①

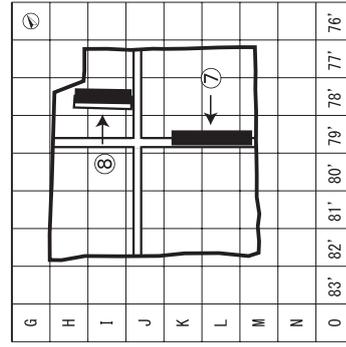
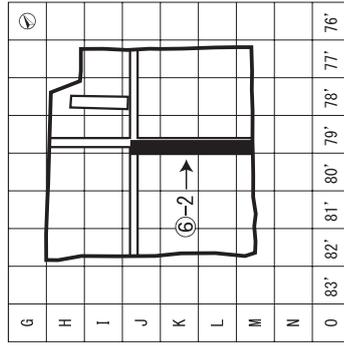
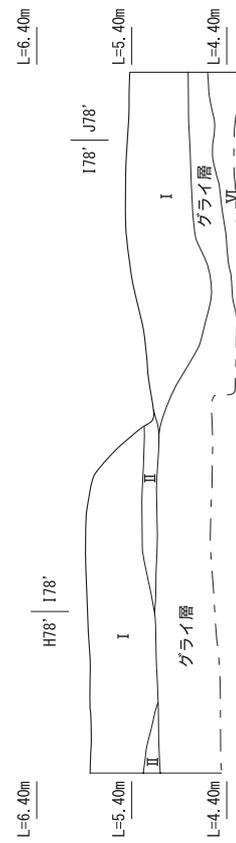
⑥-2 中央ベルト南壁



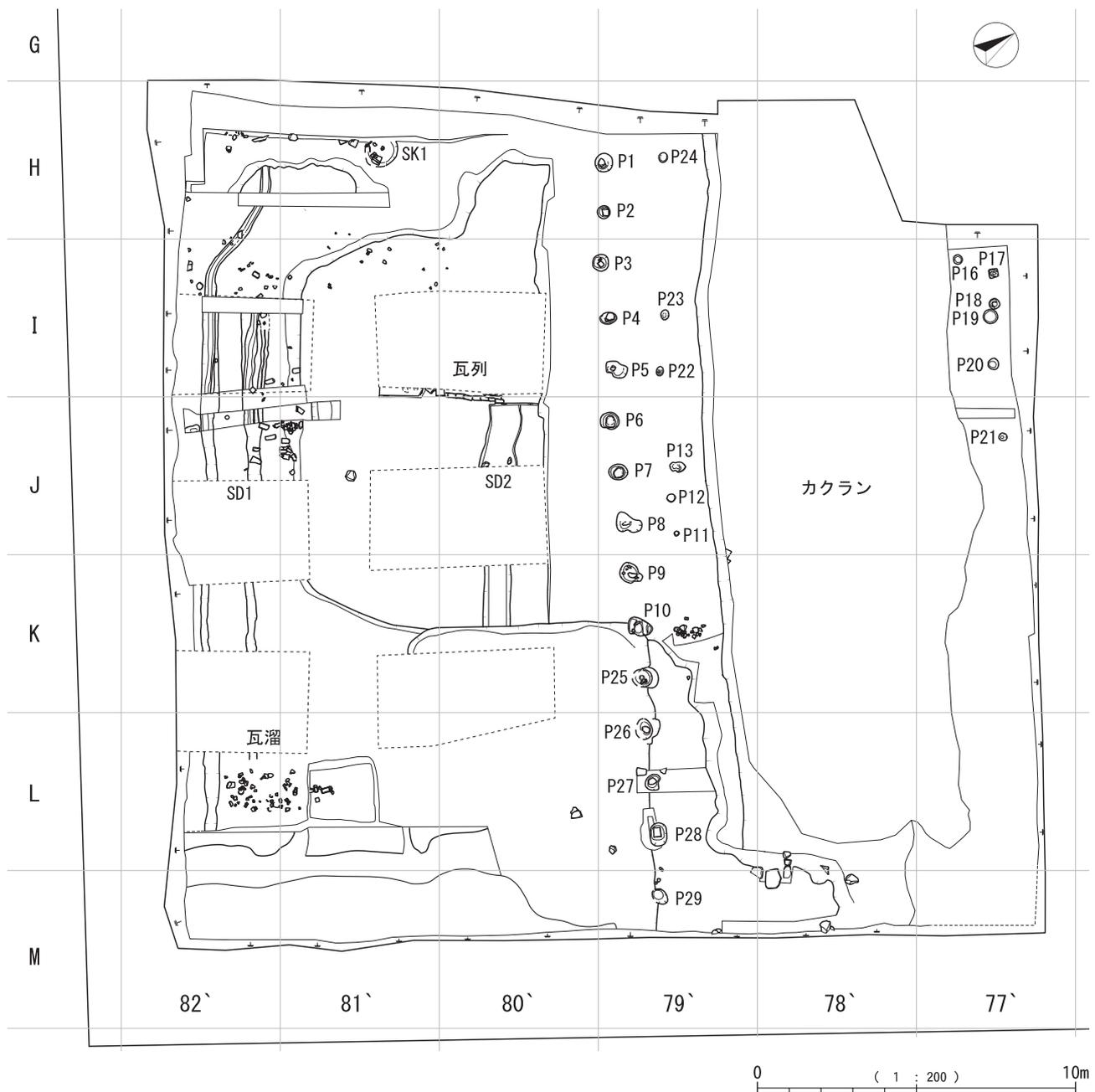
⑦ 中央ベルト北壁



⑧ 東西トレンチ



第11図 土層断面図④



第12図 Ⅲ・Ⅴ層遺構配置図

2 Ⅴ層 (第12～27図)

Ⅴ層は近世相当の最下層で、褐灰色砂質土で、硬くしまり、鉄分を多く含む。Ⅴ層から柱穴列や溝状遺構 (SD1) などが確認された。また、遺物は17世紀後半から18世紀前半の陶磁器や瓦等が多く出土している。また、Ⅴ層を掘り込んだ土坑 (SK1) 内からは木製品が多く出土した。

(1) 柱穴列 (P1～P10, P25～P29)

調査地区のH～M-79'区で、約25mにわたり東西に並ぶ一連の柱穴列 (15基) を検出した。柱間は約1.7～1.8mを基本としている。南北に対となるような柱穴は見られず、横に広がりを見せない。これらの柱穴には

根石が伴うものが多く、下層には凝灰岩、上層には安山岩の材質の異なる根石が伴っていた。埋土も2層に分かれているものが多く、上層はしまりのある黒褐色土、下層はしまりのない砂質土であった。遺物は陶磁器を伴う柱穴が検出された。

P1柱穴

検出状況 H-79'区Ⅴ層上面で検出。

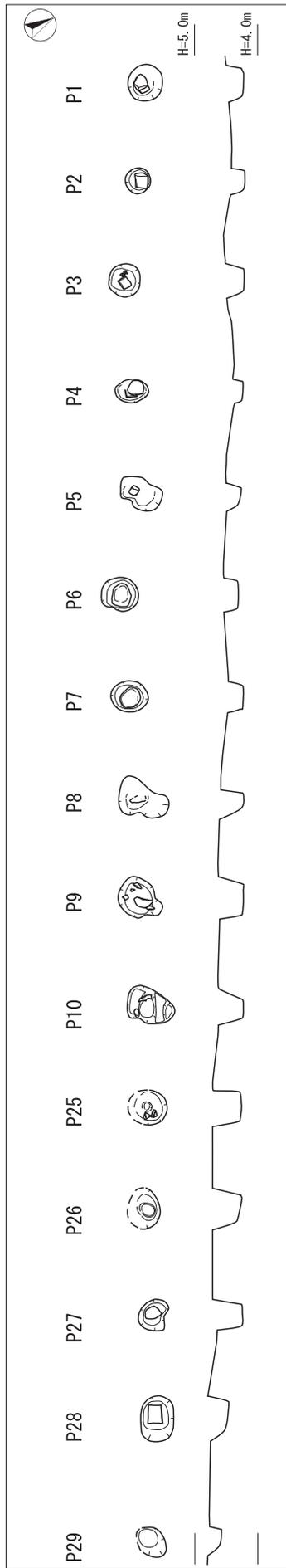
形状 楕円形

規模 幅約58cm×55cm、深さ約23cm。

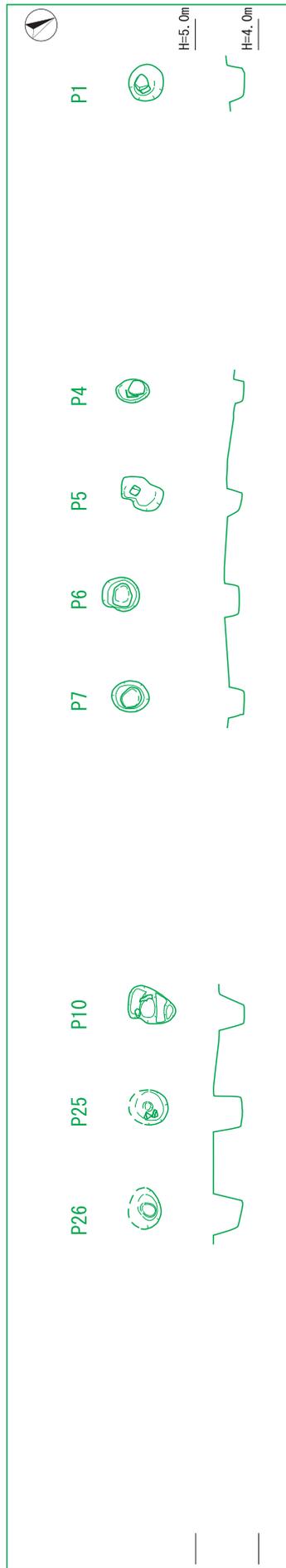
埋土 上層はしまりのある黒褐色土が深さ約20cmまであり、下層はしまりのない砂質土。

根石 根石が2つある。検出面と同じ高さに、厚さ

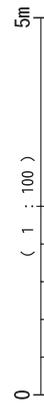
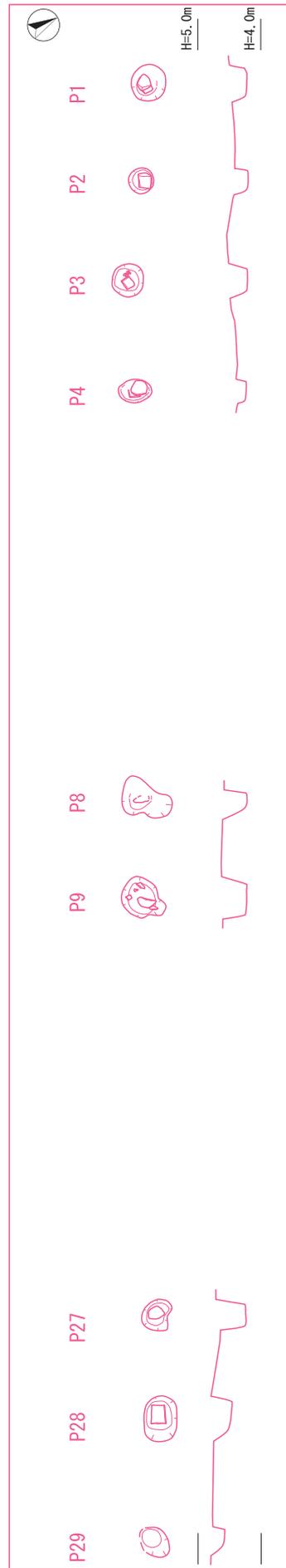
H~M - 79' 区ビット列



皿層ビット



V層ビット



第13図 H~M - 79' 区柱穴列

約 12cm の安山岩。深さ約 18cm のところに厚さ約 5 cm の凝灰岩。
遺物 遺物は出土していない。

P 2 柱穴

検出状況 H-79' 区V層上面で検出。
形状 円形
規模 幅約 42 cm × 40cm, 深さ約 23cm
埋土 1層はしまりのある黒褐色土。
根石 根石が1つある。深さ9 cmのところから底辺までの厚さ約 14cm の凝灰岩。
遺物 遺物は出土していない。

P 3 柱穴

検出状況 I-79' 区V層上面で検出。
形状 円形に近い楕円形
規模 幅約 52cm × 50cm, 深さ約 31cm
埋土 上層はしまりのある黒褐色土が深さ約 20cm まであり, 下層はしまりのない砂質土。
根石 根石が1つある。深さ約 22cm のところから底辺までの厚さ約 9 cm の凝灰岩。
遺物 遺物は出土していない。

P 4 柱穴

検出状況 I-79' 区V層上面で検出。
形状 楕円形
規模 幅約 52cm × 38cm, 深さ約 18cm
埋土 上層はしまりのある黒褐色土が深さ約 8 cm まであり, 下層はしまりのない砂質土。
根石 根石が2つある。検出面と同じ高さに, 厚さ約 5 cm の安山岩。深さ約 7 cm のところに厚さ約 10cm の凝灰岩。
遺物 遺物は出土していない。

P 5 柱穴

検出状況 I-79' 区V層上面で検出。
形状 不定形
規模 幅約 62cm × 32cm, 深さ約 20cm
埋土 上層はしまりのある黒褐色土が深さ約 13cm まであり, 下層はしまりのない砂質土。
根石 根石が1つある。検出面と同じ高さに, 厚さ約 10cm の安山岩。
遺物 遺物は出土していない。

P 6 柱穴

検出状況 J-79' 区V層上面で検出。
形状 楕円形
規模 幅約 59cm × 53cm, 深さ約 28cm

埋土 上層はしまりのある黒褐色土が深さ約 11cm まであり, 下層はしまりのない砂質土。
根石 根石が1つある。深さ約 8 cm から厚さ約 9 cm の安山岩。
遺物 遺物は出土していない。

P 7 柱穴

検出状況 J-79' 区V層上面で検出。
形状 楕円形
規模 幅約 60cm × 50cm, 深さ約 25cm
埋土 上層はしまりのある褐色土が深さ約 15cm まであり, 下層はしまりのない砂質土。
根石 根石が傾いた状態で1つある。深さ約 6 cm から厚さ約 7 cm の安山岩。
遺物 遺物は出土していない。

P 8 柱穴

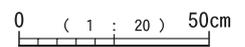
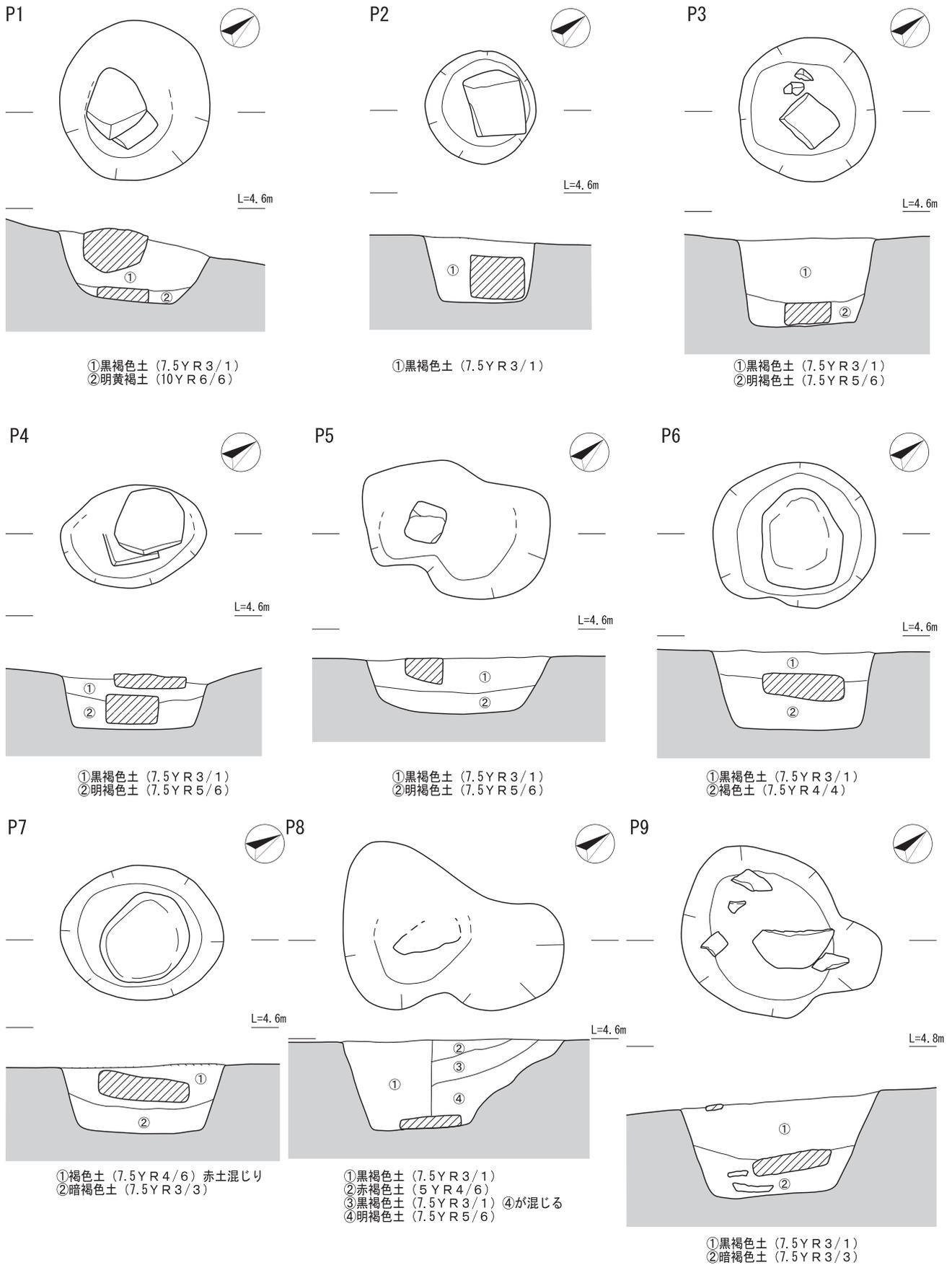
検出状況 J-79' 区V層上面で検出。
形状 不定形
規模 幅約 80cm × 43cm, 深さ約 32cm
埋土 南側は1層はしまりのある黒褐色土があり, 北側の土層は赤褐色土の下にしまりのある黒褐色土が深さ約 15cm まであり, 下層はしまりのない砂質土。
根石 根石が1つある。深さ約 28cm から厚さ約 4 cm の凝灰岩。
遺物 遺物は出土していない。

P 9 柱穴

検出状況 K-79' 区V層上面で検出。
形状 不定形
規模 幅約 72cm × 60cm, 深さ約 34cm
埋土 上層はしまりのある黒褐色土が深さ 20cm まであり, 下層はしまりのない砂質土。
根石 根石が1つある。深さ約 20cm から厚さ約 6 cm の安山岩。
遺物 1・3は薩摩焼である。1は小型の甕で口縁部上面は露胎し, 胴部に鉄釉が設釉される。内外面にはタタキ痕がみられる。3は広口の鉢で二耳もしくは四耳をもつ。全体的に被熱を受けている。2はタイの壺である。黒釉で耳部をもつ。

P 10 柱穴

検出状況 K-79' 区V層上面で検出。
形状 不定形
規模 幅約 75cm × 55cm, 深さ約 28cm で底面南側がやや深く, 中央部が浅く, 端部にかけて傾



第 14 図 柱穴 (P1 ~ P9)

斜がつく。
埋 土 上層はしまりのある暗赤褐色土が深さ約
20cm まであり、下層はしまりのない砂質土。
根 石 根石は検出されていない。
遺 物 4は薩摩焼の挿鉢である。

P 11 柱穴

検出状況 J-79' 区V層上面で検出。
形 状 ほぼ円形
規 模 幅約 16cm × 15cm, 深さ約 7 cm
埋 土 上層はしまりの強い褐灰色土が深さ約 4 cm
まであり、下層はしまりの有る砂質土。
根 石 根石は検出されていない。
遺 物 遺物は出土していない。

P 12 柱穴

検出状況 J-79' 区V層上面で検出された。
形 状 ほぼ円形
規 模 幅約 27cm × 25cm, 深さ約 16cm
埋 土 上層はしまりの強い褐灰色土が深さ約 7 cm
まであり、下層は、しまりの有る砂質土。
根 石 根石は検出されていない。
遺 物 遺物は出土していない。

P 13 柱穴

検出状況 J-79' 区V層上面で検出された。
形 状 不定形
規 模 幅約 50cm × 25cm, 南側が深く掘り込まれてお
り、深さは約 17cm で、北側の深さは約 7 cm。
埋 土 西側は粘質がやや有る褐色の砂質土で、東側は
粘質の有るやや明るいにぶい橙色土の砂質土。
根 石 根石は検出されていない。
遺 物 遺物は出土していない。

P 14 柱穴

検出状況 L-78' 区II層上面で検出。
形 状 ほぼ円形
規 模 幅約 80cm × 78cm, 深さ約 6 cm
埋 土 粘土質土。内側に根石を置いたのか浅く広い
凹みがある。
根 石 根石は検出されていない。
遺 物 遺物は出土していない。

P 15 柱穴

検出状況 M-78' 区II層上面で検出。
形 状 ほぼ円形
規 模 幅 80cm × 76cm, 深さ約 22cm
埋 土 黒褐色土の周囲に粘土質土がある。平たく大

きな凝灰岩を置くため、粘土質土で周囲を強
化している。
根 石 根石が 1つある。検出面と同じ高さに厚さ約
12cm の凝灰岩。
遺 物 遺物は出土していない。

P 16 柱穴

検出状況 I-77' 区V層上面で検出。
形 状 ほぼ円形
規 模 幅約 30cm × 28cm, 深さ約 17cm
埋 土 中心に粘性の弱いしまりのある、やや明るい
灰褐色土があり、その周囲に粘性がやや強く、
しまりの有るオレンジパミスを含む灰褐色土。
根 石 根石は検出されていない。
遺 物 遺物は出土していない。

P 17 柱穴

検出状況 I-77' 区V層上面で検出。
形 状 ほぼ方形
規 模 幅約 28cm × 27cm, 深さ約 16cm
埋 土 中心に粘性が弱く、しまりの有る褐色土があ
り、その周囲に、粘性が強くしまりが有る褐
灰色土。
根 石 根石は検出されていない。
遺 物 遺物は出土していない。

P 18 柱穴

検出状況 I-77' 区V層上面で検出。
形 状 円形
規 模 幅約 34cm × 34cm, 深さ約 20cm
埋 土 中心に粘性が強く、しまりが有る暗い黒褐色
土があり、その周囲に、粘性が強くしまりが
有る褐灰色土。
根 石 根石は検出されていない。
遺 物 遺物は出土していない。

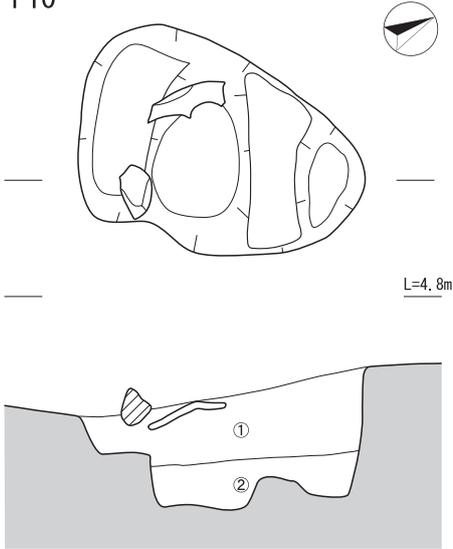
P 19 柱穴

検出状況 I-77' 区V層上面で検出。
形 状 ほぼ円形
規 模 幅約 45cm × 45cm, 深さ約 13cm
埋 土 粘性が強くしまりが有る褐灰色土
根 石 根石は検出されていない。
遺 物 遺物は出土していない。

P 20 柱穴

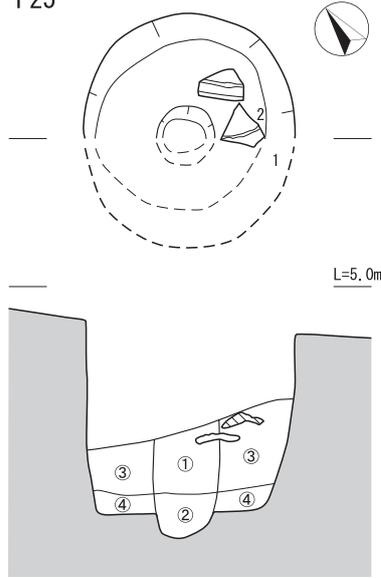
検出状況 I-77' 区V層上面で検出。
形 状 楕円形
規 模 幅約 35cm × 32cm, 深さ約 15cm

P10



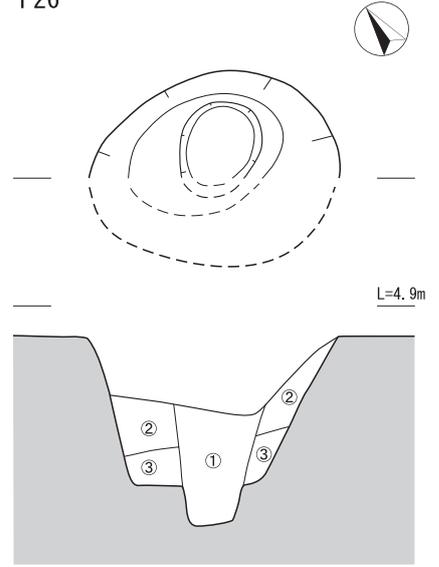
- ①暗赤褐色土 (5 YR 3/2)
- ②黒褐色土 (7.5 YR 3/2)

P25



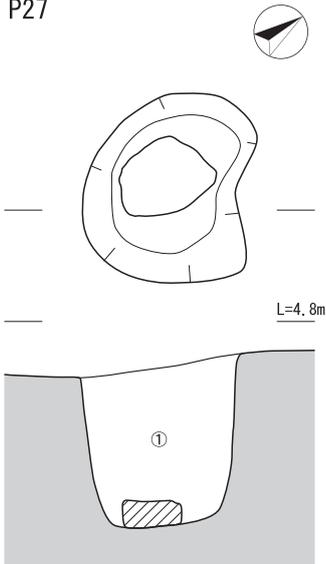
- ①褐色土 (7.5 YR 4/3)
- ②灰褐色土 (7.5 YR 4/2)
- ③褐色土 (7.5 YR 4/4)
- ④暗褐色土 (7.5 YR 3/3)

P26



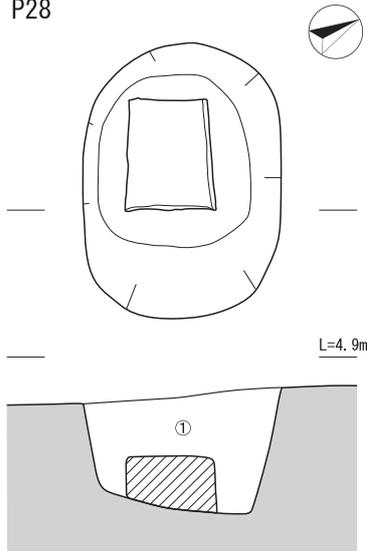
- ①褐色土 (7.5 YR 4/3)
- ②褐色土 (7.5 YR 4/4)
- ③暗褐色土 (7.5 YR 3/3)

P27



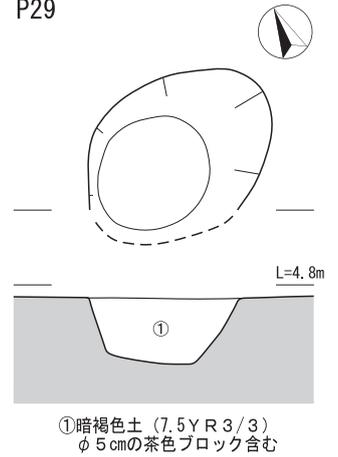
- ①黒褐色土 (7.5 YR 3/2)
茶色の土がブロック状に混ざる

P28



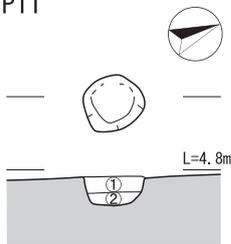
- ①暗褐色土 (7.5 YR 3/3)
φ 5cmの茶色ブロック含む

P29



- ①暗褐色土 (7.5 YR 3/3)
φ 5cmの茶色ブロック含む

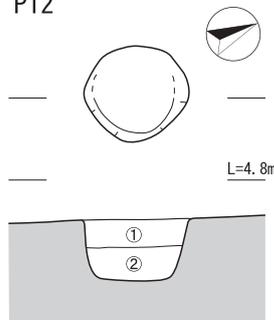
P11



- ①褐灰色土 (7.5 YR 5/1)
- ②褐色土 (7.5 YR 4/3)

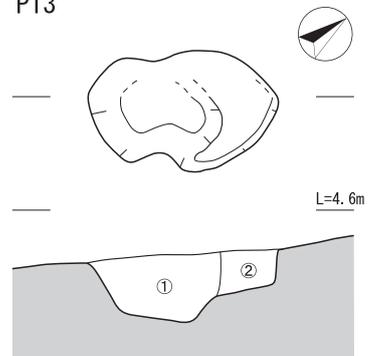
0 (1 : 20) 50cm

P12



- ①褐灰色土 (7.5 YR 5/1)
- ②褐色土 (7.5 YR 4/3)

P13



- ①褐色土 (7.5 YR 4/3)
- ②にぶい橙色土 (7.5 YR 5/4)

第 15 図 柱穴 (P10 ~ P13, P25 ~ P29)

埋 土 中心に粘性が強く、しまりが有る暗い黒褐色土があり、その周囲に、粘性が強くしまりが有る褐灰色土。

根 石 根石は検出されていない。
遺 物 遺物は出土していない。

P 21 柱穴

検出状況 J-77' 区V層上面で検出。

形 状 楕円形

規 模 幅約 25cm × 23cm, 深さ約 13cm

埋 土 中心に粘性が有り、しまりが有る、少し赤みのある黒赤褐色土があり、その周囲に、粘性が強くしまりが有る褐灰色土。

根 石 根石は検出されていない。

遺 物 遺物は出土していない。

P 22 柱穴

検出状況 I-79' 区V層上面で検出。

形 状 楕円形

規 模 幅約 29cm × 22cm, 深さ約 10cm

埋 土 上層はしまりの強い砂質土で、こまかい軽石が含まれる褐灰色土が深さ約 3 cm あり、下層はしまりのある褐色土。

根 石 根石は検出されていない。

遺 物 遺物は出土していない。

P 23 柱穴

検出状況 I-79' 区V層上面で検出。

形 状 楕円形

規 模 幅約 31cm × 25cm, 深さ約 20cm

埋 土 粘質性があり、しまりの有るやや黒い黒褐色土。

根 石 根石は検出されていない。

遺 物 遺物は出土していない。

P 24 柱穴

検出状況 H-79' 区V層上面で検出された。

形 状 楕円形

規 模 幅約 31cm × 28cm, 深さ約 12cm

埋 土 粘質性があり、しまりの有るやや黒い黒褐色土。

根 石 根石は検出されていない。

遺 物 遺物は出土していない。

P 25 柱穴

検出状況 K-79' 区V層上面で検出。

形 状 楕円形であるが南側が削られている。

規 模 幅約 60cm × 55cm, 深さ約 50cm

埋 土 穴底を固めたであろうと考える粘質性が弱く、しまりの有る褐色土が厚さ約 5 cm あり、その上に柱を固めたであろうと考える粘質性の弱い、しまりの有る褐色土が厚さ約 20cm あり、柱を抜いた後に埋められたであろう粘質性が弱く、しまりのやや有る褐色土が中心に厚さ約 20cm であった。

根 石 根石は検出されていない。

遺 物 5・6 は薩摩焼である。5 は播鉢で、口唇部には 2 枚貝の貝目が残る。6 は甕・壺の底部で全体的に被熱を受けている。

P 26 柱穴

検出状況 L-79' 区V層上面で検出。

形 状 楕円形であるが、南側が削られている。

規 模 幅約 65cm × 52cm, 深さ約 50cm

埋 土 穴底を固めたであろうと考える粘質性が弱く、しまりの有る暗褐色土が厚さ約 10cm あり、その上に柱を固めたであろうと考える粘質性の弱い、しまりの有る褐色土が厚さ約 15cm ある。柱を抜いた後に埋められたであろう粘質性が弱く、しまりのやや有る褐色土が中心に厚さ約 30cm であった。

根 石 根石は検出されていない。

遺 物 7 は青花の皿で、内面見込みに草花文がある。高台（畳付～見込み）には融解した砂目が付着している。漳州窯と考えられる。

P 27 柱穴

検出状況 L-79' 区V層上面で検出。

形 状 不定形

規 模 幅約 50cm × 40cm, 深さ約 43cm

埋 土 粘質性が弱くしまりのある黒褐色土であり、茶色の土がブロック状に混ざる。

根 石 根石が 1 つある。深さ約 35cm から厚さ約 7cm の凝灰岩。

遺 物 8 は肥前系の陶器碗である。外面胴部から底部は露胎する。

P 28 柱穴

検出状況 L-79' 区V層上面で検出。

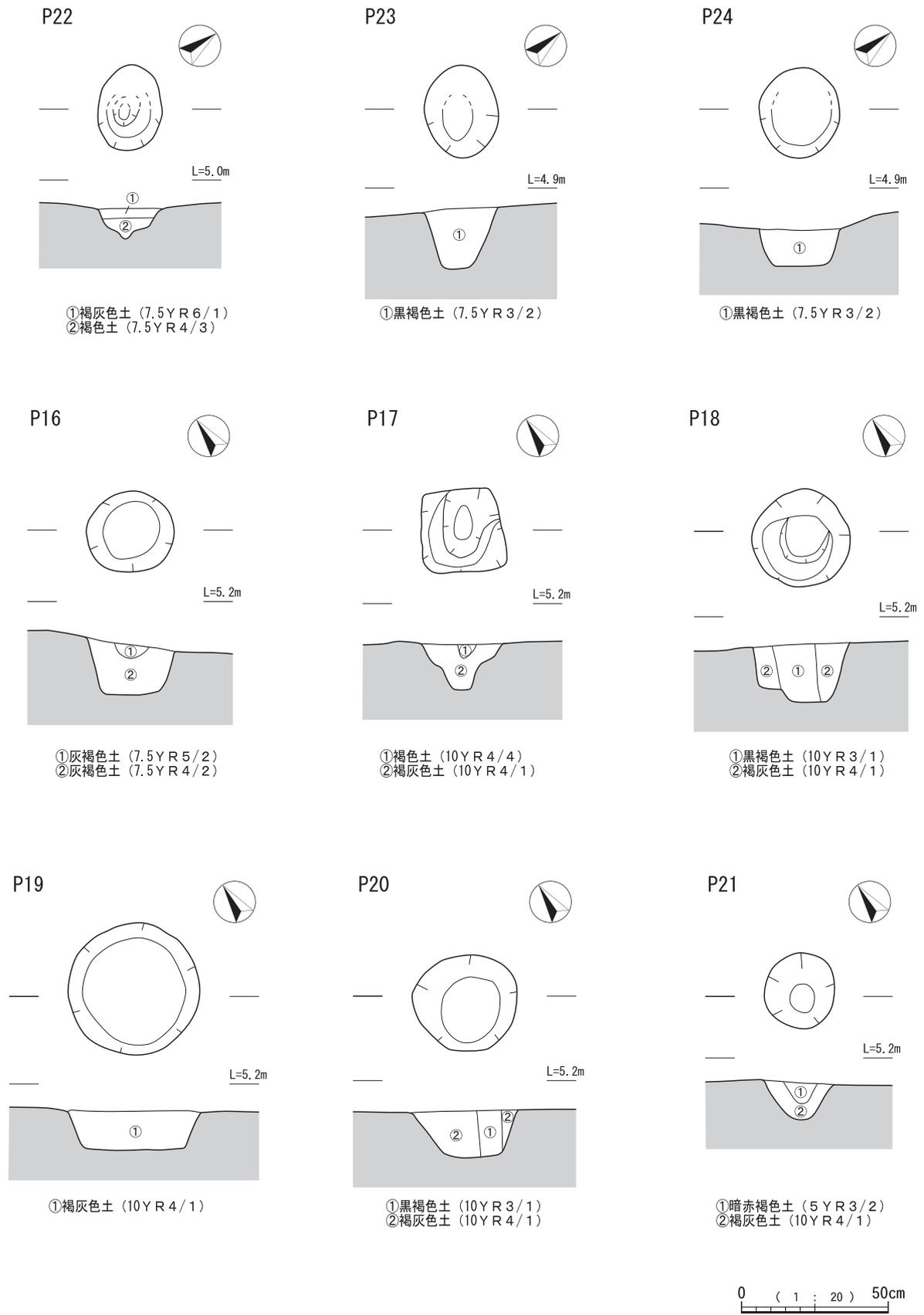
形 状 楕円形

規 模 幅約 73cm × 50cm, 深さ約 32cm

埋 土 粘質性が弱くしまりの弱い暗褐色土であり、茶色の土がブロック状に混ざる。

根 石 根石が 1 つある。深さ約 16cm から厚さ約 14cm の凝灰岩。

遺 物 遺物は出土していない。



第 16 図 柱穴 (P16 ~ P24)

P 29 柱穴

検出状況 M-79' 区 V 層上面で検出。

形状 楕円形

規模 幅約 55cm × 45cm, 深さ約 15cm

埋土 粘質性が弱くしまりの弱い暗褐色土であり、茶色の土がブロック状に混ざる。

根石 根石は検出されていない。

遺物 遺物は出土していない。



第 17 図 柱穴内出土遺物 (P 9・10・25～27)

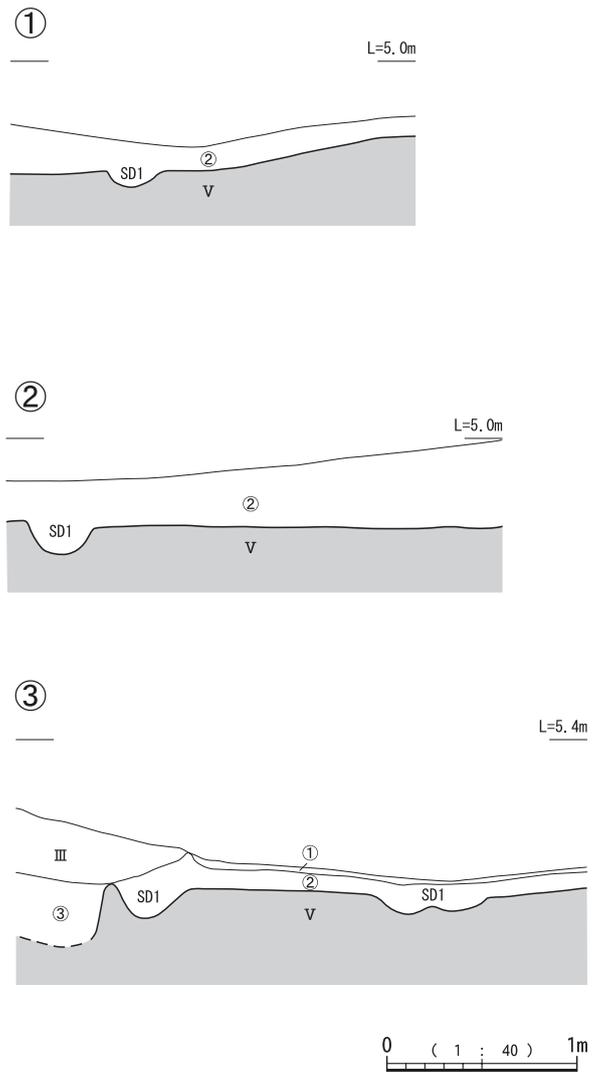
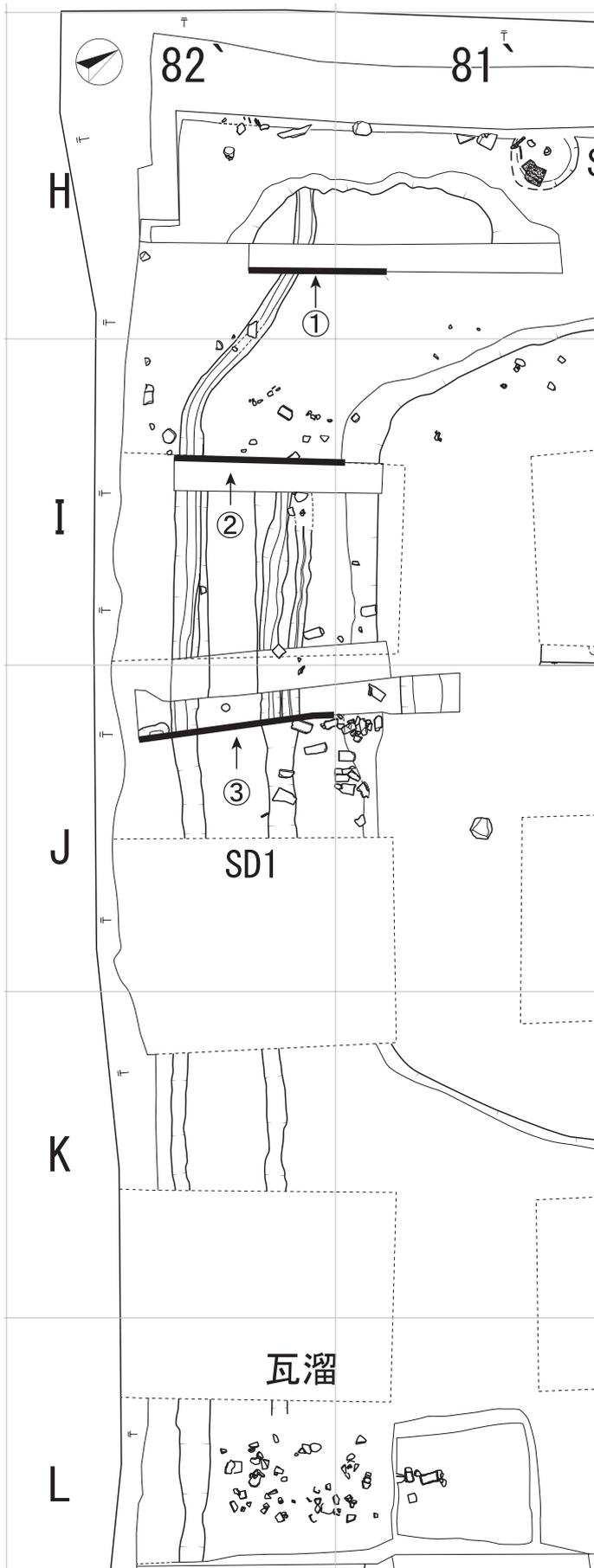
(2) 溝状遺構 (SD 1)

H～L-82' 区, H-81' 区の V 層から検出された。硬化した砂質土 (鉄分でオレンジ色になっている) が 1 m ほどの幅の道ようになっており, 幅 15cm ほどの狭く浅い溝を両側に伴い, 20 m ほど走る。両側の浅い溝の底も同じようにオレンジ色で硬化面をなしている。浅い溝の端は立ち上がり, IV 層, III 層へと続く。

この道や浅い溝は V 層が掘り込まれたり, 踏み固められたりして, 大きく全体を溝状遺構としている。

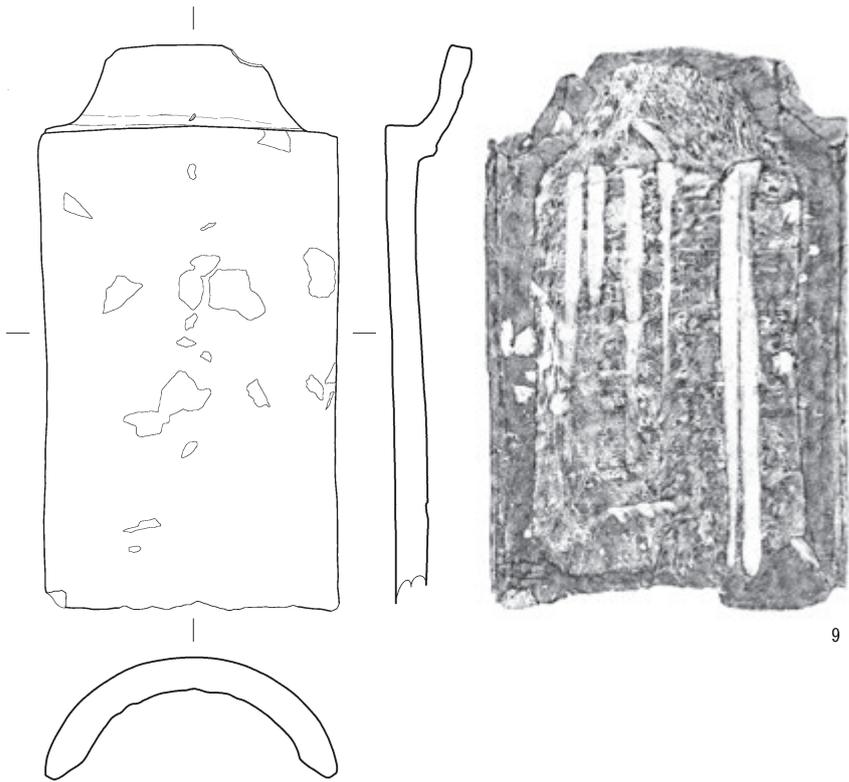
III 層残存側は III 層から V 層の溝に向けて急に下がっており, 流れ込みなのか瓦などの遺物が出土する。遺物が出土する土にはオレンジ色と灰色のラミナ状の層が見られ, 水成堆積だと考える。

浅い溝は北西側に流れるように作られており, 調査区西端でさらに低く下がった堀のような面に流れ込む。ここにも, 水成堆積の跡が見られ, 瓦や陶磁器, 木片などが検出された。

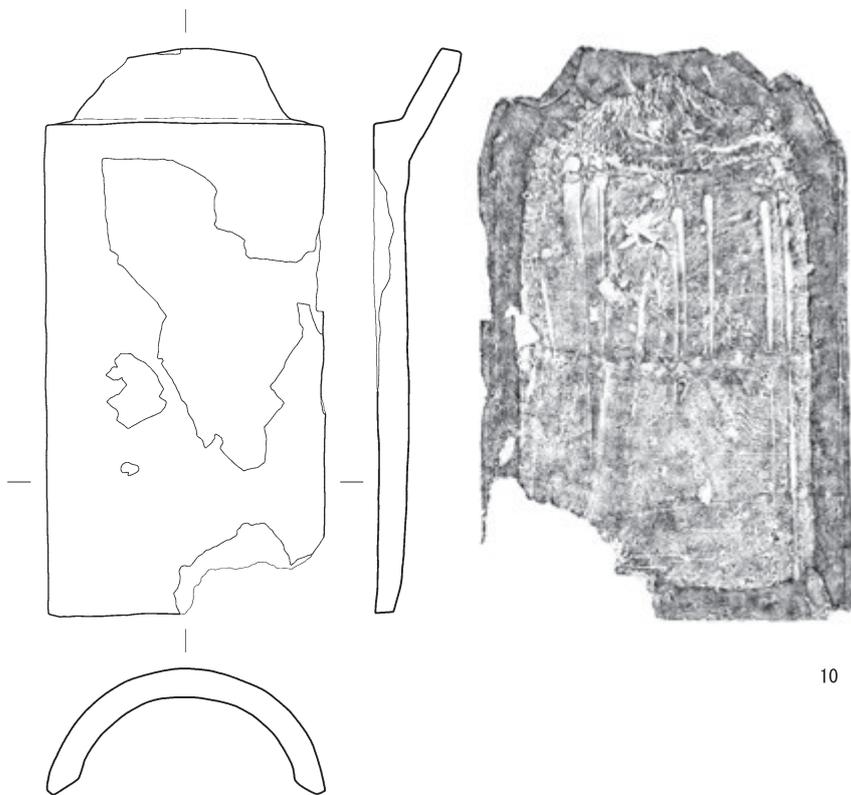


- ① 明黄褐色土(10YR7/6)
粘りなし、しまりあり。砂の硬化層。
ところにより石化
- ② 褐灰土 (7.5YR4/1)
ラミナ堆積層
粘りあり、しまりあり。
1~2cmの軽石含む。オレンジ色と灰色土が
ラミナ状に堆積
- ③ 赤褐土 (5YR4/6)
砂層
粘りなし、しまり弱い

第18図 溝状遺構 (SD1)



9



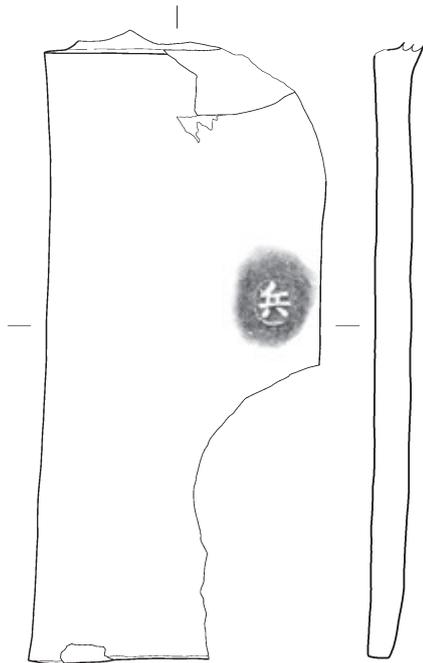
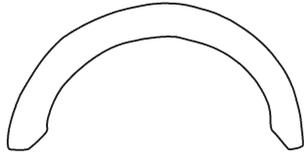
10

0 (1 : 4) 10cm

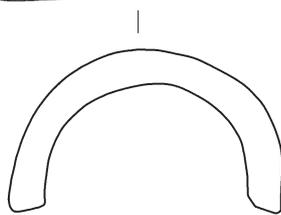
第19図 溝状遺構 (SD1) 出土遺物①



11



12

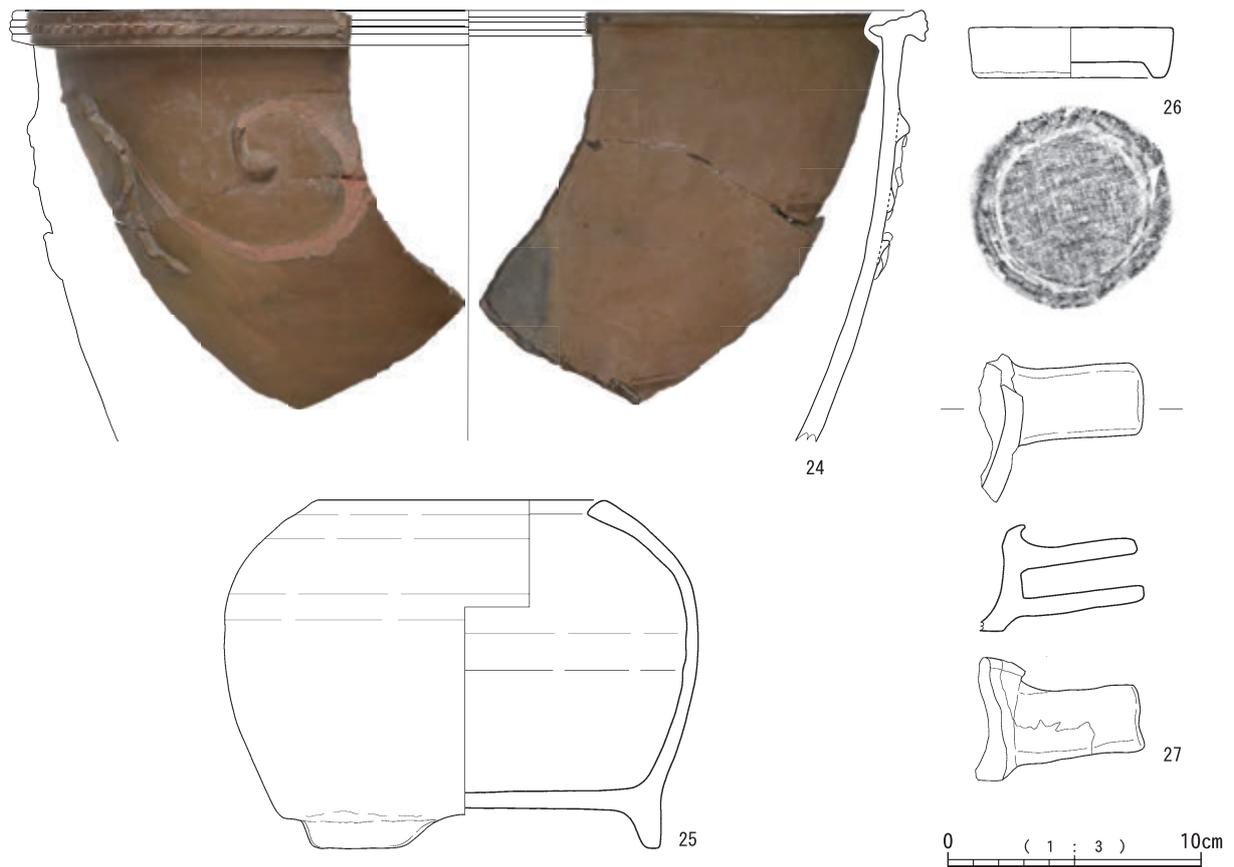


0 (1 : 4) 10cm

第20図 溝状遺構 (SD1) 出土遺物②



第21図 溝状遺構 (SD1) 出土遺物③



第22図 溝状遺構 (SD1) 出土遺物④

(3) 溝状遺構 (SD1) 遺物 (第19～22図)

9～12は丸瓦である。12はやや大型品で外面に「兵」のスタンプ文をもつ。鹿児島城跡本丸でよく出土されるもので「兵具所」と関連する瓦と考えられる。13は平瓦である。

14・15は染付である。14は中国景德鎮産の青花皿である。15は肥前系の碗で内面見込みに手書き五弁花をもつ。16・17は白薩摩である。16は小型の壺と考えられ、胴部下位に千鳥文をもつ。17は香炉である。18～20は薩摩焼である。18は土瓶、19は鉢で口唇部に目跡をもつ。20は鉢、21は植木鉢である。22・23は焼き締め植木鉢である。22・24は薩摩焼、23は琉球産である。

25は瓦質土器(土師質)の風炉である。26は焼塩土器の蓋で、内面には布目が残る。27は焙烙の把手で下部に煤が付着する。

(4) 土坑 (SK1) (第23図)

H-81'区のV層上面で溝状遺構(SD1)が調査区西側でカーブし低く下がった堀のようなところで検出された。埋土は黒褐色土で遺物は木片と陶磁器が出土している。

(5) 土坑 (SK1) 遺物 (第23図)

28は白薩摩の急須である。注口部は角形で、底部は

露胎する。19世紀代のものを考えられる。

29は木製品で将棋盤と考えられる。格子目状に升目を彫っており、四方に釘穴が残る。内面には脚部が残存していた。表面には斜方向に切痕が残っていることから、まな板等に再利用された可能性が考えられる。木材はマツであった。

(6) 瓦溜り (第24図)

L-81'・82'区のV層上面で溝状遺構(SD1)が調査区の東側に続くところから検出された。平瓦、軒瓦が主として出土した。

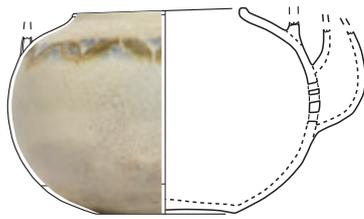
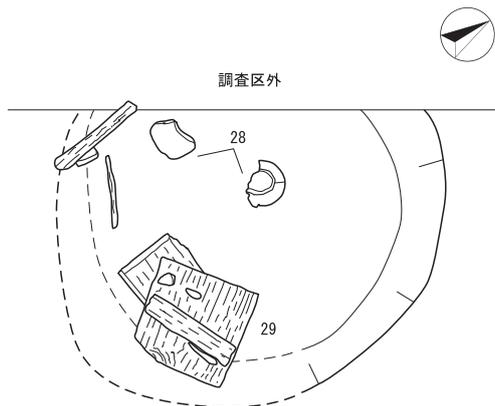
(7) 瓦溜り遺物 (第24・25図)

30・31は軒丸瓦、32は軒棧瓦、33は軒平瓦である。30は文径が広く、連珠は小さく、31より古手である。34は平瓦、35は海鼠瓦である。

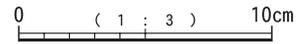
36は染付の碗で高台見込みに渦巻福の銘款をもつ。37は加治木・始良系(龍門司窯)の碗である。内外面に白化粧土が重ねて施釉される。38は白薩摩の香炉で、39は薩摩焼の土瓶もしくは片口鉢の注口部である。40・41は薩摩焼の蓋である。

(8) V層出土遺物 (第26・27図)

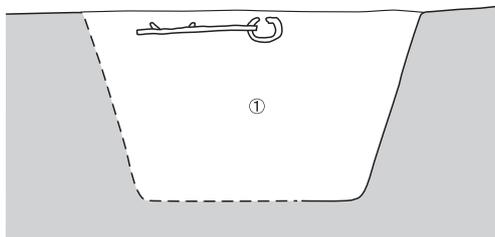
42は軒丸瓦、43は平瓦である。44は青磁の鉢である。



28



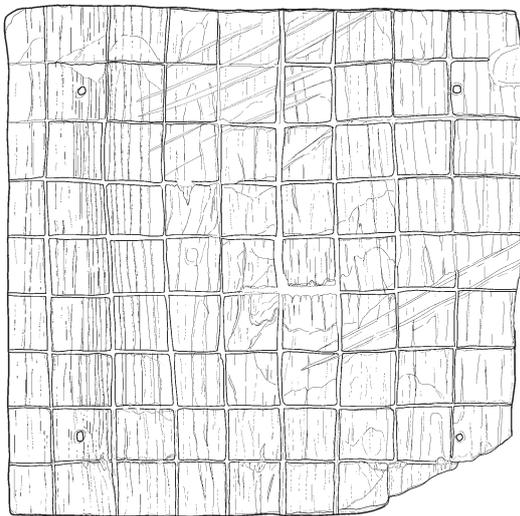
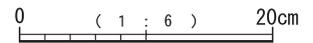
L=4.6m



①黒褐色土(7.5YR3/1)

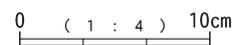


29

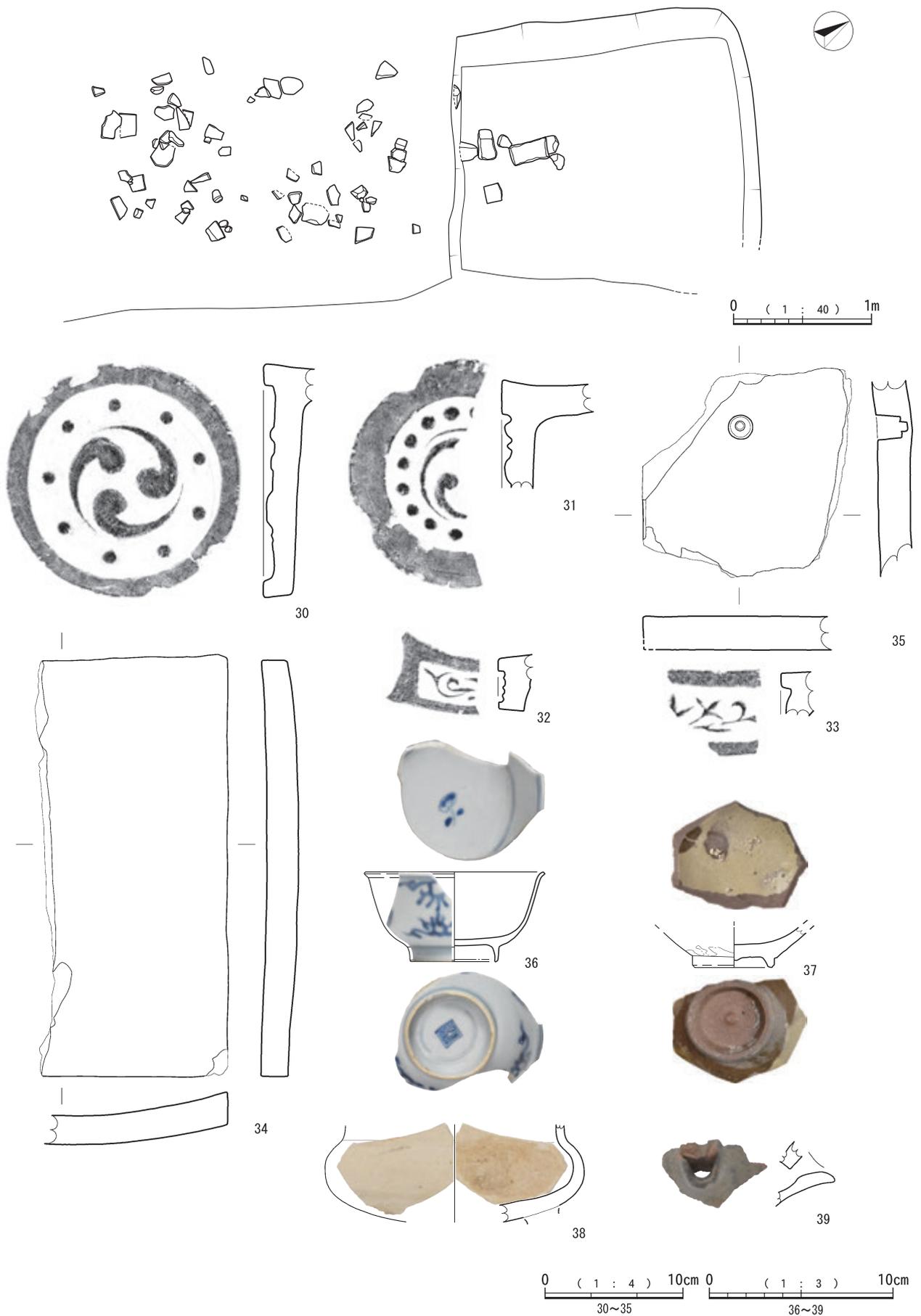


29

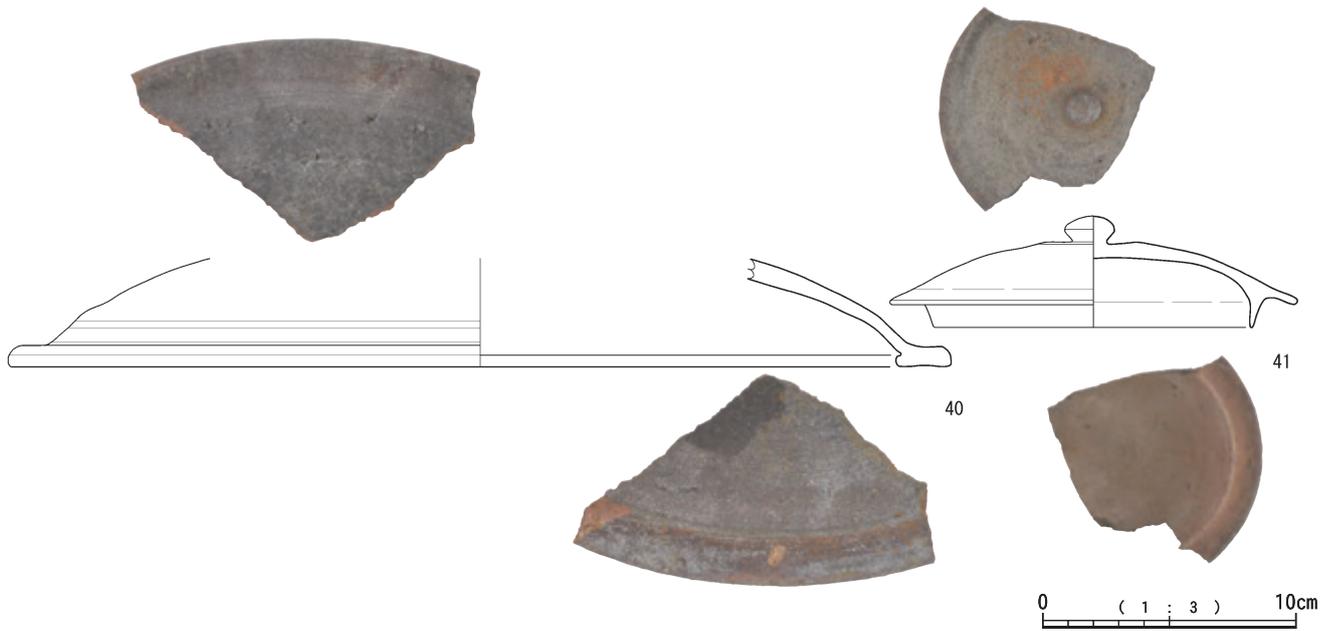
マツ属複維管束亜属
1723-1782 cal AD



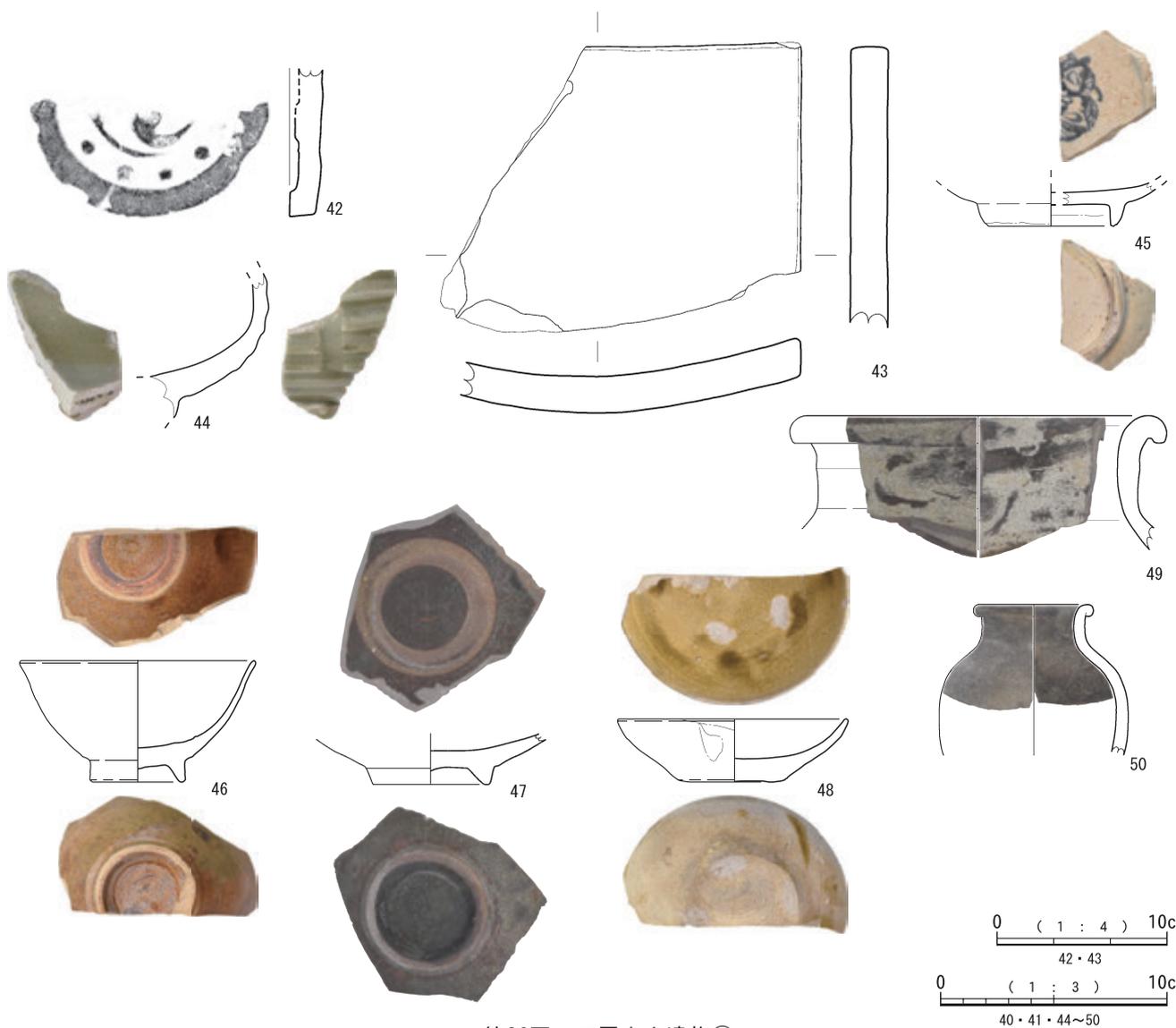
第23図 土坑 (SK1) および出土遺物



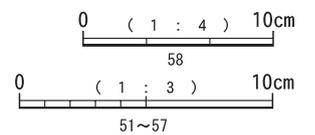
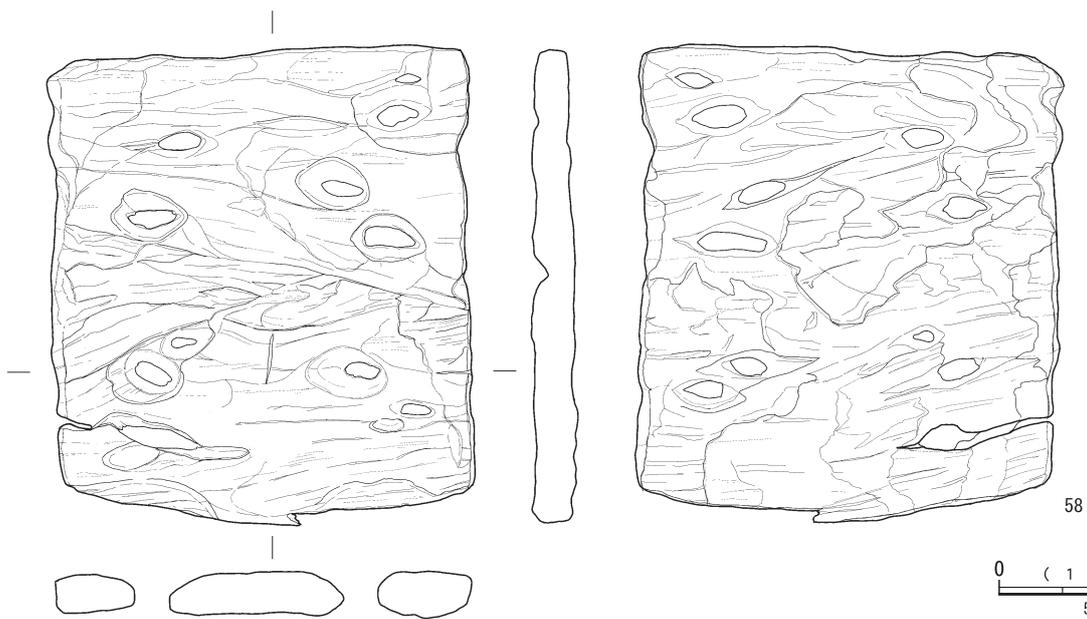
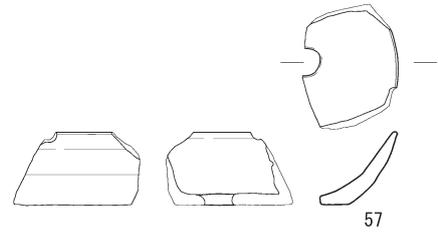
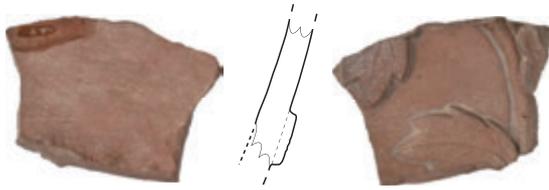
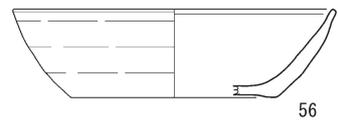
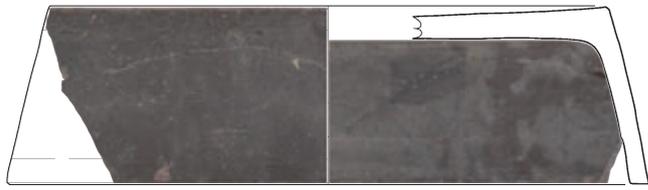
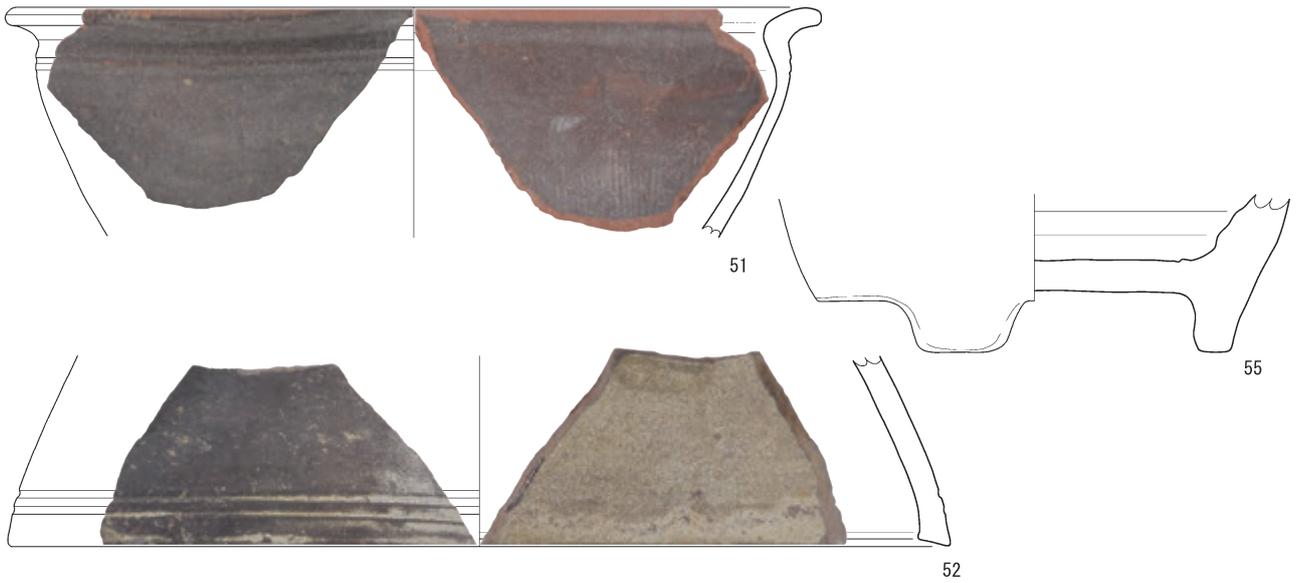
第24図 瓦溜りおよび出土遺物①



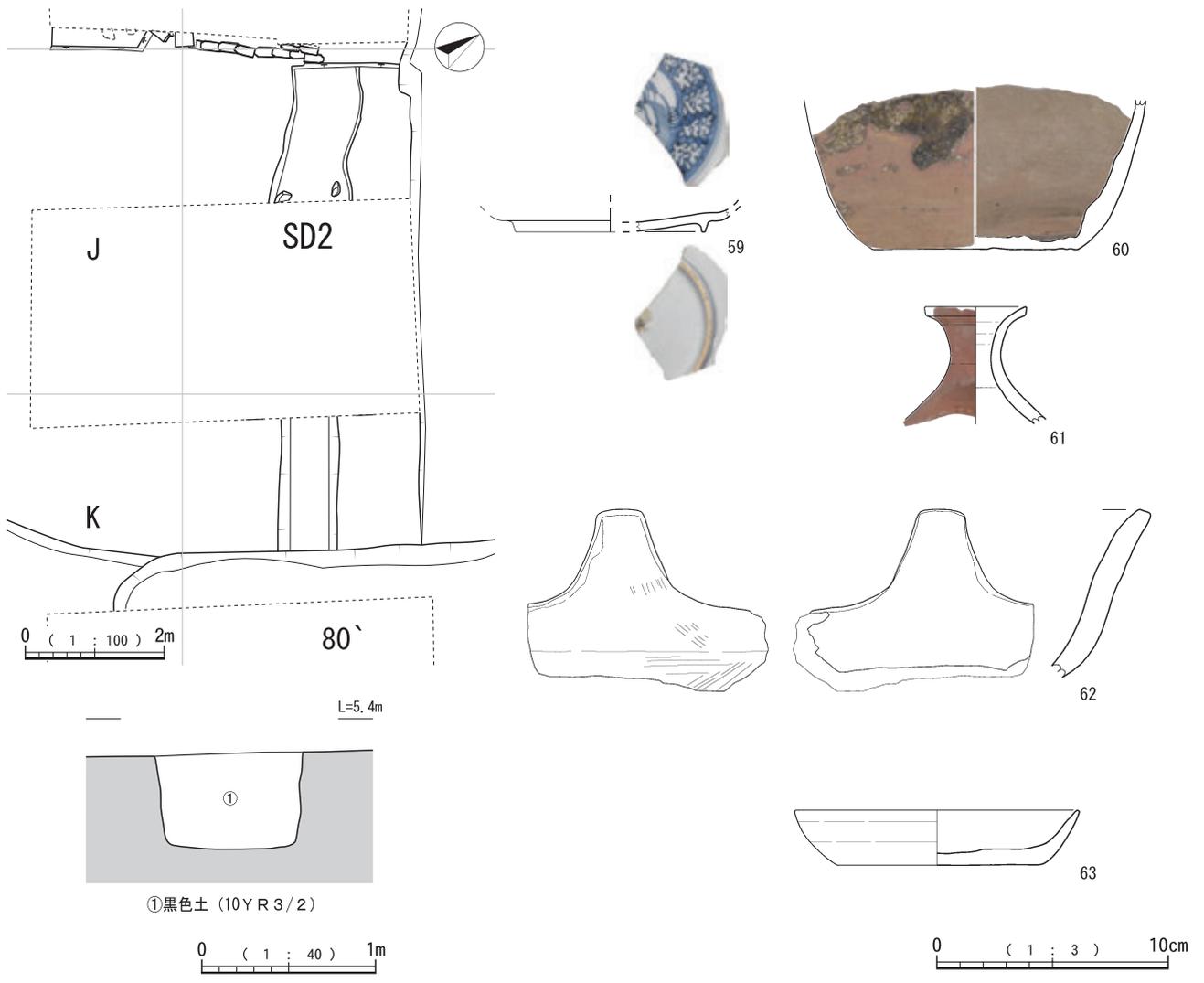
第25図 瓦溜り出土遺物②



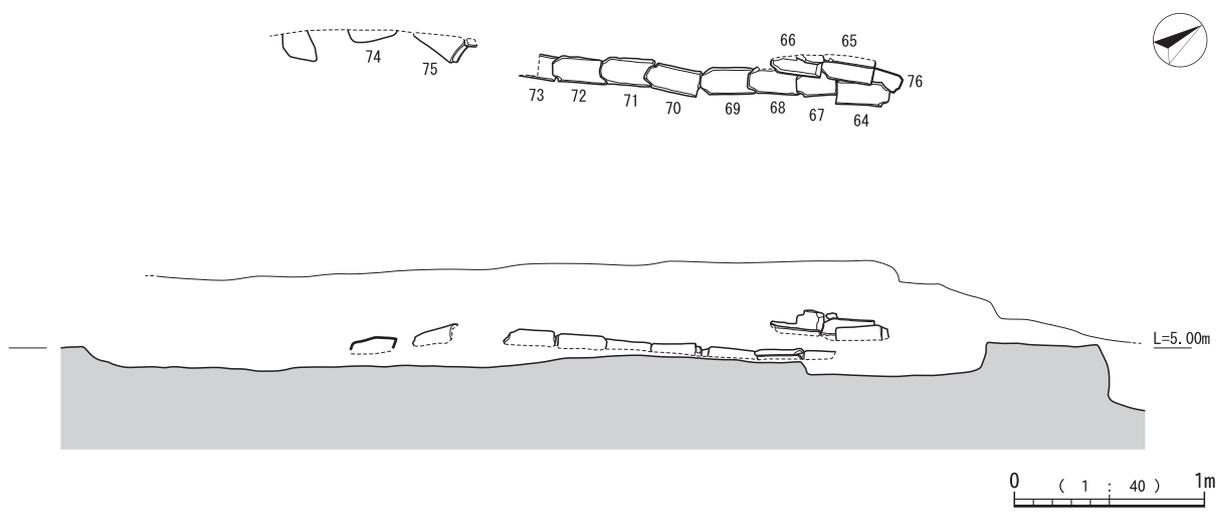
第26図 V層出土遺物①



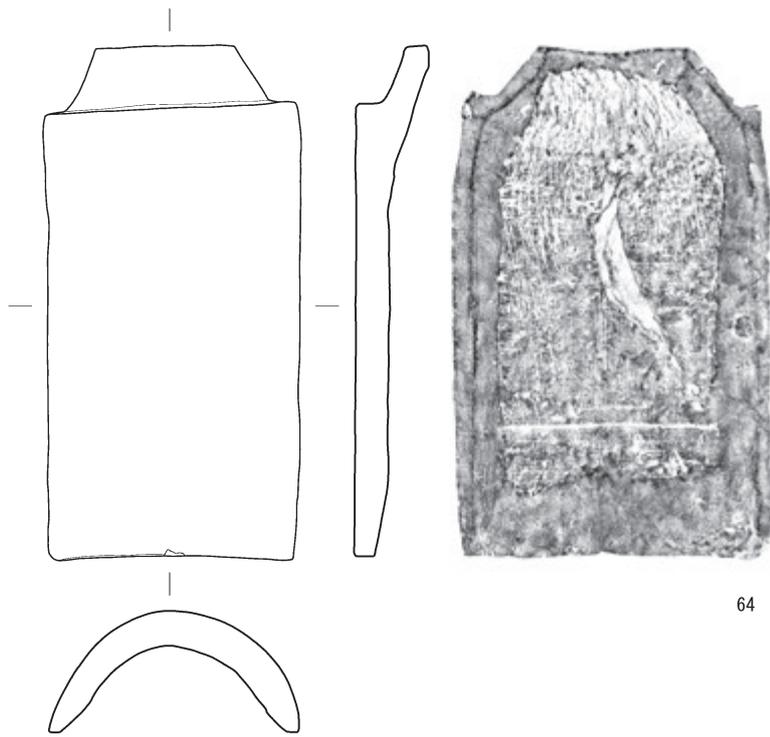
第27図 V層出土遺物②



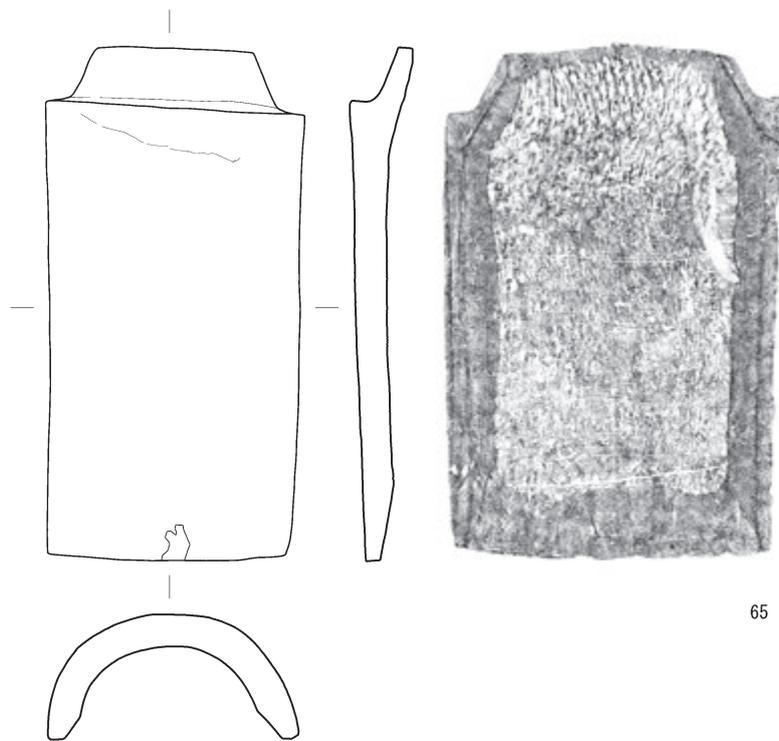
瓦列



第28図 Ⅲ層（近世）検出遺構（SD2・瓦列）および出土遺物



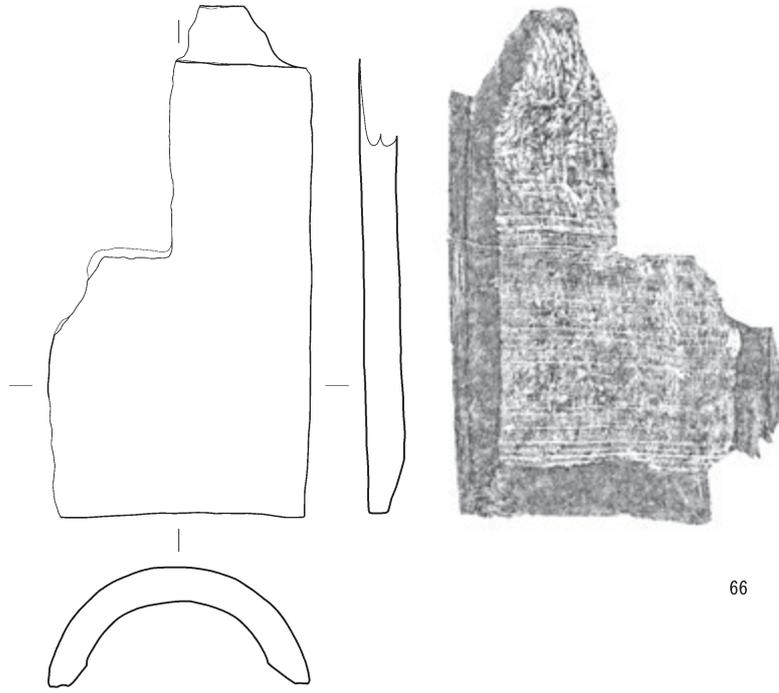
64



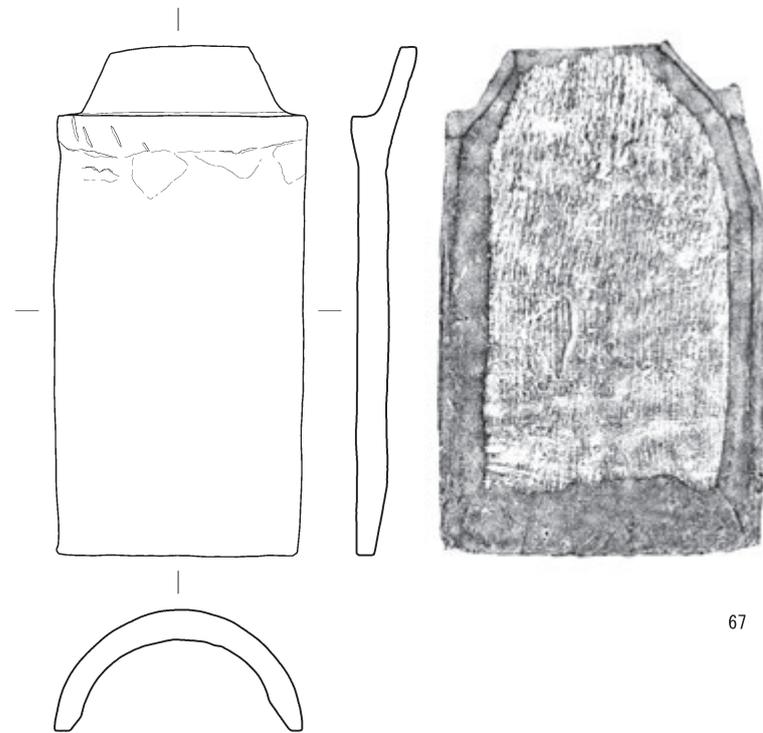
65

0 (1 : 4) 10cm

第 29 図 瓦列（雨樋遺構）出土遺物①



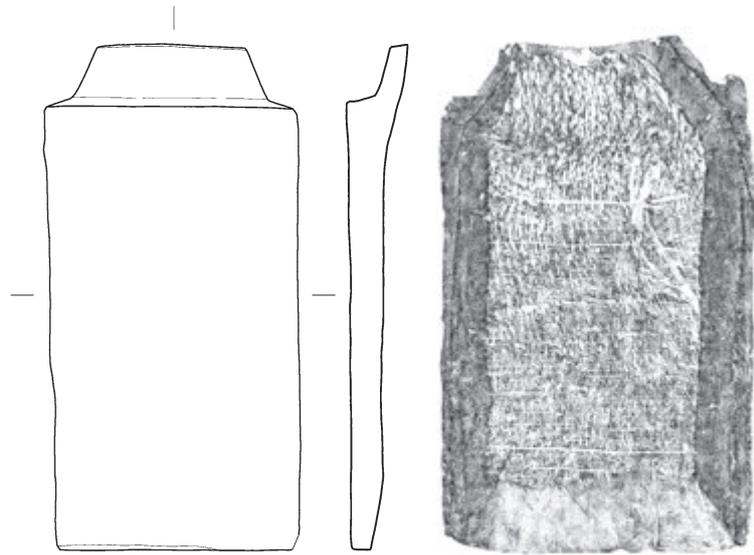
66



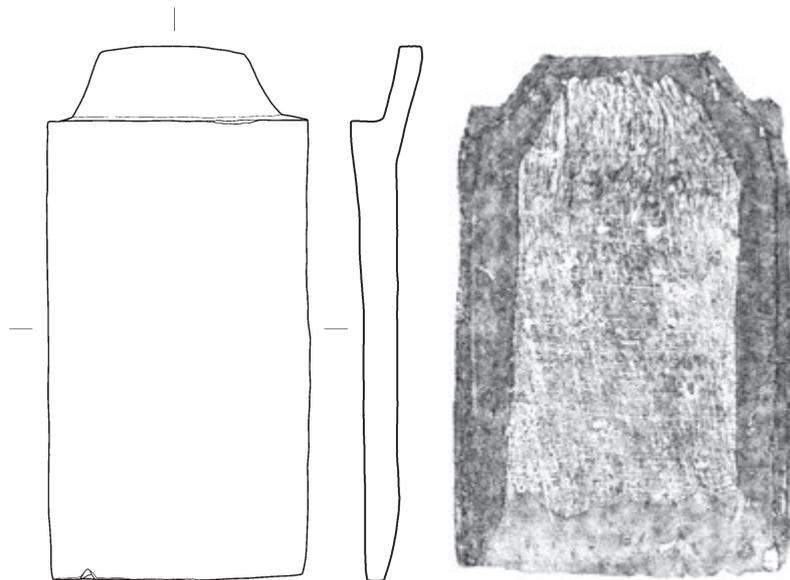
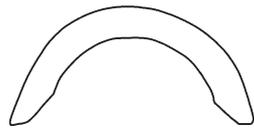
67

0 (1 : 4) 10cm

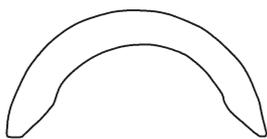
第 30 図 瓦列（雨樋遺構）出土遺物②



68

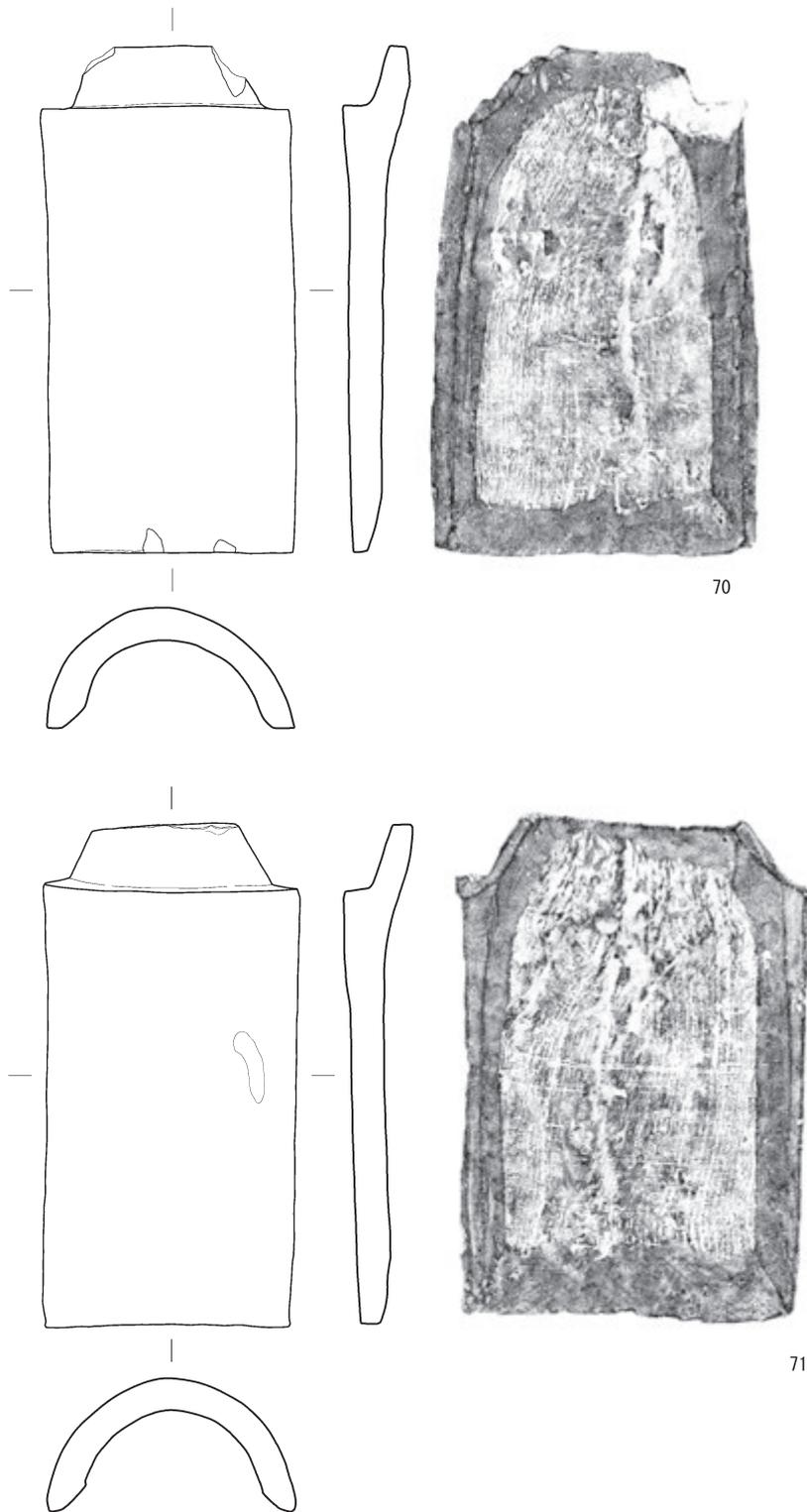


69

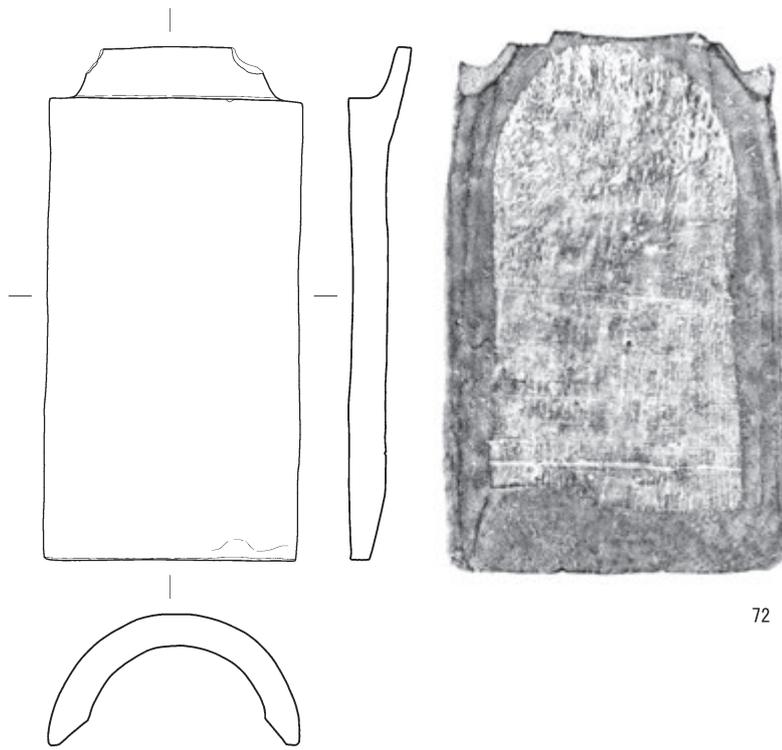


0 (1 : 4) 10cm

第 31 図 瓦列（雨樋遺構）出土遺物③



第 32 図 瓦列（雨樋遺構）出土遺物④



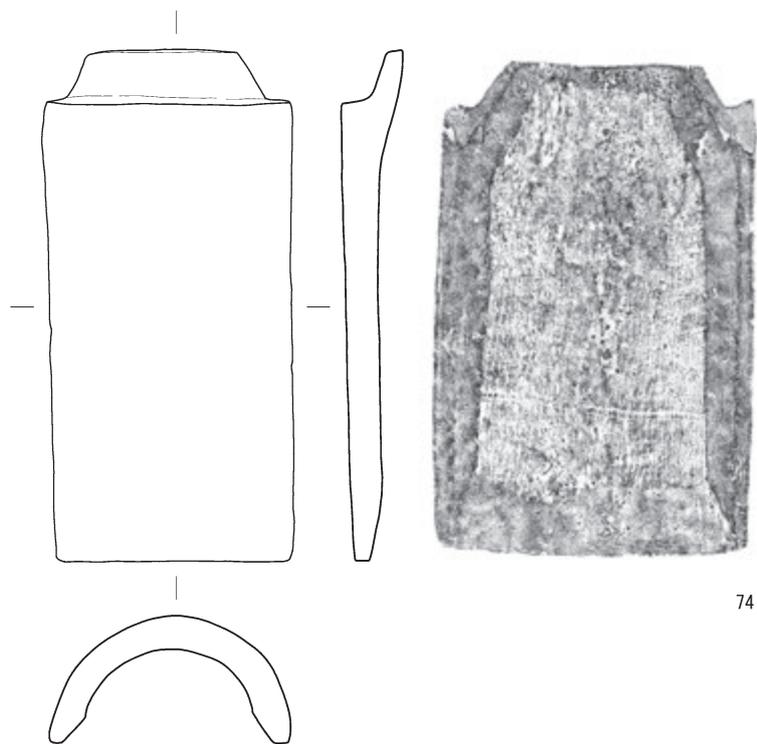
72



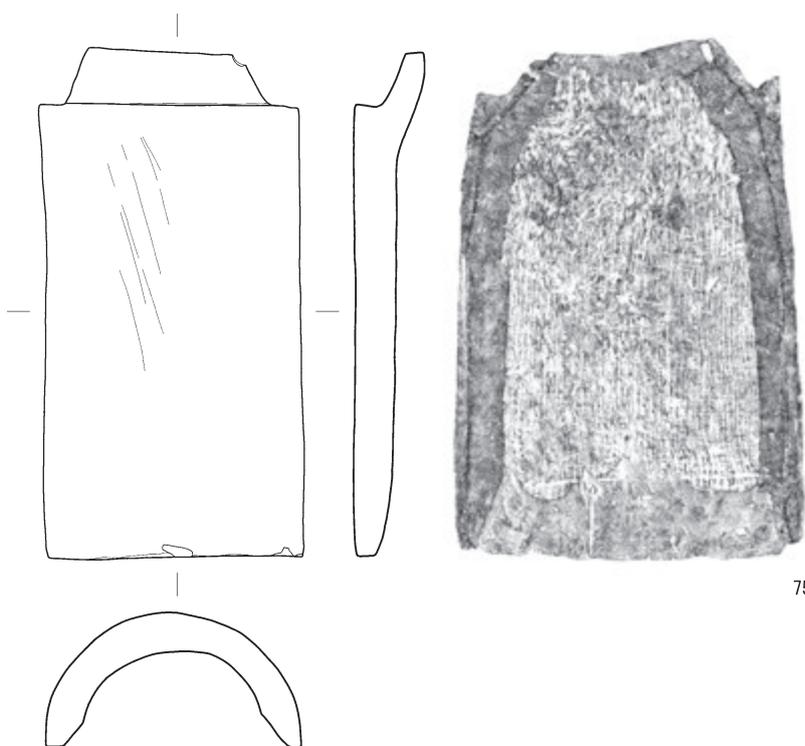
73

0 (1 : 4) 10cm

第 33 図 瓦列（雨樋遺構）出土遺物⑤



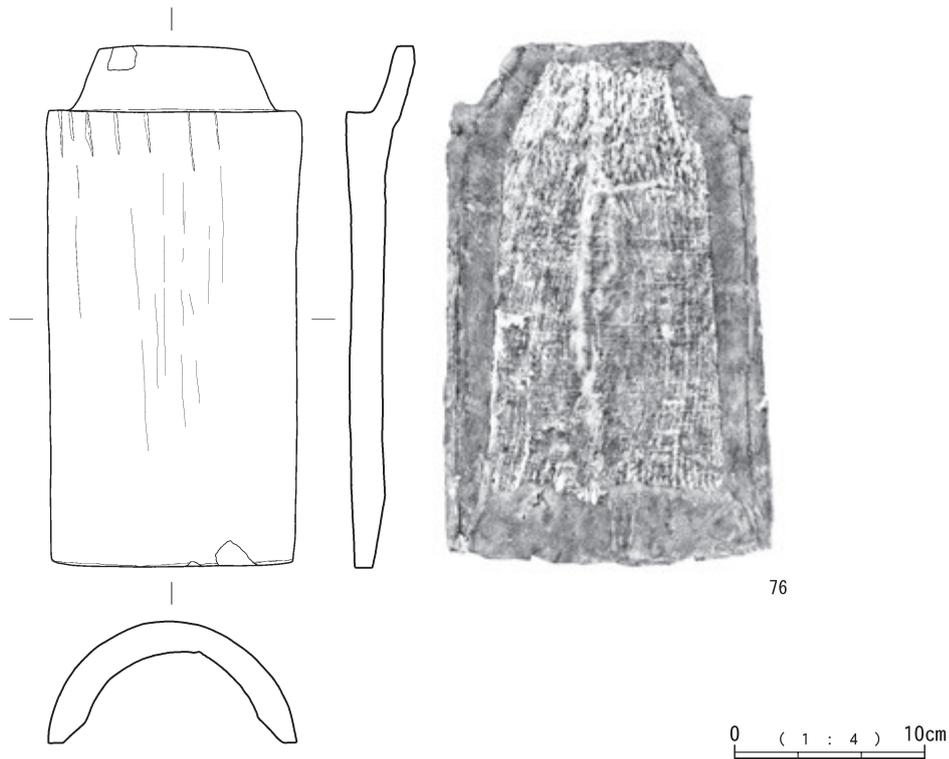
74



75

0 (1 : 4) 10cm

第 34 図 瓦列（雨樋遺構）出土遺物⑥



第 35 図 瓦列（雨樋遺構）出土遺物⑦

45 は青花（漳州窯系）の碗である。46～48 は加治木・始良系の陶器である。46・47 は蛇の目釉剥ぎで高台見込みは施釉している。48 は内面見込みに目痕が残る。

49～53 は薩摩焼である。49・50 は壺である。51 は播鉢，52・53 は蓋である。49・52 は二次焼成による被熱を受けている。54 は琉球の植木鉢の胴部である。

55 は瓦質土器（土師質）の風炉である。56 は土師器の皿，57 は底部に穴をもつ土師器の鉢と考えられる。58 は正方形の木製品である。複数の穴をもち，表面が劣化している。用途は不明である。

3 Ⅲ層（第 12 図・第 28 図）

H～K-80'・81' 区のみ台地状に残存しており，黒褐色硬質土で瓦列や溝状遺構（SD 2）が検出された。遺物は 17 世紀後半から 19 世紀頃の陶磁器や瓦が出土している。

（1）溝状遺構（SD 2）（第 28 図）

Ⅲ層を掘り込んだ溝である。東側はプランがはっきりして深さもあつたが，西側はプランがはっきりせず，検出できていない。東側は，側面を工具で掘った痕跡がうかがえる。

（2）溝状遺構（SD 2）遺物（第 28 図）

59 は青花（景德鎮）の皿である。60 は中国系の壺と

考えられる。61 は丹塗の小型陶器壺である。62 は焙烙の把手，63 は土師器の坏である。

（3）瓦列（雨樋遺構）（第 28 図）

Ⅲ層で検出した。丸瓦に高低差を付けて並べている。高い方は，粘土の塊を置いて高さを固定している。丸瓦の先の突起部分を上の瓦の端の上に重なるようにして並べている。重なり部分に漆喰等は見られなかった。南東側に溝状遺構（SD 2）を検出しており，その続きがあれば雨樋の下方の先にあたるのだが，溝状遺構のプランが雨樋の下方部分ではっきりしなくなっている。

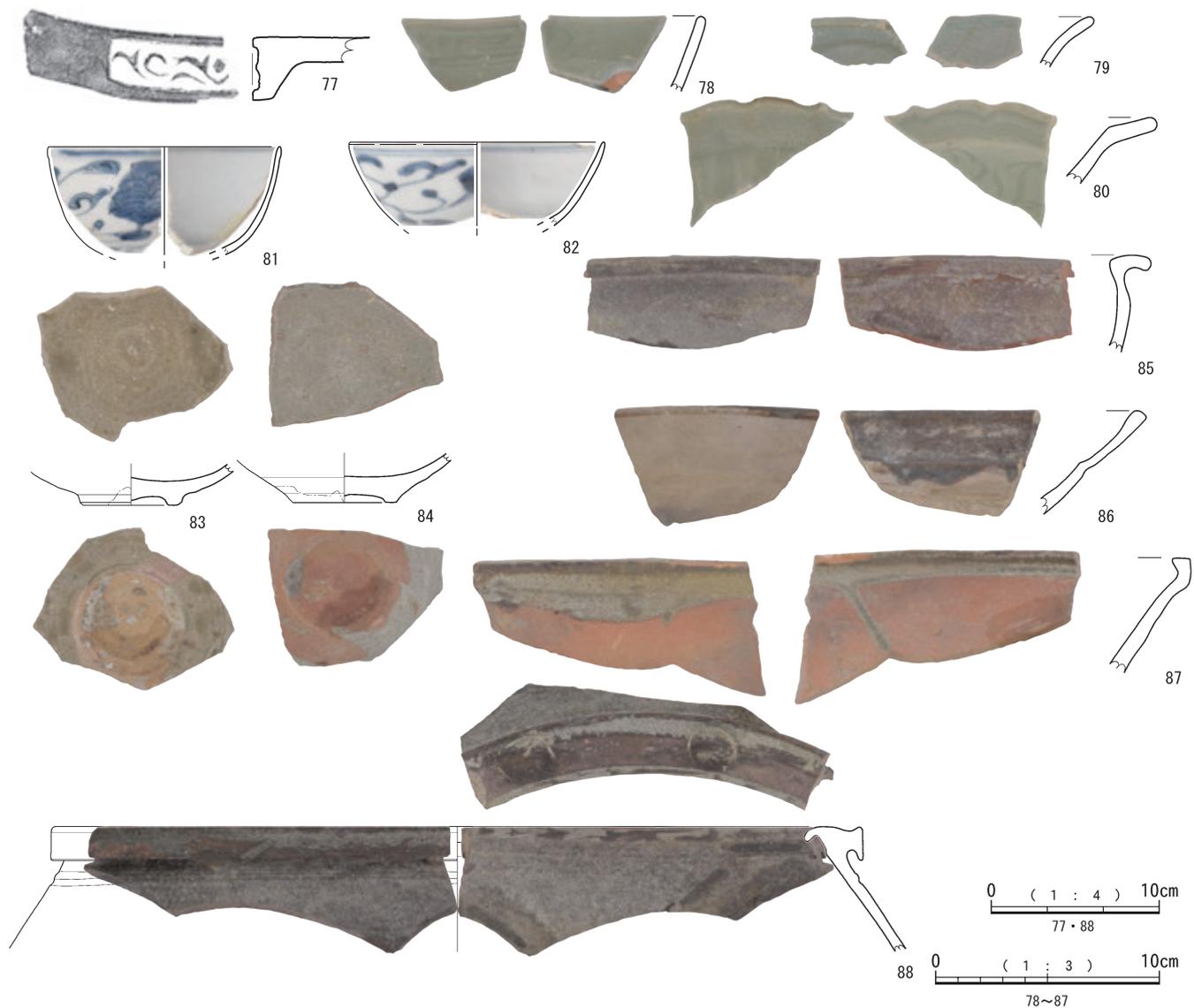
（4）瓦列（雨樋遺構）遺物（第 29～35 図）

丸瓦が 13 個連なった状態で出土した。64～76 はやや小型の丸瓦であり，ほぼ完形の状態である。内面には布痕と横方向の筋（コビキ B か）が明瞭に残る。

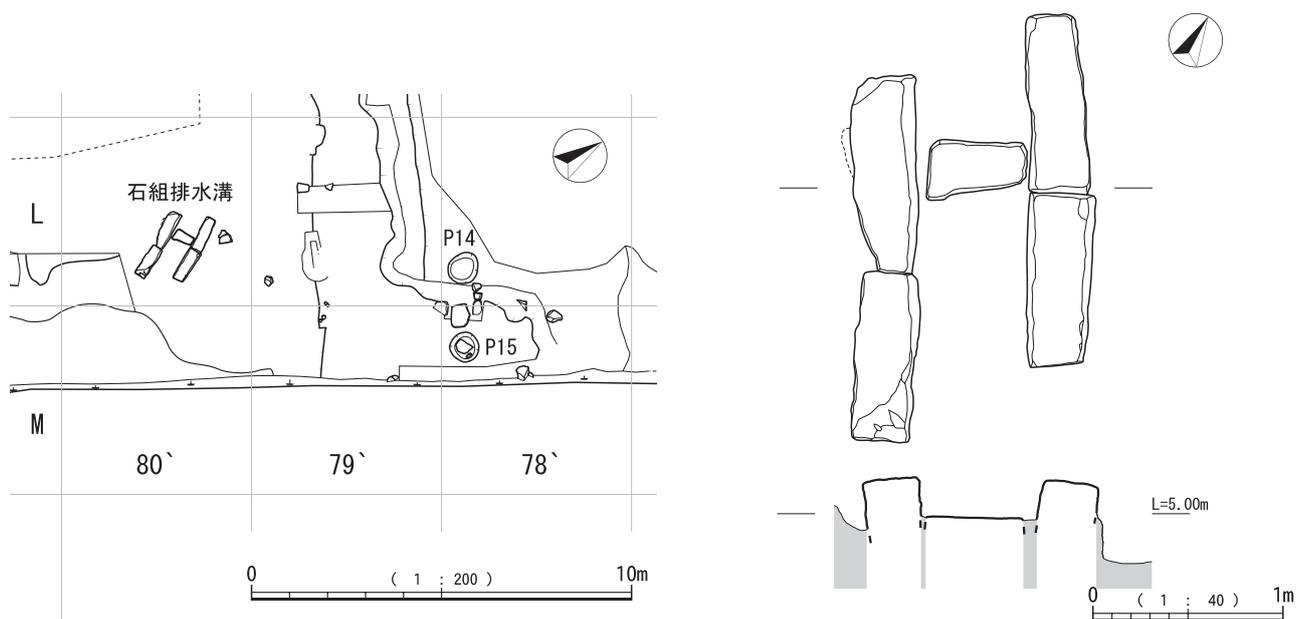
（5）Ⅲ層遺物（第 36 図）

77 は軒平瓦である。78・79 は青磁で，78 は雷文帯をもつ碗，79・80 は稜花皿である。81・82 は青花（景德鎮）の碗である。83・84 は肥前系の碗・皿であり，二次焼成を受ける。85 は薩摩焼の鉢である。86・87 は肥前系の播鉢で口縁部のみに施釉する。

88 は薩摩焼の大甕（堂平窯系）で，口唇部に目跡があり，内面にはあて具痕がわずかに残る。



第36図 III層出土遺物



第37図 遺構配置図（II層）および石組排水溝



石列・礎石
(L・M-78'・79'区 東から)



石列・礎石
(L・M-78'・79'区 東から拡大)

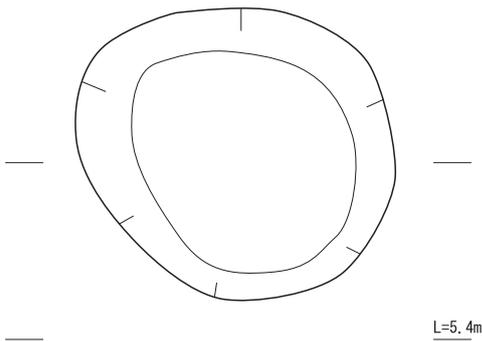


石列
(L・M-78'・79'区 北から)

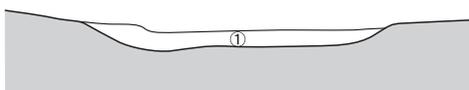


礎石
(M-78'区 西から)

P14

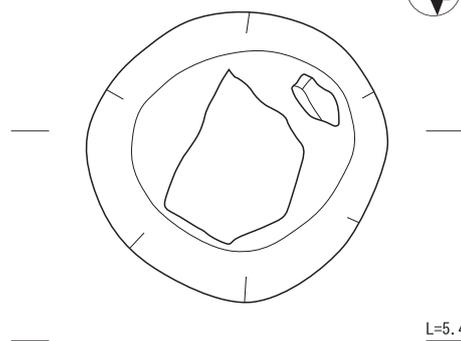


L=5.4m

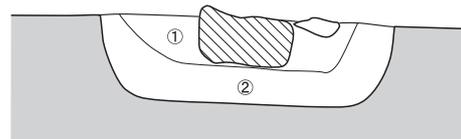


①灰白色土 (7.5Y 7/2)

P15



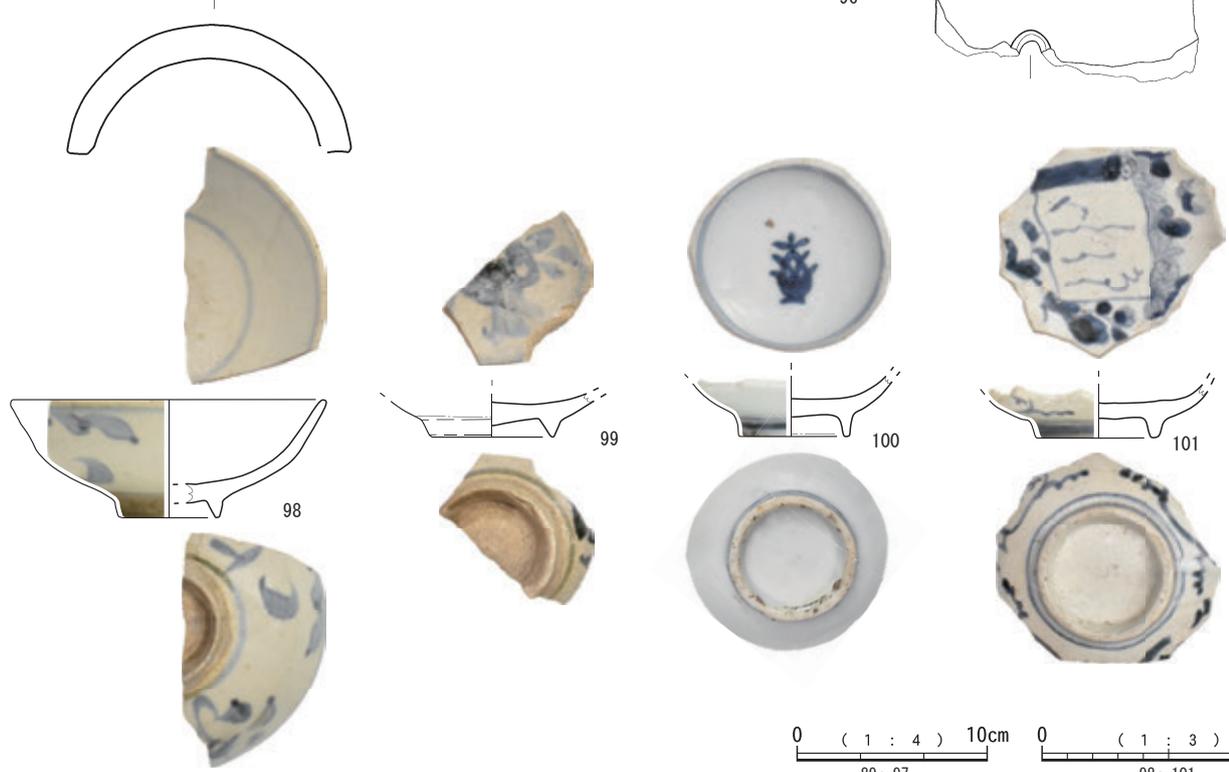
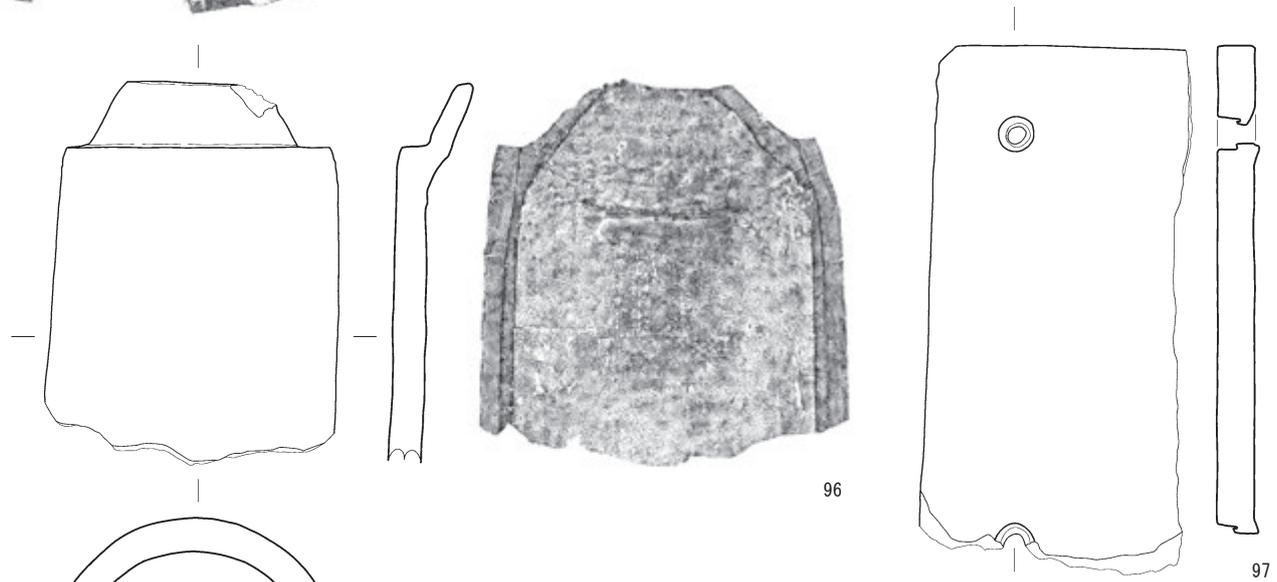
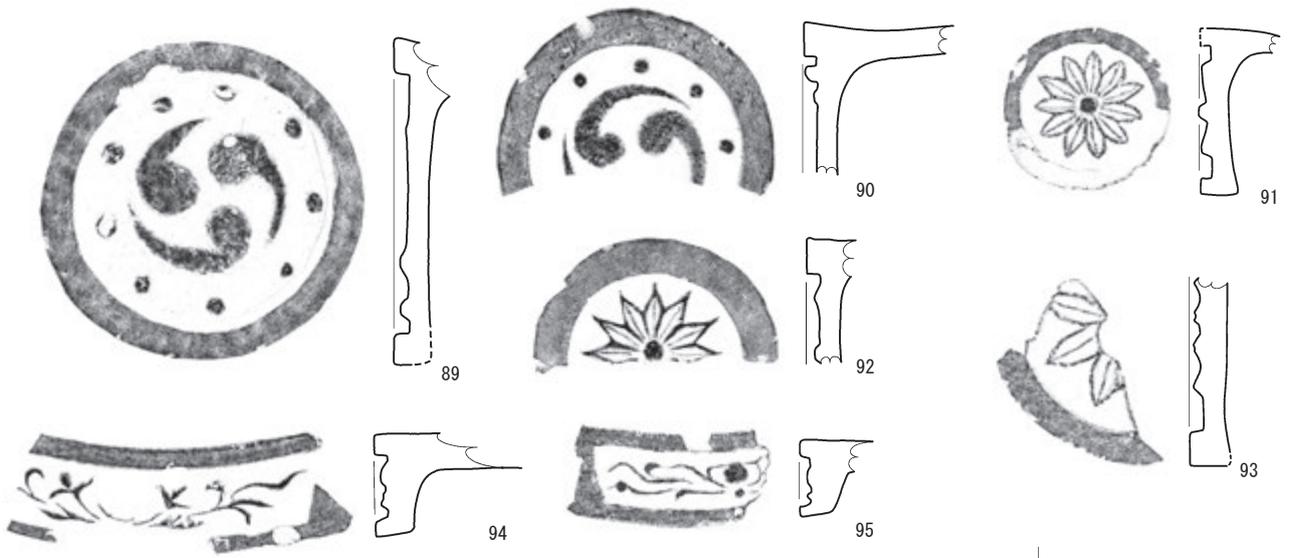
L=5.4m



①黒褐色土 (7.5YR 3/2)
②灰白色土 (7.5Y 7/2)

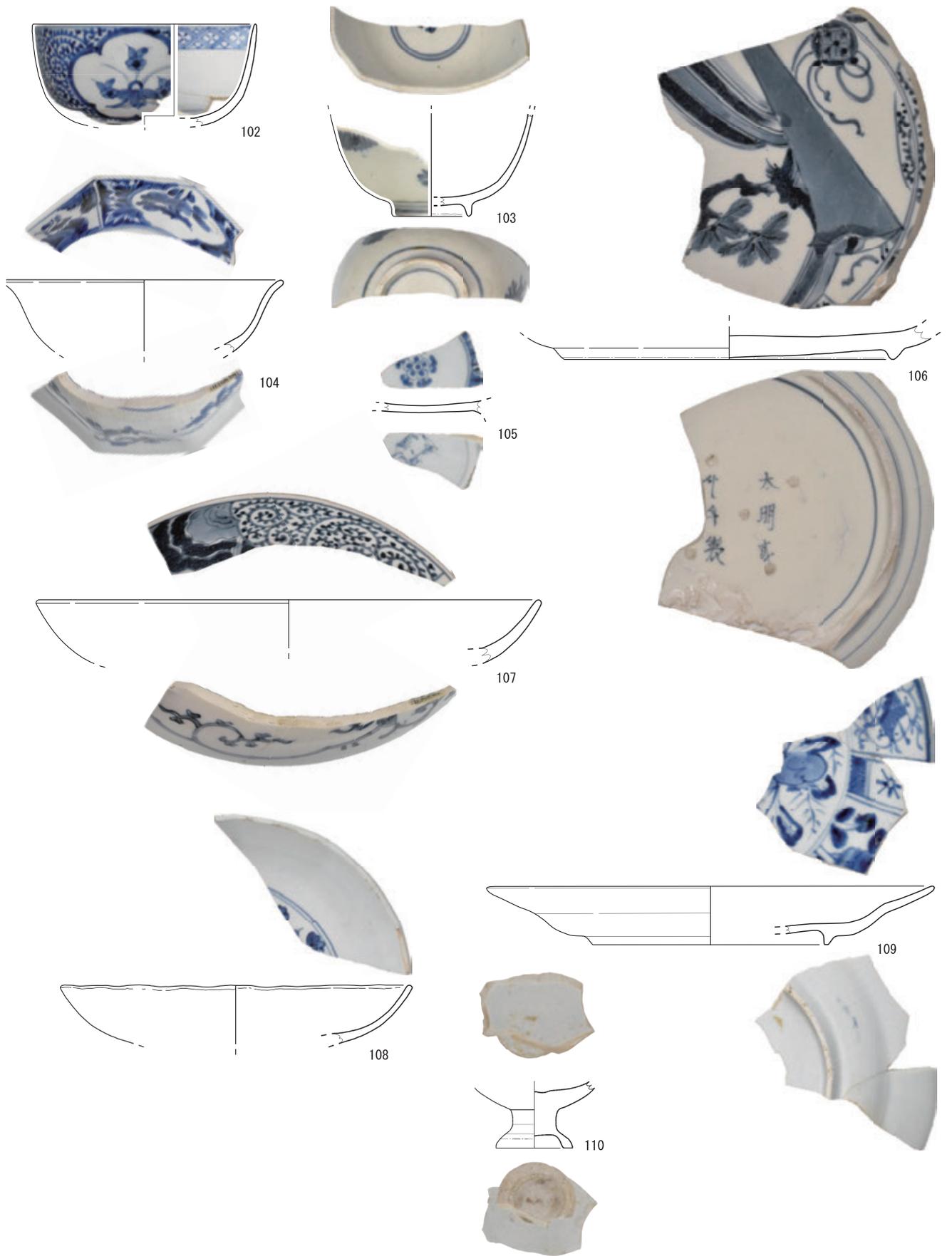
0 (1:20) 50cm

第38図 II層検出遺構・柱穴 (P14・P15)

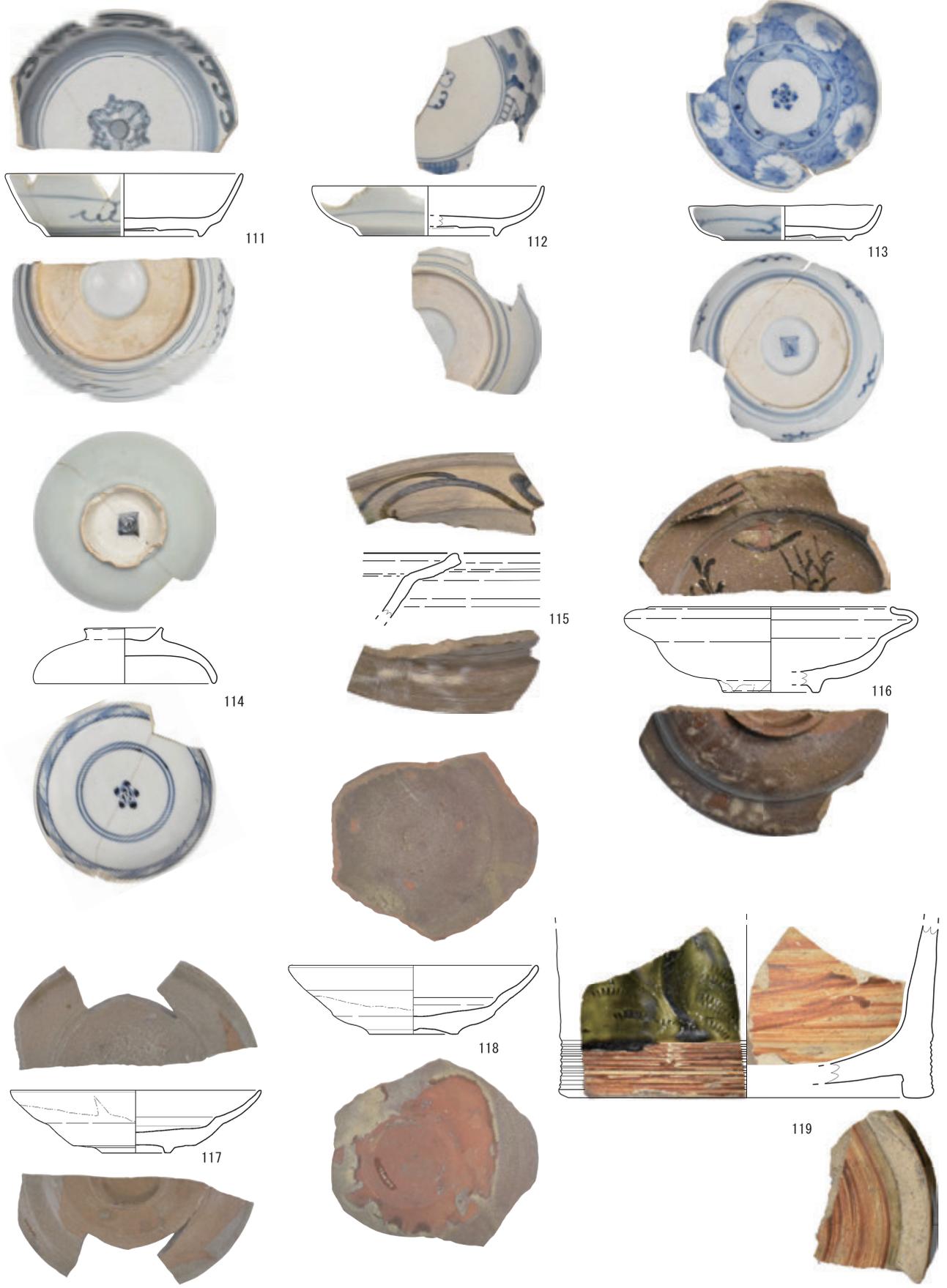


0 (1 : 4) 10cm 0 (1 : 3) 10cm
89~97 98~101

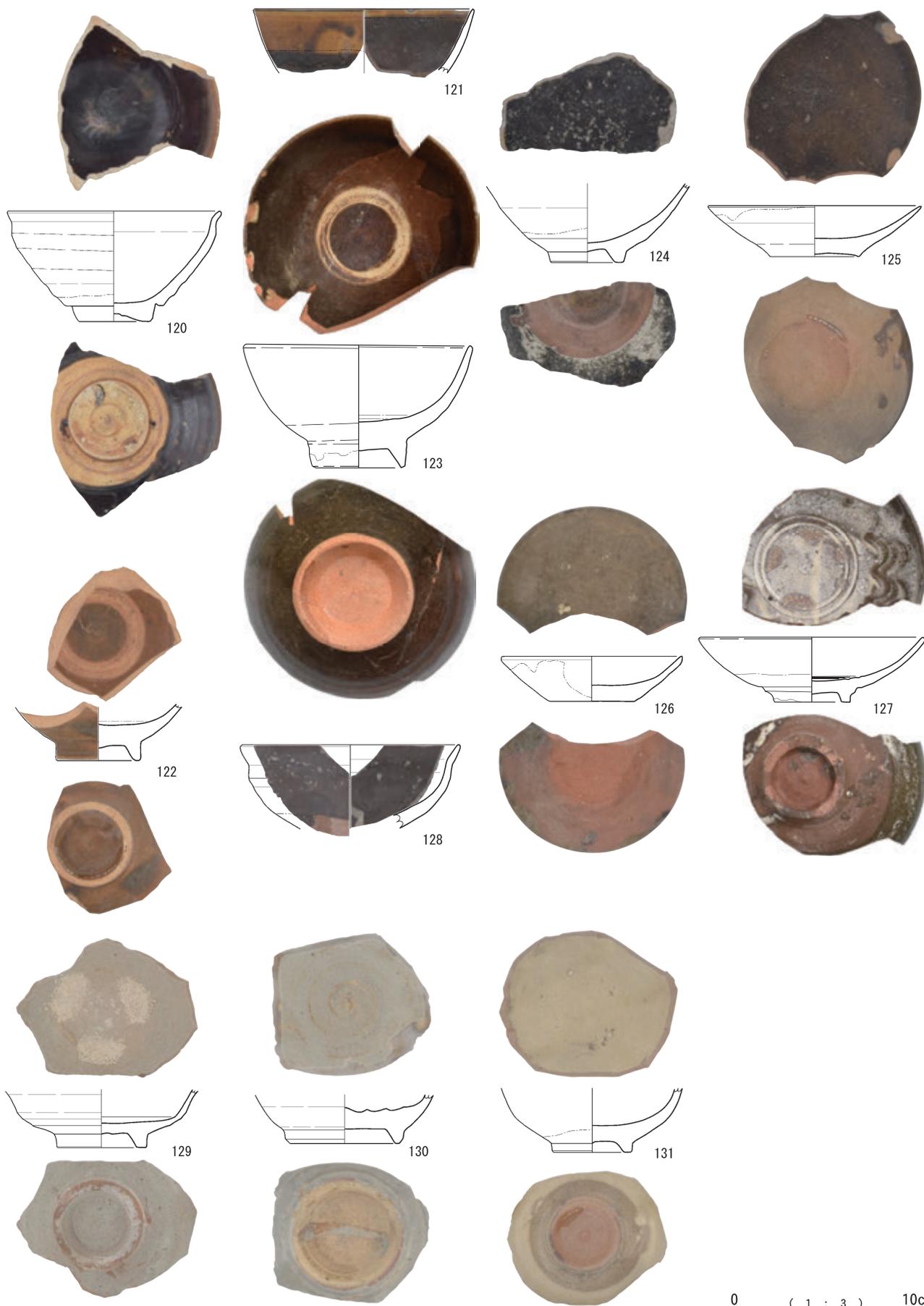
第39图 搅乱出土遺物①



第40图 搅乱出土遺物②



第41图 搅乱出土遺物③

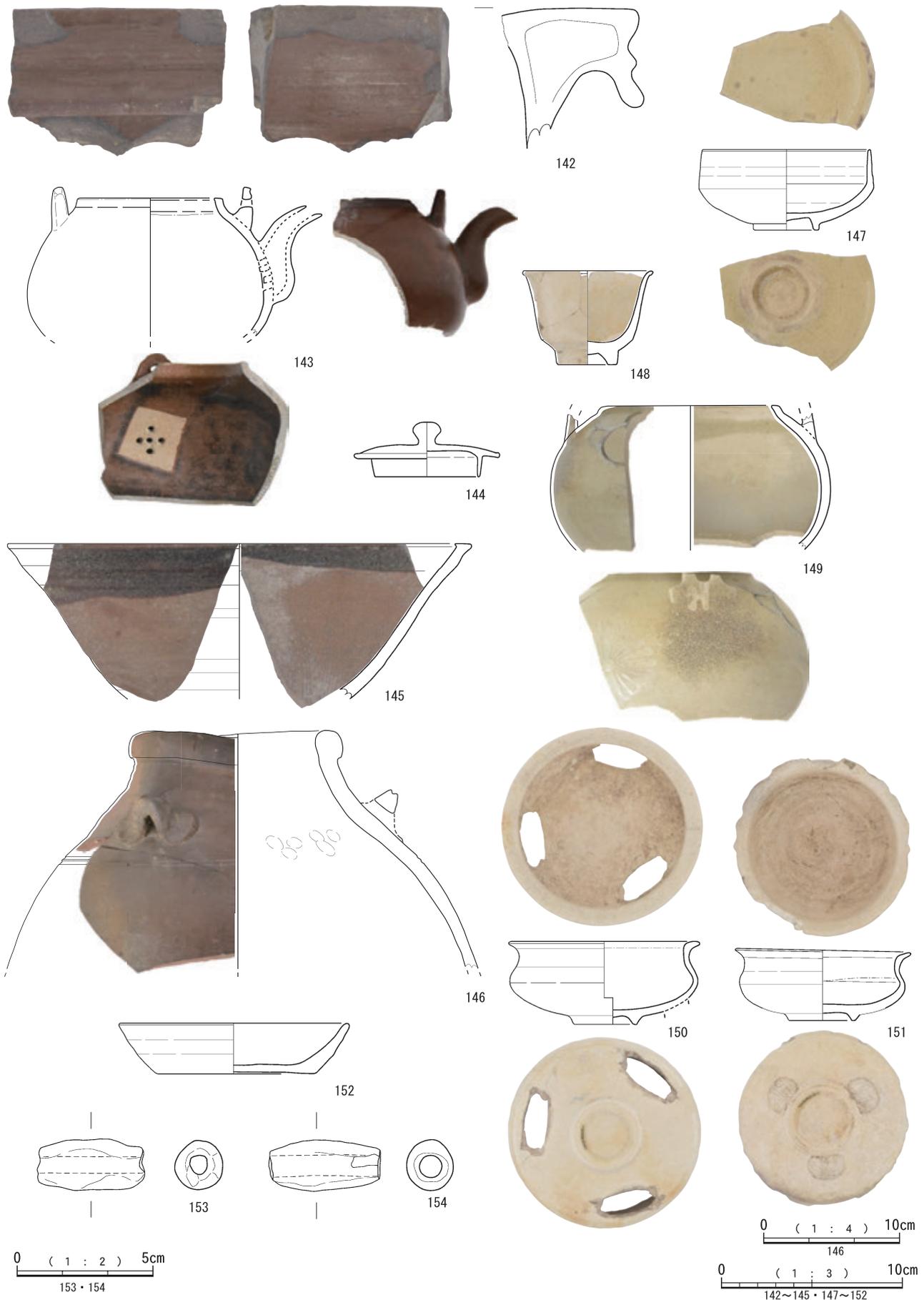


0 (1 : 3) 10cm

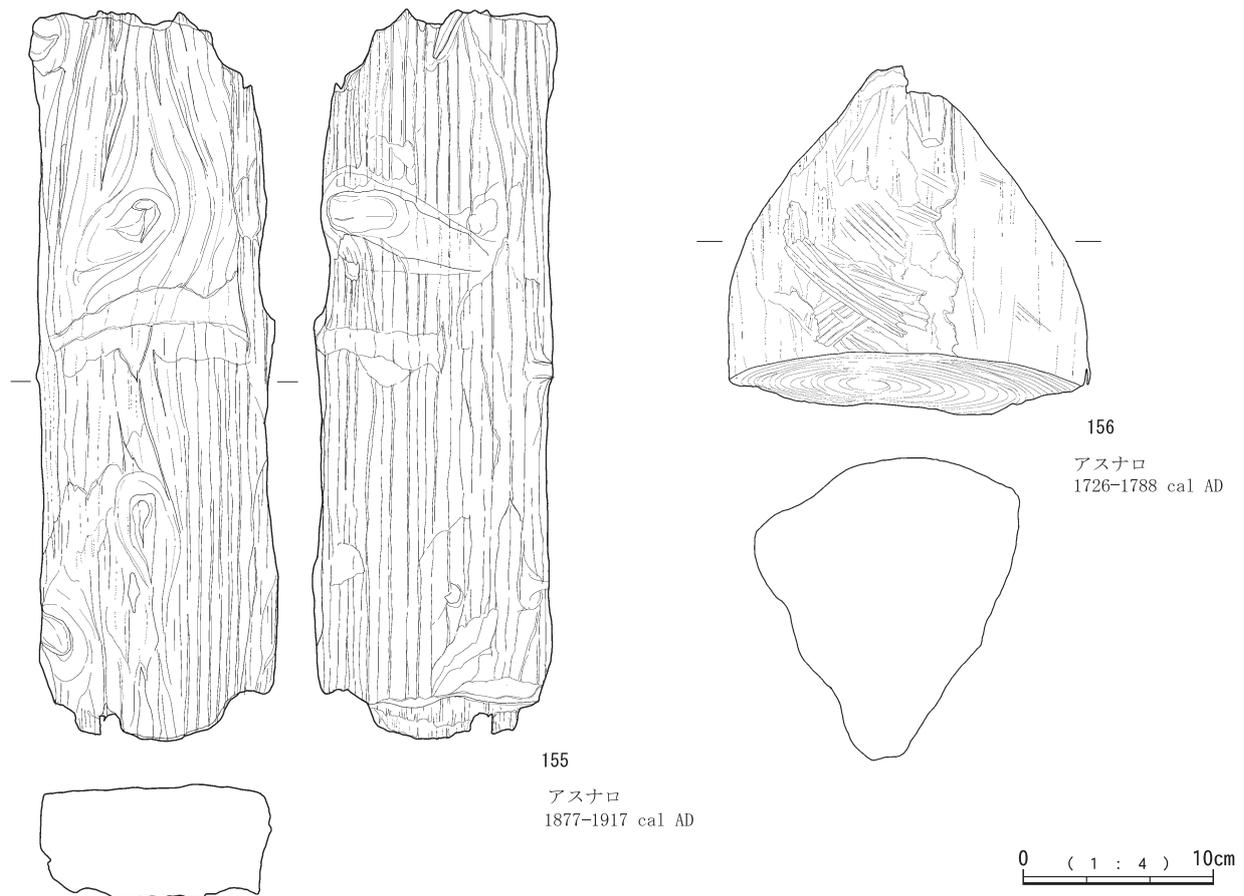
第42図 攪乱出土遺物④



第43図 攪乱出土遺物⑤



第44图 搅乱出土遺物⑥



第45図 攪乱出土遺物⑦

第4節 近代以降の調査成果

1 II層 (第37・38図)

II層は黒色砂質土で白パミスが混在している層である。調査区の北東側は良好に堆積していた。II層からは石組排水溝や石列・礎石が検出された。調査区全体は攪乱が多く、ガラス片やコンクリートなども出土することから、遺物はII層出土の遺物ではなく、攪乱として取り上げた。

(1) 石組排水溝 (第37図)

L-80'区から検出した。検出層はII層に該当する。30×30×90cmほどの凝灰岩製の切石を並べて、敷石には厚み10cmほどの同じ石材の板状の石を使用している。幅は60cmほどである。土塁状に残ったII層の下から検出したが、II層が前の工事で削られて、土塁状に残存したことで、排水溝も残存したのではないかと考える。方向がグリッドに沿っておらず、南北に走る。

(2) 石列・礎石 (第38図)

L・M-78'・79'区のII層で検出した。こぶし大の礫が多く、屈曲を伴った列をなしている。コンクリートやガラスなどの近代遺物が混ざっており、下のレベルからも攪乱が出てきたので近代の遺構の可能性はある。ただ、近くの礎石(M-78'区)は、砂層の上に黒土を

入れて据えてあり、レベルも同じくらいである。

(3) 出土遺物 (第39～45図)

89・90は軒丸瓦, 91～93は菊瓦, 94・95は軒平瓦, 96が丸瓦, 97は海鼠瓦である。

98～101は青花の碗である。102～114は肥前系の染付である。104～107・109は有田で、105は大皿。109は折れ皿で優品である。106・107は同一個体と考えられる。

115・116は唐津・武雄の陶器である。117・118は肥前系の陶器皿である。119は瀬戸美濃の植木鉢である。120は天目碗である。121～131は加治木・始良系の陶器である。

132～144は薩摩焼である。135・136は壺で内面にあって具痕が明瞭に残り、二次焼成を受ける。139は堂平窯の甕で、口唇部に目跡が残る。142は植木鉢である。145は肥前系の挿鉢である。146はタイの二耳壺である。147～151は白薩摩である。147は煎茶碗で、149は急須で菊文が胴部につく。152は土師器の皿, 153・154は土錘である。

155・156は建材と思われる木材片である。155は釘が残る。156は表面に皮目が残る。

第5表 遺物観察表（陶磁器）

挿図 番号	掲載 番号	グリッド	層	遺構	種別	器種	法量 (cm)			胎土色調		釉調	施釉色調		技法 / 特徴	高台 / 底部	産地	窯	年代	備考
							口径	底径	器高	色名	マンセル		色名	マンセル						
17	1	K-79'	V	P9	陶器	甕	18.0	—	—	灰黄	2.5Y7/2	褐釉	トープ	4YR3.0/1.0	外面タタキ 痕	—	薩摩	—	17c 後～ 18c 前半?	
	2	K-79'	V	P9	陶器	壺	—	—	—	褐灰	10YR6/2	黒釉	黒色	N1.5	—	—	タイ	—	15c 前後	
	3	K-79'	V	P9	陶器	鉢	—	—	—	灰黄褐	10YR6/2	褐灰釉	シルバーグレイ トープ	N7.5 4YR3.0/1/0	茶道具?水 差しか	—	薩摩	—	～18c 後 半か	
	4	K-79'	V	P10	陶器	播鉢	—	14.8	—	褐灰	10YR6/1	褐灰釉	焦茶	8YR2.5/1.5	—	—	薩摩	苗代川 系	18c 後半 ～	
	5	K-79'	V	P25	陶器	播鉢	—	—	—	灰黄褐	10YR5/2	褐灰釉	焦茶	8YR2.5/1.5	口唇部貝目	—	薩摩	苗代川 系	18c 後 ～	
	6	K-79'	V	P25	陶器	甕・壺 か	—	23.2	—	にぶい 赤褐	2.5YR5/4	—	外面：アン ティックブラウ ン 内面：灰汁色	4YR3.0/6.0 5Y5.0/1.0	—	—	薩摩	—	～18c 後 半か	二次焼成
	7	L-79'	V	P26	青花	大皿	—	11.8	—	灰白	10YR8/1	透明釉	パウダーブルー	3PB6.5/2.0	—	砂・粗穀 付着	中国	漳州	16c 末～ 17c 前半	
	8	L-79'	V	P27	陶器	碗	10.8	4.2	4.0	にぶい 褐	7.5YR6/3	灰釉	ミストグリーン	3GY7.5/2.0	口唇部鉄釉	露胎 (削 り高台)	肥前	—	17c ～ 18c	
21	14	H・I-81'・82'	V	SD1	青花	皿	—	7.4	—	灰白	10YR8/1	透明釉	うす群青	6PB5.0/10.0	草花文	墨付釉剥 ぎ	中国	景德镇	16c 後半 ～17c 初	
	15	H-82'	V	SD1	磁器	碗	—	3.0	—	灰白	10YR8/1	透明釉	黒緑	3G2.0/1.5	手描き五弁 花	墨付釉剥 ぎ	肥前	—	1780 ～ 1810	
	16	I-82'	V	SD1	陶器	小壺	—	4.6	—	灰白	10YR8/2	透明釉	さびあさぎ	5BG4.5/5.0	千鳥文	露胎	薩摩	堅野	18c 後 ～	
	17	—	V	SD1	陶器	香炉仏 具	9.2	—	—	灰白	2.5Y8/2	透明釉	鳥の子色	5Y9.0/2.0	—	—	薩摩	堅野	18c 後 ～	
	18	H・I-81'・82'	V	SD1	磁器	糸目土 瓶	8.0	—	—	灰白	2.5Y7/1	鉄釉	シルバーグレイ	N7.5	—	—	薩摩	苗代川 系	18c 前半	二次焼成
	19	I-81'	V	SD1	磁器	鉢	—	—	—	灰白	10Y8/1	鉄釉	灰汁色 アンティックブ ラウン	5Y5.0/1.0 4YR3.0/6.0	口唇部目跡	—	薩摩	苗代川 系	18c 後 ～	
	20	H・I- 81'・82'・J- 81'	V	SD1	磁器	鉢	21.4	—	—	にぶい 橙	7.5YR6/4	鉄釉	灰汁色	5Y5.0/1.0	—	—	薩摩	苗代川 系	18c 後 ～	
	21	I-82'・I-80'	V	SD1	磁器	植木鉢	—	—	—	褐灰	7.5YR4/1	鉄釉	憲房色	5Y2.0/0.5	—	—	薩摩	苗代川 系	18c 後 ～	
	22	—	V	SD1	陶器	植木鉢	—	—	—	明赤褐	2.5YR5/6	—	—	—	—	—	薩摩	—	18c 後 ～	
	23	J-81'	V	SD1	陶器	植木鉢	—	—	—	赤褐	2.5YR4/6	—	—	—	—	—	琉球	—	18c 後 ～	
22	24	J-82'	V	SD1	陶器	植木鉢	36.6	—	—	にぶい 褐	7.5YR5/4	—	—	—	—	—	薩摩	—	18c 後 ～	
23	28	H-81'	V	SK1	陶器	急須	6.8	5.6	8.2	灰白	7.5Y8/1	透明釉	アイボリホワイ ト 浅はなだ ブロンズ	5Y9.0/1.0 3PB5.0/5.5 5Y4.0/5.5	—	露胎	薩摩	堅野	～19c	
24	36	L-81'・82'	V	瓦溜り	磁器	碗	9.8	4.8	4.9	灰白	10YR8/1	透明釉	藍色	3PB3.5/5.5	—	露胎	中国	景德镇	18c 後 ～	清明磁器
	37	L-82'	V	瓦溜り	陶器	碗	—	4.4	—	灰褐	7.5YR4/2	透明釉	ミストグリーン	3GY7.5/2.0	白化粧土	露胎	薩摩	龍門司	18c 後 ～	
	38	L-81'・82'	V	瓦溜り	陶器	香炉仏 具	—	—	—	淡黄	2.5Y8/3	透明釉	鳥の子色	5Y9.0/2.0	三つ足	—	薩摩	堅野	18c 後 ～	
	39	L-82'	V	瓦溜り	陶器	片口鉢	—	—	—	明赤褐	5YR5/6	—	灰汁色	5Y5.0/1.0	—	—	薩摩	堂平	17c 後～ 18c 前半	
25	40	L-81'・82'	V	瓦溜り	陶器	蓋	37.0	—	—	明赤褐	5YR5/6	灰釉	灰汁色	5Y5.0/1.0	—	—	薩摩	苗代川 系	18c 後 ～	
	41	L-81'・82'	V	瓦溜り	陶器	山じよ か蓋	12.4	底径 16.0	4.4	灰黄褐	10YR6/2	灰釉	灰汁色	5Y5.0/1.0	—	—	薩摩	苗代川 系	18c 後 ～	
26	44	H-82'	V	—	青磁	鉢	—	—	—	灰白	2.5Y8/1	青磁釉	ろくしょう	3G5.0/5.0	—	—	中国	龍泉窯	15c 後 ～	
	45	H・I-81'	V	—	青花	碗	—	5.8	—	灰白	10YR8/1	透明釉	黒緑	3G2.0/1.5	貫入	露胎	中国	漳州	16c 後 ～	
	46	H-81'	V	—	陶器	碗	10.4	4.2	5.4	浅黄橙	7.5YR7/3	明褐釉	コーヒーブラウ ン	8YR3.5/6.0	蛇の目釉剥 ぎ	露胎	薩摩	山元	17c 後～ 18c 前半	
	47	H-81'	V	—	陶器	碗	—	5.0	—	灰白	10YR7/1	黄橙釉	灰汁色 焦茶	5Y5.0/1.0 8YR2.5/1.5	蛇の目釉剥 ぎ	墨付釉剥 ぎ	薩摩	龍門司	18c 後 ～	
	48	H-81'	V	—	陶器	皿	10.1	4.8	2.8	灰白	10YR8/1	内面：明黄褐 色釉 外面：浅 黄色	油色	5Y6.0/6.0	見込みに目 痕	露胎	薩摩	龍門司	18c 後 ～	
	49	H-81'	V	—	陶器	壺	16.4	—	—	褐灰	10YR6/1	灰釉	鳥の子色 トープ	5Y9.0/2.0 4YR3.0/1.0	—	—	薩摩	—	17c 後～ 18c 前半	二次焼成
	50	H-82'	V	—	陶器	小壺	5.0	—	—	黒褐	10YR3/1	灰釉	灰汁色	5Y5.0/1.0	—	—	薩摩	—	17c 後～ 18c 前半	

第6表 遺物観察表（陶磁器）

挿図 番号	掲載 番号	グリッド	層	遺構	種別	器種	法量 (cm)			胎土色調		釉調	施釉色調		技法 / 特徴	高台/ 底部	産地	窯	年代	備考
							口径	底径	器高	色名	マンセル		色名	マンセル						
27	51	H-82'	V	—	陶器	播鉢	32.0	—	—	明赤褐	5YR5/6	灰釉	トープ	4YR3.0/1.0	—	—	薩摩	苗代川系	18c	
	52	H-81'	V	—	陶器	蓋	37.0	—	—	にぶい赤褐	5YR5/3	灰釉	黒柿色 鳥の子色	4R2.0/1.5 5Y9.0/2.0	口唇部に目跡	—	薩摩	苗代川系	18c	二次焼成
	53	H-82'	V	—	陶器	蓋	25.2	21.8	7.0	にぶい赤褐	5YR4/3	灰釉	トープ	4YR3.0/1.0	—	—	薩摩	苗代川系	18c	
	54	—	V	—	陶器	植木鉢	—	—	—	褐	7.5YR4/4	茶褐色釉	—	—	—	—	琉球	—	18c	
28	59	J-80'	III	SD2	青花	皿	—	8.2	—	灰白	10YR8/1	透明釉	藍色	3PB3.5/5.5	—	砂付着： 露胎	中国	景德鎮	16c 後半	
	60	J-80'	III	SD2	陶器	壺	—	8.8	—	灰黄褐	10YR5/2	鉄釉	焦茶	8YR2.5/1.5	—	—	中国南部	—	17c	
	61	J-79'J-80'	III	SD2	陶器	小壺	4.4	—	—	にぶい赤褐	5YR5/3	—	—	—	—	—	—	—	—	丹塗
36	78	J-82'	III	—	青磁	碗	—	—	—	灰白	5Y7/1	青磁釉	モスグリーン オリーブグリーン	3GY5.5/5.5 3GY3.5/5.0	雷文帯	—	中国	龍泉窯	15～16c	
	79	J-81'	III	—	青磁	稜花皿	—	—	—	灰白	2.5Y7/1	青磁釉	浅緑	3G8.0/5.0	草花文	—	中国	龍泉窯	15～16c	
	80	L-80'	III	—	青磁	稜花皿	—	—	—	灰白	5Y8/1	青磁釉	モスグリーン	3GY5.5/5.5	草花文	—	中国	龍泉窯	15～16c	
	81	I-80'	III	—	青花	碗	10.4	—	—	灰白	N8/0	透明釉	うす群青	6PB5.0/10.0	草花文	—	中国	景德鎮	17c 前半	
	82	I-80' J-77'～79'	III 攪乱	—	青花	碗	11.4	—	—	灰白	2.5Y8/1	透明釉	パウダークブルー	3PB6.5/2.0	草花文	—	中国	景德鎮	16c 末～ 17c 初	
	83	I-81'	III	—	陶器	碗	—	4.4	—	灰白	5Y7/1	灰釉	モスグリーン オリーブグリーン	3GY5.5/5.5 3GY3.5/5.0	—	—	肥前	—	18c	二次焼成
	84	L-80'	III	—	陶器	皿	—	4.6	—	灰	5Y6/1	灰釉	利休ねずみ	3G5.0/1.0	—	—	肥前	—	18c	二次焼成
	85	I-81'	III	—	陶器	鉢	—	—	—	赤褐	5YR4/6	灰釉	灰汁色	5Y5.0/1.0	—	—	薩摩	苗代川系	18c	
	86	I-81'	III	—	陶器	播鉢	—	—	—	灰白	2.5Y8/2	鉄釉	内面：焦茶	8YR2.5/1.5	—	—	肥前	—	17c 後～ 18c 前半	
	87	I-80'	III	—	陶器	播鉢	—	—	—	にぶい橙	7.5YR6/4	鉄釉	灰汁色	5Y5.0/1.0	—	—	肥前	—	17c 前半	
88	I-81'	III	—	陶器	甕	36.0	—	—	褐灰	10YR6/1	灰釉	灰汁色	5Y5.0/1.0	口唇部目跡	—	薩摩	堂平	17c 後～ 18c 前半		
39	98	J-77'～79'	攪乱	—	青花	碗	12.5	4.1	4.7	灰白	10YR8/1	透明釉	パウダークブルー	3PB6.5/2.0	—	露胎	中国	漳州		
	99	J-76'	攪乱	—	青花	碗	—	5.0	—	灰白	10YR8/1	透明釉	パウダークブルー	3PB6.5/2.0	—	露胎	中国	漳州		
	100	—	攪乱	—	青花	碗	—	4.4	—	灰白	10YR8/1	透明釉	藍色	3PB3.5/5.5	—	墨付砂目 付着	中国	漳州		
	101	—	攪乱	—	青花	皿	—	4.9	—	灰白	10YR8/1	透明釉	黒緑	3G2.0/1.5	—	露胎	中国	漳州		
40	102	J-76'・77'	攪乱	—	磁器	碗	12.4	—	—	灰白	N8/0	透明釉	スペクトルブルー	3PB3.5/11.5	望料形か	—	肥前	有田	18c 後半	
	103	J-79'・80'	攪乱	—	磁器	碗	—	4.4	—	灰白	10YR8/1	透明釉	うす群青	6PB5.0/10.0	五弁花	墨付釉剥 ぎ	肥前	—	18c 後半	
	104	J-76'・77'	攪乱	—	磁器	皿	15.4	—	—	灰白	N8/0	透明釉	スペクトルブルー	3PB3.5/11.5	型打成形	—	肥前	有田	18c 前半	
	105	J-76'	攪乱	—	磁器	皿	—	—	—	灰白	10YR8/1	透明釉	藍色	3PB3.5/5.5	五弁花	—	肥前	有田	18c 前半	
	106	J-76'・77'	攪乱	—	磁器	大皿	—	18.2	—	灰白	10YR8/1	透明釉	スペクトルブルー	3PB3.5/11.5	高台内はり 文え熔着痕 5個	露胎	肥前	有田	18c 後半	107 と同一 個体
	107	J-76'・77'	攪乱	—	磁器	大皿	28.0	—	—	灰白	10YR8/1	透明釉	スペクトルブルー	3PB3.5/11.5	内面鎔足唐 草文	—	肥前	有田	18c 後半	106 と同一 個体
	108	J-77'・78'	攪乱	—	磁器	輪花皿	19.6	—	—	灰白	10YR8/1	透明釉	藍色	3PB3.5/5.5	—	—	肥前	有田	18 c	
	109	J-76'・77'	攪乱	—	磁器	皿	24.8	13.0	3.3	灰白	N8/0	透明釉	うす群青	6PB5.0/10.0	芙蓉	—	肥前	有田	18c 前半	ヨーロ ッパ デザ イン
110	L・M-77'	攪乱	—	磁器	仏飯器	—	4.2	—	灰白	N8/0	透明釉	シルバークレイ	N7.5	—	露胎	肥前	—	18 c		
41	111	J-79'・80'	攪乱	—	磁器	皿	12.8	8.4	3.4	灰白	10YR8/1	透明釉	パウダークブルー	3PB6.5/2.0	—	高台裏蛇 の目釉剥 ぎ	肥前	—	18c 後半	
	112	H-80'	攪乱	—	磁器	皿	12.5	7.4	2.7	灰白	10YR8/1	透明釉	うす群青	6PB5.0/10.0	—	高台裏蛇 の目釉剥 ぎ	肥前	—	18c 後半	
	113	J-76' J-76'・77'	攪乱	—	磁器	皿	10.4	7.1	1.9	灰白	10YR8/1	透明釉	藍色	3PB3.5/5.5	コンニャク 印判	高台裏蛇 の目釉剥 ぎ	肥前	—	19c	
	114	J-76'・77'	攪乱	—	磁器	蓋	9.9	つま み径 4.3	3.0	灰白	10YR8/1	内面： 透明釉 外面： 淡緑色	藍色	3PB3.5/5.5	五弁花・渦 巻福	目痕 2カ 所	肥前	—	18c 後半	

第7表 遺物観察表（陶磁器）

挿図 番号	掲載 番号	グリッド	層	遺構	種別	器種	法量 (cm)			胎土色調		釉調	施釉色調		技法 / 特徴	高台 / 底部	産地	窯	年代	備考
							口径	底径	器高	色名	マンセル		色名	マンセル						
41	115	L-M-78'	攪乱	—	陶器	皿	—	—	—	にぶい 黄橙	10YR6/3	—	エポニー	5Y3.0/0.5	化粧土・鉄 絵	—	肥前	唐津	18c	
	116	J-77'~79'	攪乱	—	陶器	皿	13.0	5.2	4.7	明赤褐	5YR5/6	—	焦茶	8YR2.5/1.5	鉄絵	露胎	肥前	唐津	18c	
	117	J-80'・81' I-80'	攪乱	—	陶器	皿	13.4	3.6	3.4	褐灰	10YR5/1	灰釉	オリーブドラブ	5Y4.5/2.0	化粧土	—	肥前	—	18c	
	118	—	攪乱	—	陶器	皿	13.2	4.8	3.8	赤褐	2.5YR5/6	灰釉	オイスター 油色	5Y7.5/1.0 5Y6.0/6.0	目跡	—	肥前	—	18c	二次焼成
	119	J-76'	攪乱	—	陶器	植木鉢	—	20.2	—	灰白	2.5Y8/1	緑釉褐 釉	フォレストグ リーン れんが	9G2.5/4.5 4YR4.0/6.0	—	露胎	瀬戸美 濃	—	19c	
42	120	I-80'	攪乱	—	陶器	天目碗	11.4	3.8	6.1	灰白	5Y8/1	鉄釉	黒柿色	4R2.0/1.5	—	露胎	瀬戸美 濃?	—	17~18 c?	
	121	J-79'・80'	攪乱	—	陶器	碗	11.8	—	—	黒褐	10YR3/2	鉄釉	金茶 焦茶	8YR5.0/11.0 8YR2.5/1.5	2色釉	露胎	薩摩	龍門司	18c後半	
	122	L-77'・78'	攪乱	—	陶器	碗	—	4.6	—	浅黄橙	7.5YR8/6	茶黄釉	コーヒープラウ ン スブルース	8YR3.5/6.0 3G2.0/0.5	蛇の目釉剥 ぎ	墨付釉剥 ぎ	薩摩	龍門司	18c前半	
	123	—	攪乱	—	陶器	碗	12.5	5.1	6.8	橙	7.5YR6/8	暗褐~ 明褐色	黒柿色 マホガニー	4R2.0/1.5 4R2.5/6.0	蛇の目釉剥 ぎ	露胎	薩摩	龍門司	18c後半	
	124	I-80'	攪乱	—	陶器	碗	—	3.8	—	褐灰	10YR6/1	黒釉	墨色 パールホワイト	N1.5 N8.5	—	露胎	薩摩	龍門司	18c後半	
	125	J-79'・80'	攪乱	—	陶器	皿	11.6	4.8	2.8	褐灰	10YR5/1	黒茶釉	焦茶	8YR2.5/1.5	—	糸切底	薩摩	龍門司	18c後半	
	126	J-79'・80'	攪乱	—	陶器	皿	9.8	4.6	2.5	明赤褐	5YR5/6	黒茶釉	油色	5Y6.0/6.0	—	糸切底	薩摩	龍門司	18c後半	
	127	I-80'	攪乱	—	陶器	皿	12.2	4.1	3.6	赤褐	10R5/3	灰黄褐 色	ブロンズ	5Y4.0/5.5	化粧土	露胎	薩摩	龍門司	18c後半	
	128	—	攪乱	—	陶器	碗	11.8	—	—	にぶい 赤褐	5YR5/4	鉄釉	くり色	4YR2.0/0.5	—	—	薩摩	龍門 司?	18c後半	
	129	—	攪乱	—	陶器	碗	—	4.8	—	灰黄	2.5Y7/2	灰釉	オイスター	5Y7.5/1.0	目跡	—	薩摩	龍門司	18c後半?	
	130	H-I-78'	攪乱	—	陶器	壺・ 瓶?	—	5.8	—	灰白	5Y7/1	灰釉	リリーホワイト	3G9.0/1.0	—	—	薩摩	龍門司	15~ 16c?	
	131	J-81'	攪乱	—	陶器	碗	—	4.4	—	浅黄橙	10YR8/3	灰釉	鳥の子色	5Y9.0/2.0	—	—	薩摩	龍門司	18c後半?	
	43	132	K-79'	攪乱	—	陶器	蓋	25.0	17.6	6.3	にぶい 赤褐	2.5YR4/4	灰釉	トープ 墨色	4YR3.0/1.0 N1.5	—	—	薩摩	苗代川 系	18c後半 ~
133		L-78'	攪乱	—	陶器	播鉢	—	—	—	褐灰	7.5YR6/1	灰釉	コーヒープラウ ン	8YR3.5/6.0	—	—	薩摩	苗代川 系	18c後半 ~	
134		K-80'	攪乱	—	陶器	植木鉢	—	—	—	明赤褐	2.5YR5/6	灰釉	—	—	—	—	薩摩	苗代川 系?	18c後半 ~	
135		I-80'	攪乱	—	陶器	壺	12.4	—	—	灰黄褐	10YR6/2	灰釉	パールホワイト	N8.5	—	—	薩摩	堂平	17c後~ 18c前半	二次焼成
136		M-77'	攪乱	—	陶器	壺	—	11.4	—	灰	7.5Y4/1	灰釉	焦茶 カナリア色	8YR2.5/1.5 5Y8.5/11.0	内面当て具 痕	—	薩摩	堂平	17c後~ 18c前半	二次焼成
137		I-80'	攪乱	—	陶器	壺	—	6.6	—	灰赤	10R4/2	黒釉	シダーグリーン	5Y2.5/1.5	—	—	薩摩	苗代川 系	18c後半 ~	
138		J-80'・81'	攪乱	—	陶器	甕	19.8	—	—	灰白	2.5Y8/1	灰釉	アンテックブラ ウン 油色	4YR3.0/6.0 5Y6.0/6.0	—	—	薩摩	苗代川 系	18c後半 ~	
139		I-80'	攪乱	—	陶器	甕	34.0	—	—	赤褐	5YR4/6	灰釉	シルバーグレイ	N7.5	口唇部目跡	—	薩摩	堂平	17c後~ 18c前半	
140		H-I-78'	攪乱	—	陶器	脚付鉢	25.8	15.0	—	明赤褐	2.5YR5/6	灰釉	灰汁色	5Y5.0/1.0	三脚	—	薩摩	苗代川 系	18c後半 ~	
141		K-78'・K-81'	攪乱	—	陶器	土瓶	15.5	6.0	13.8	明赤褐	5YR5/6	灰釉	焦茶	8YR2.5/1.5	—	—	薩摩	苗代川 系	18c後半 ~	
44	142	L-78'	攪乱	—	陶器	植木鉢	—	—	—	褐灰灰 白	10YR5/1 10YR7/1	灰釉	れんが色	4YR4.0/6.0	—	—	薩摩	苗代川 系	18c後半 ~	
	143	J-77'~79'	攪乱	—	陶器	急須	8.0	—	—	灰白	10YR7/1	茶黒釉	コーヒープラウ ン	8YR3.5/6.0	—	—	薩摩	苗代川 系	19c	
	144	J-79'・80'	攪乱	—	陶器	蓋	5.8	底径 8.0	3.0	にぶい 赤褐	5YR5/3	灰釉	焦茶	8YR2.5/1.5	—	—	薩摩	苗代川 系	18c後半 ~	
	145	—	攪乱	—	陶器	播鉢	25.4	—	—	灰褐	5YR5/2	鉄釉	トープ	4YR3.0/1.0	—	—	肥前	—	18c	
	146	L-81'	攪乱	—	陶器	壺	15.7	—	—	赤褐	2.5YR4/6	透明釉	—	—	二耳壺	—	タイ	—	16c	
	147	H-I-78'	攪乱	—	陶器	碗	9.2	3.6	4.5	灰白	2.5Y8/2	透明釉	鳥の子色	5Y9.0/2.0	—	—	薩摩	—	18c	
	148	J-77'~79'	攪乱	—	陶器	小碗	7.2	3.2	5.2	灰白	2.5Y8/2	透明釉	鳥の子色	5Y9.0/2.0	—	—	薩摩	堅野	18c~	
	149	L-77'	攪乱	—	陶器	急須	9.8	—	—	灰白	5Y8/1	透明釉	枯草色	5Y7.5/6.0	外面;菊文	—	薩摩	堅野	18c~	
	150	J-76'	攪乱	—	陶器	香炉仏 具	10.6	3.6	4.6	灰白	2.5Y8/2	透明釉	鳥の子色	5Y9.0/2.0	外面;千鳥 文	—	薩摩	堅野	18c~	
151	J-76'	攪乱	—	陶器	香炉仏 具	9.6	3.8	4.0	灰白	2.5Y8/1	透明釉	鳥の子色	5Y9.0/2.0	—	—	薩摩	堅野	18c~		

第8表 遺物観察表（瓦）

挿図番号	掲載番号	種別	瓦種	グリッド	層	遺構	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	瓦当：文様	連珠数	瓦当直径 (cm)	周縁幅 (cm)	瓦当高 (cm)	文様高 (cm)	内径 (cm)	文径 (cm)	備考
19	9	瓦	丸瓦	I-81'	V	SD1	29.5	15.4	1.7	—	—	—	—	—	—	—	—	
	10	瓦	丸瓦	I-82'	V	SD1	30.0	14.6	1.6	—	—	—	—	—	—	—	—	
20	11	瓦	丸瓦	J-81'	V	SD1	(27.0)	15.6	1.8	—	—	—	—	—	—	—	—	
	12	瓦	丸瓦	J-82'	V	SD1	(32.5)	14.4	2.0	—	—	—	—	—	—	—	—	「兵」スタンプ
21	13	瓦	平瓦	J-82' H-I-81'82'	V	SD1	31.1	(26.9)	1.8	—	—	—	—	—	—	—	—	
24	30	瓦	軒丸瓦	—	—	瓦溜り	—	—	2.2	連珠三巴文	9	17.0	1.5	—	—	8.2	13.2	
	31	瓦	軒丸瓦	L-82'	—	瓦溜り	—	—	—	連珠三巴文	(8)	16.1	2.5	—	—	6.8	10.8	
	32	瓦	軒棧瓦	—	—	瓦溜り	—	—	—	唐草文	—	—	—	3.7	2.1	—	—	
	33	瓦	軒平瓦	—	—	瓦溜り	—	—	—	唐草文	—	—	—	5.8	3.4	—	—	
	34	瓦	平瓦	—	—	瓦溜り	30.5	(13.2)	2.2	—	—	—	—	—	—	—	—	
	35	瓦	海鼠瓦	—	—	瓦溜り	(14.2)	(13.7)	2.5	—	—	—	—	—	—	—	—	
26	42	瓦	軒丸瓦	H-81'	V	—	—	—	1.7	—	(5)	—	1.7	—	—	—	—	
	43	瓦	平瓦	H-81'	V	—	(16.6)	(20.0)	2.2	—	—	—	—	—	—	—	—	
29	64	瓦	丸瓦	J-80'	III	瓦列	27.0	13.3	1.9	—	—	—	—	—	—	—	—	
	65	瓦	丸瓦	J-80'	III	瓦列	27.1	13.2	1.7	—	—	—	—	—	—	—	—	
30	66	瓦	丸瓦	J-80'	III	瓦列	(24.0)	13.8	1.9	—	—	—	—	—	—	—	—	
	67	瓦	丸瓦	J-80'	III	瓦列	27.0	13.0	1.7	—	—	—	—	—	—	—	—	
31	68	瓦	丸瓦	J-80'	III	瓦列	26.8	12.8	1.7	—	—	—	—	—	—	—	—	
	69	瓦	丸瓦	J-80'	III	瓦列	28.3	13.7	1.8	—	—	—	—	—	—	—	—	
32	70	瓦	丸瓦	J-80'	III	瓦列	27.1	13.1	1.9	—	—	—	—	—	—	—	—	
	71	瓦	丸瓦	J-80'	III	瓦列	26.7	13.2	1.8	—	—	—	—	—	—	—	—	
33	72	瓦	丸瓦	J-80'	III	瓦列	27.3	13.2	1.8	—	—	—	—	—	—	—	—	
	73	瓦	丸瓦	J-80'	III	瓦列	26.8	13.6	1.7	—	—	—	—	—	—	—	—	
34	74	瓦	丸瓦	I-81'	III	瓦列	27.2	12.7	1.8	—	—	—	—	—	—	—	—	
	75	瓦	丸瓦	I-81'	III	瓦列	26.8	13.4	2.1	—	—	—	—	—	—	—	—	
35	76	瓦	丸瓦	I-81'	III	瓦列	27.7	13.1	1.7	—	—	—	—	—	—	—	—	
36	77	瓦	軒平瓦	J-81'	III	—	—	—	—	唐草文	—	—	—	3.6	2.3	—	—	
39	89	瓦	軒丸瓦	L-77'	攪乱	—	—	—	(2.0)	連珠三巴文	9	17.3	1.9	—	—	8.0	13.5	
	90	瓦	軒丸瓦	L-77'	攪乱	—	—	—	—	連珠三巴文	(5)	14.3	1.9	—	—	7.5	10.8	
	91	瓦	菊瓦	L-78'	攪乱	—	—	—	2.0	菊文	—	—	0.9	8.9	—	6.0	6.9	
	92	瓦	菊瓦	L-78'	攪乱	—	—	—	—	菊文	—	—	1.9	12.4	—	7.5	8.5	
	93	瓦	菊瓦	M-80'	攪乱	—	—	—	2.2	菊文	—	—	1.8	—	—	—	—	
	94	瓦	軒平瓦	L-77'	攪乱	—	—	—	2.1	唐草文	—	—	—	5.5	3.4	—	—	
	95	瓦	軒平瓦	L-78'	攪乱	—	—	—	1.8	唐草文	—	—	—	4.1	2.5	—	—	
	96	瓦	丸瓦	H-I-78'	攪乱	—	(20.1)	15.0	1.8	—	—	—	—	—	—	—	—	
97	瓦	海鼠瓦	I-78'	攪乱	—	(27.0)	(12.8)	2.0	—	—	—	—	—	—	—	—		

第9表 遺物観察表（土師器・瓦質土器）

挿図番号	掲載番号	種別	器種	グリッド	層	遺構	法量 (cm)			胎土色調		備考
							口径	底径	器高	色名	マンセル	
22	25	瓦質土器	風炉	H-82'	V	SD1	11.2	13.6	13.8	灰白	10YR8/1	
	26	焼塩土器	蓋	H-82'	V	SD1	8.0	7.0	2.0	にぶい橙	7.5YR6/4	
	27	瓦質土器	焙烙把手	J-80'・81'	V	SD1	—	—	—	灰白	10YR8/2	
27	55	瓦質土器	風炉	H-82'	V	—	—	15.4	—	灰白	2.5Y8/1	
	56	土師器	皿	H-81'	V	—	12.6	8.0	3.5	にぶい黄橙	10YR7/4	
	57	土師器	鉢	H-82v	V	—	—	—	2.9	灰白	10YR8/2	
28	62	瓦質土器	焙烙把手	J-79'・80'	III	SD2	—	—	—	浅黄橙	7.5YR8/3	
	63	土師器	坏	J-80'	III	SD2	12.2	8.8	2.4	淡黄	2.5Y8/3	
44	152	土師器	皿	J-76'・77'	攪乱	—	12.6	8.7	2.8	褐灰	10YR5/1	

第10表 遺物観察表（土錘）

挿図番号	掲載番号	グリッド	層	遺構	種別	器種	法量 (cm)				胎土色調		備考
							上径	下径	幅	重量 (g)	色名	マンセル	
44	153	L・M-79'	—	攪乱	土製品	土錘	3.9	0.6	1.8	12	赤褐色	2.5YR5/6	
	154	—	—	攪乱	土製品	土錘	4.1	0.8	1.9	10	橙	5YR7/6	

第11表 遺物観察表（木製品）

挿図番号	掲載番号	グリッド	層	遺構	種別	法量 (cm)			備考
						長径	短径	厚み	
23	29	H-81'	—	SK1	将棋盤?	27.2	26.7	1.7	
27	58	H-82'	V	—	建材	25.1	21.8	2.2	
45	155	H-78'	攪乱	—	建材	38.7	12.0	6.0	釘跡あり
	156	H-78'	攪乱	—	建材	18.0	19.2	16.0	東西トレンチ2

第4章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹
Zaur Lomtavidze・三谷智広

1 はじめに

鹿児島城二之丸跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同じ試料を用いて樹種同定も行われている（別項参照）。

2 試料と方法

試料はいずれも生材で、SK1 から出土した試料 No.1 (PLD-53739)、東西トレンチ2 から出土した試料 No.2 (PLD-53740)、東西トレンチ3 から出土した試料 No.3 (PLD-53741) の、計3点である。なお、今回の試料には、最終形成年輪は認められなかった。試料は、残存する年輪の一番外側から採取した。

樹種同定の結果、試料 No.1 はマツ属複維管束亜属、試料 No.2 と試料 No.3 はアスナロであった。

測定試料の情報、調製データは第12表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3 結果

第13表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、第46図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、14Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏

差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730 \pm 40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：暦年較正結果が1950年以降にのびる試料についてはPost-bomb atmospheric NH2）を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4 考察

放射性炭素年代測定の結果について、2 σ 暦年代範囲（確率95.45%）に着目して整理する。

SK1の試料No.1 (PLD-53739) は、1668-1697 cal AD (15.86%)、1723-1782 cal AD (33.78%)、1796-1813 cal AD (9.95%)、1835-1881 cal AD (12.76%)、1886-1886 cal AD (0.11%)、1909-1949 cal AD (21.80%)、1950-1954 cal AD (1.20%) で、17世紀後半～20世紀中頃の暦年代を示した。これは江戸時代前期～昭和時代に相当する。

東西トレンチ2の試料No.2 (PLD-53740) は、1662-1693 cal AD (19.01%)、1726-1788 cal AD (45.97%)、1793-1811 cal AD (9.71%)、1918-1954 cal AD (20.76%) で、17世紀後半～19世紀前半および20世紀前半～中頃の暦年代を示した。これは、江戸時代前期～末期および大正時代～昭和時代に相当する。

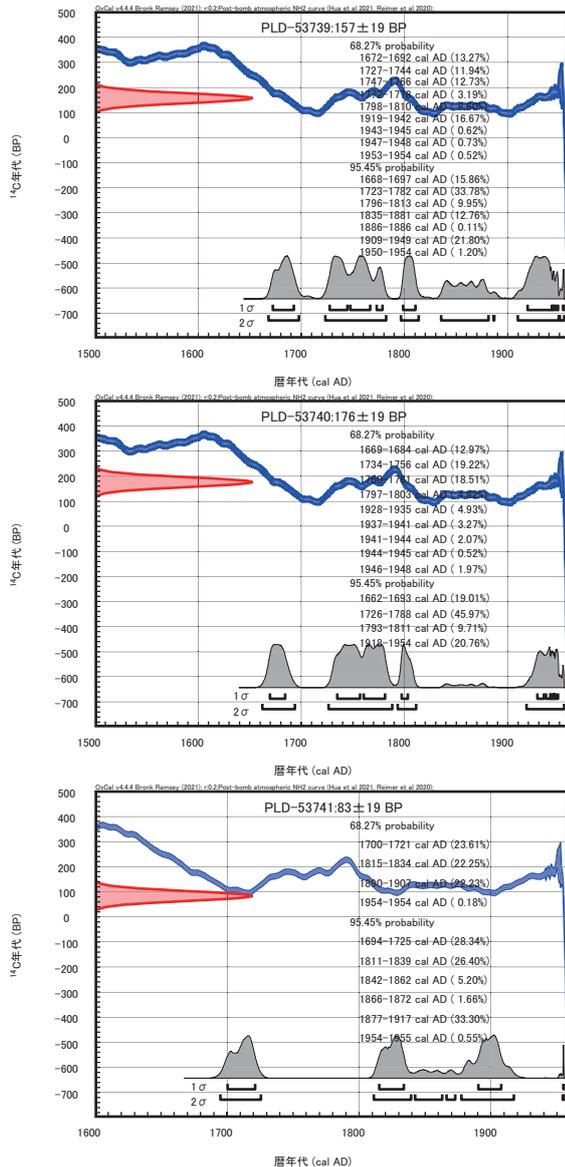
東西トレンチ3の試料No.3 (PLD-53741) は、1694-1725 cal AD (28.34%)、1811-1839 cal AD (26.40%)、

第12表 測定試料および処理

測定番号	掲載番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-53739	29	試料 No.1 遺物 No. H-81・SK1 備考：将棋盤？	種類：生材（マツ属複維管束亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）
PLD-53740	156	試料 No.2 遺物 No. H-78・東西トレンチ2	種類：生材（アスナロ） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）
PLD-53741	155	試料 No.3 遺物 No. H-78・東西トレンチ3	種類：生材（アスナロ） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）

第 13 表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	掲載番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-53739 試料 No. 1 遺物 No. H-81 ・SK1 将棋盤?	29	-28.64 \pm 0.11	157 \pm 19	155 \pm 20	Post-bomb NH2 curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1672-1692 cal AD (13.27%) 1727-1744 cal AD (11.94%) 1747-1766 cal AD (12.73%) 1772-1778 cal AD (3.19%) 1798-1810 cal AD (8.60%) 1919-1942 cal AD (16.67%) 1943-1945 cal AD (0.62%) 1947-1948 cal AD (0.73%) 1953-1954 cal AD (0.52%)	Post-bomb NH2 curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1668-1697 cal AD (15.86%) 1723-1782 cal AD (33.78%) 1796-1813 cal AD (9.95%) 1835-1881 cal AD (12.76%) 1886-1886 cal AD (0.11%) 1909-1949 cal AD (21.80%) 1950-1954 cal AD (1.20%)
PLD-53740 試料 No. 2 遺物 No. H-78 ・東西トレンチ 2	156	-25.18 \pm 0.11	176 \pm 19	175 \pm 20	Post-bomb NH2 curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1669-1684 cal AD (12.97%) 1734-1756 cal AD (19.22%) 1760-1781 cal AD (18.51%) 1797-1803 cal AD (4.82%) 1928-1935 cal AD (4.93%) 1937-1941 cal AD (3.27%) 1941-1944 cal AD (2.07%) 1944-1945 cal AD (0.52%) 1946-1948 cal AD (1.97%)	Post-bomb NH2 curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1662-1693 cal AD (19.01%) 1726-1788 cal AD (45.97%) 1793-1811 cal AD (9.71%) 1918-1954 cal AD (20.76%)
PLD-53741 試料 No. 3 遺物 No. H-78 ・東西トレンチ 3	155	-25.76 \pm 0.12	83 \pm 19	85 \pm 20	Post-bomb NH2 curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1700-1721 cal AD (23.61%) 1815-1834 cal AD (22.25%) 1890-1907 cal AD (22.23%) 1954-1954 cal AD (0.18%)	Post-bomb NH2 curve (Hua et al 2021, Reimer et al 2020): 1694-1725 cal AD (28.34%) 1811-1839 cal AD (26.40%) 1842-1862 cal AD (5.20%) 1866-1872 cal AD (1.66%) 1877-1917 cal AD (33.30%) 1954-1955 cal AD (0.55%)



第 46 図 暦年較正結果

1842-1862 cal AD (5.20%), 1866-1872 cal AD (1.66%), 1877-1917 cal AD (33.30%), 1954-1955 cal AD (0.55%) で、17 世紀末～18 世紀前半および 19 世紀前半～20 世紀中頃の暦年代を示した。これは、江戸時代中期～昭和時代に相当する。

今回の測定結果は、いずれも較正曲線に存在する 17 世紀以降の平坦部にかかり、複数の暦年代範囲が示される結果となった。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料は、いずれも最終形成年輪が残っていない部位不明の炭化材であり、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性がある。その場合、試料の木が実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりもやや新しい年代であると考えられる。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.
 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
 Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Ca-

pano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62 (4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

第2節 樹種同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

1 はじめに

鹿児島城の二之丸跡から出土した木製品の樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている(放射性炭素年代測定の項参照)。

2 試料と方法

試料は、H-81・SK1・9-①から1点、H-78・東西トレンチ2から1点、H-78・東西トレンチ3から1点出土した生材の木製品、計3点である。

樹種同定は、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柁目)について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラルで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

3 結果

同定の結果、針葉樹のマツ属複維管束亜属とアスナロの2分類群がみられた。アスナロが2点で、マツ属複維管束亜属は1点であった。同定結果を第14表に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、第47図に光学顕微鏡写真を示す。

(1) マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylo*
マツ科 第47図 1a-1c (No.1)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で切削等の加工は容易である。

(2) アスナロ *Thujaopsis dolabrata (L.f.) Siebold et Zucc.* ヒノキ科 第47図 2a-2c (No.2), 3a-3c (No.3)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行はやや急である。放射組織は単列で、高さ2~13列となる。分野壁孔は小型のヒノキ〜スギ型で、1分野に2~4個みられる。

第14表 鹿児島城二之丸跡出土木製品の樹種同定結果

試料 No.	採取位置	器種	樹種	年代測定番号
1	H-81・SK1	将棋盤?	マツ属複維管束亜属	PLD-53739
2	H-78・東西トレンチ2	木製品	アスナロ	PLD-53740
3	H-78・東西トレンチ3	木製品	アスナロ	PLD-53741

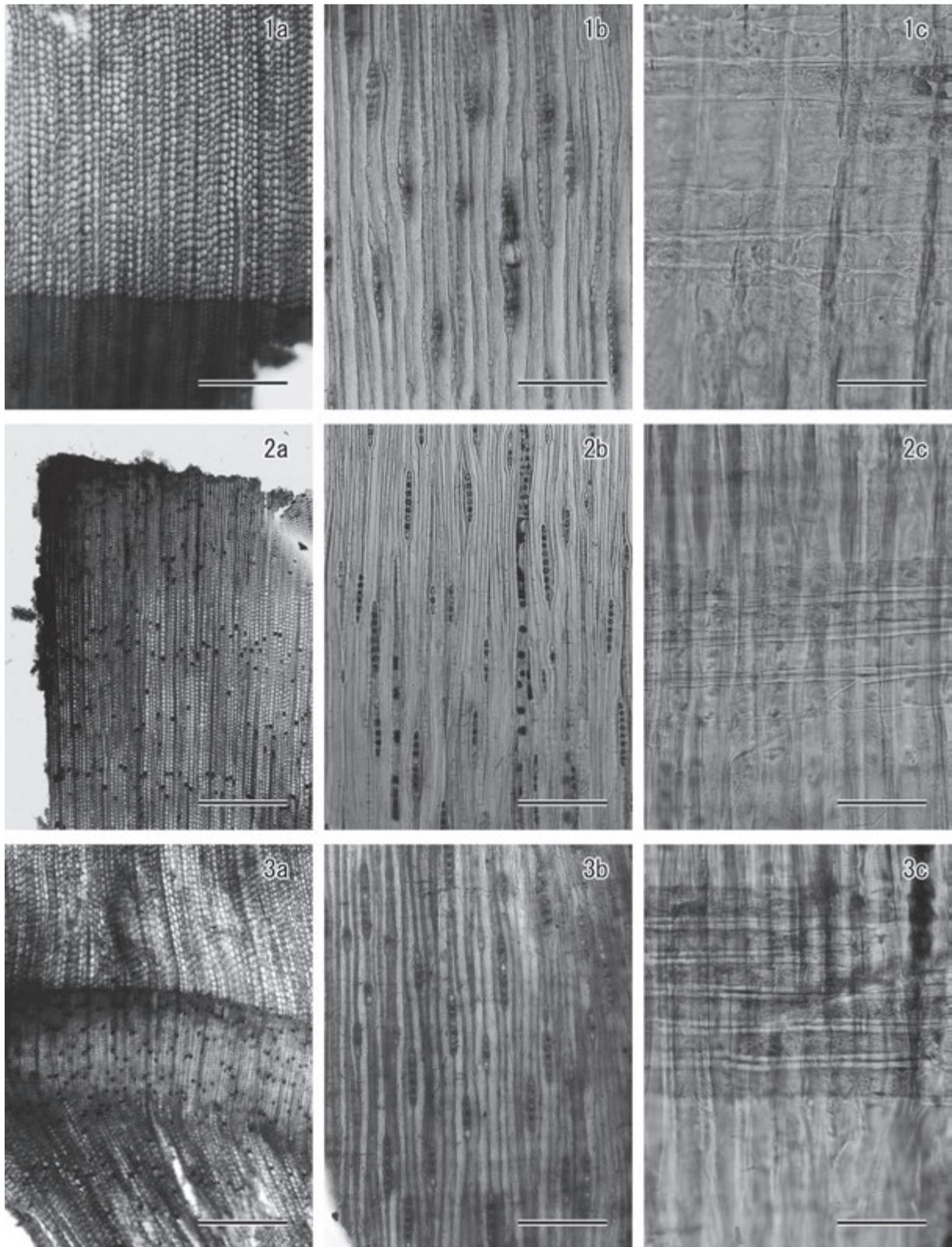
アスナロは温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。針葉樹の中では比較的軽軟で、切削等の加工は比較的容易である。また精油分が多く、耐朽性に優れている。

4 考察

同定の結果、将棋盤?はマツ属複維管束亜属、木製品はアスナロであった。マツ属複維管束亜属およびアスナロは、木理通直でまっすぐに生育し、加工性の良い樹種である(伊東ほか, 2011)。将棋盤は、江戸時代後半~近世初頭の高知城伝下屋敷跡から1点出土しており、樹種はモミ属であった(伊東・山田編, 2012)。鹿児島城二之丸跡の将棋盤?はマツ属複維管束亜属であり、樹種は異なっていたが、同定試料数が少ないため、将棋盤か否かの判断はできなかった。

引用文献

- 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和徳 (2011) 日本有用樹木誌. 238p, 海青社.
伊東隆夫・山田昌久編 (2012) 木の考古学—出土木製品用材データベース—. 449p, 海青社.



1a-1c. マツ属複維管束亜属 (No. 1)

2a-2c. アスナロ (No. 2)

3a-3c. アスナロ (No. 3) a: 横断面 (スケール=500 μm) b: 接線断面 (スケール=200 μm)
c: 放射断面 (スケール=50 μm)

第 47 図 鹿児島城二之丸跡出土木製品の光学顕微鏡写真

第5章 総括

第1節 調査の成果

1 近世の成果

本遺跡で残存していた近世相当層は、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層の3面あることが確認された。Ⅳ層からは遺物は見られなかったが、Ⅲ層、Ⅴ層からは陶磁器や瓦が多く出土している。近世最下層のⅤ層は約10～20cm堆積しており、鉄分を含む褐灰色の硬質層で溝状遺構（SD1）や土坑、柱穴列、瓦溜りが検出された。

溝状遺構（SD1）は、硬化した砂質土（鉄分でオレンジ色になっている）が1mほどの幅の道のようになっており、幅15cmほどの狭く浅い溝を両側に伴い、20mほど走る。両側の浅い溝の底も同じようにオレンジ色で硬化面をなしている。遺物が出土する層には、オレンジ色と灰色のラミナ状の層が見られ、水成堆積をした跡が見られた。おそらく狭く浅い溝は水路のような施設で、北西側に流れるように作られており、調査区西端でさらに低く下がった堀のような面に流れ込むのではないかと考えられる。ここには、水成堆積の跡が見られ、瓦や陶磁器、木片などが検出された。陶磁器は中国製磁器や肥前系磁器、薩摩焼など概ね17世紀前半から18世紀前半に相当する遺物が出土している。

また、Ⅴ層を掘り込んだ柱穴列では、根石を伴うものがあり、埋土が2層に分かれているものが多い。埋土の下層には凝灰岩と15世紀前後の東南アジア製陶磁器や16世紀末から17世紀前半の中国製陶磁器など比較的古い時期の陶磁器が出土し、埋土の上層には安山岩と18世紀の薩摩焼が出土している。埋土の下層はⅥ層と考えられるしまりのない砂質土の上に凝灰岩が据えられており、上層は、Ⅲ層と考えられるしまりのある黒褐色土に安山岩が据えられていた。この柱穴列が活用された時期

はⅤ層とⅢ層が造成された2つの時期があると考えられる。

Ⅲ層は調査区に台状に残存しており、周辺は削平されていた。黒褐色硬質土で比較的しまりのある状態で残存していることから、自然堆積層ではなく客土による造成面と考えられる。Ⅲ層が残存している場所からは、17世紀後半から18世紀前半と考えられる丸瓦を利用した瓦列や溝状遺構（SD2）が検出された。

瓦列は丸瓦を高低差を付けて並べていて、高い方は、粘土の塊を置いて高さを固定している。丸瓦の先の突起部分を、上の瓦の端の上に重なるようにして並べている。重なり部分に漆喰等は見られなかった。南東側に溝状遺構（SD2）を検出しており、その続きがあれば瓦列の下方の先にあたるのだが、溝状遺構のプランが瓦列の下方部分ではっきりしなくなっている。近世の瓦を再利用して造られた雨樋のような遺構である可能性もある。溝状遺構（SD2）からは、17世紀後半から19世紀の陶磁器が出土している。

このような成果から、近世期はⅣ層を境に下位（Ⅴ層）が17～18世紀前半の築城期の造成面、上位（Ⅲ層）が18世紀後半以降の改変期の造成面に分かれることが層堆積・遺構・遺物から確認された。

また、今回の調査区周辺は、絵図から二之丸の南東端に近い場所であると考えられる。宝暦6（1756）年「薩摩国鹿兒島城絵図」（第1図）や天保14（1843）年「天保年間鹿兒島城下絵図」（第2図・第48図）では、二之丸南東端の角から南泉院（現在の照國神社）まで続く長屋が描かれており、「天保年間鹿兒島城下絵図」では「山奉行」「宗門」などと書かれている。

明治6（1873）年「鹿兒島城屋形及びその周辺図」（第



寛文10（1670）年
「薩藩御城下絵図」（鹿児島県立図書館所蔵）

天保14（1843）年
「天保年間鹿兒島城下絵図」（鹿児島市立美術館所蔵）

明治6（1873）年
『鹿兒島城屋形及びその周辺図』成尾常矩
（鹿児島市立美術館蔵）

第48図 調査区周辺絵図

3 図・第 49 図)でも同じく、二之丸南東端の曲輪を囲むように長屋が巡り、その長屋には、「御勘定所」「御代官所」「宗門方」「山奉行所」があったとされ、明治 5 (1872) 年に撮影された「照國神社」「鹿児島二之丸郭街」(第 3 図)には、この長屋と考えられる建物が写っている。

調査区については、絵図からすると勘定所や奉行所などの役所があったところの北側にあたる。この役所周辺は寛文 10 (1670) 年「薩藩御城下絵図」(第 1 図・第 48 図)ではまだ何も描かれていない空白地になっている。後述する文献からすると、第 8 代藩主重豪の代に二之丸南端に役所機能をもつ大規模な整備が行われたと考えられ、この区域は少なくとも築城期と大規模な整備が行われた改変期の 2 つの時期の造成が行われていると考えられる。

2 二之丸の変遷と調査区

鹿児島城の築城年については、慶長 6 (1601) 年説あるいは慶長 7 (1602) 年説と諸説あるが、二之丸の創建の年代も恐らく本丸殿舎と同じ頃で、当初から存在していたであろうと考えられている。

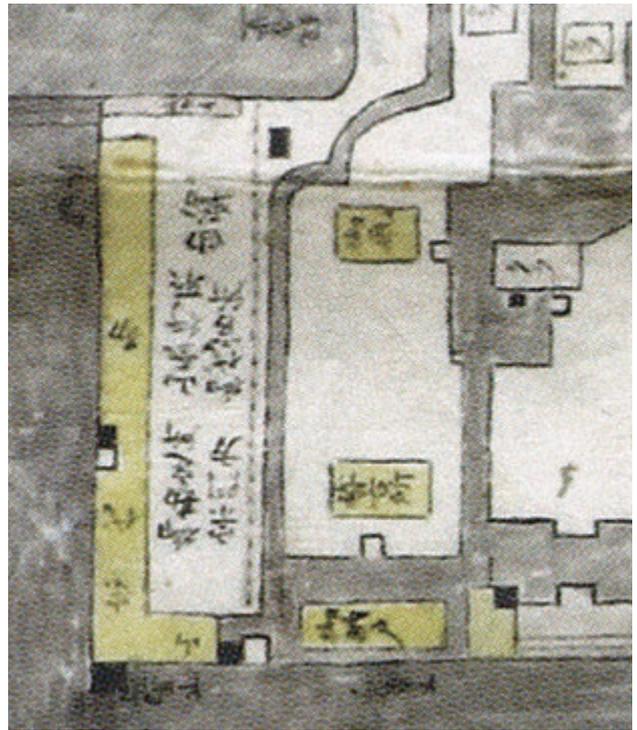
当初の二之丸は、本丸に近い北から二之丸(現在の県立図書館付近)、御台所、御下屋敷(現在の市立美術館付近)と建物が並んでいたようで、それぞれに門があり、北から二之丸御門、御台所御門、御下屋敷御門があった。今回調査した V 層は、この時期の 17 世紀後半から 18 世紀前半の陶磁器や瓦が多く見られる。

第 8 代藩主重豪の代になると、天明 5 (1785) 年に御下屋敷とその北側の山下御用屋敷を合わせて二之丸と呼称するようになり、門の改称も行われ、本丸北側にあった旧二之丸から旧御下屋敷に二之丸殿舎の中樞が移されている。

この後、御下屋敷が二之丸殿舎へ建て替えられ(『鹿児島県史料 旧記雑録(追録)』6-2119)、御台所や二之丸御庭園の普請、旧二之丸の外御庭としての整備、二之丸南端に役所機能をもつ曲輪の設置など大規模な整備が行われている。

この時期が今回調査した III 層で出土した 18 世紀後半頃の陶磁器と時期が重なり、二之丸南端に造成され大規模な整備が行われたと考えられる。

明治 6 (1873) 年「鹿児島城屋形及びその周辺図」(第 49 図)では、「御勘定所」「御代官所」「宗門方」「山奉行所」などの役所が描かれており、その役所の曲輪の北側には御厩や稽古所が置かれていることが描かれている。また、天保 14 (1843) 年「天保年間鹿児島城下絵図」(第 48 図)では、役所の前の曲輪と二之丸の境には塀のような建築物が描かれている。今回検出された柱穴列は、この役所と二之丸との境にあたるのではないかと考えられ、二之丸が整備、拡大していく時期に塀が立て替えら



第 49 図 調査区周辺拡大図『鹿児島城屋形及びその周辺図』
成尾常矩 明治 6 年 (1873) 年 (鹿児島市立美術館蔵)

れた可能性が考えられる。

3 区画境と考えられる柱穴列

調査地区の H~M-79' 区で、約 25 m にわたり東西に並ぶ一連の柱穴列を検出した。柱穴間は約 1.7~1.8 m を基本としている。南北に対となるような柱穴は見られず、横に広がりを見せないため、建物跡である可能性は低く、塀のような性格をもつ工作物であろうと考えられる。柱穴列はほぼ等間隔に並んでいることから、塀を支える控え柱の柱穴列の可能性が高いと考えられる。

今回の調査の柱穴には根石が伴うものが多い。下層には凝灰岩、上層には安山岩の材質の異なる根石が伴っていた。埋土が 2 層に分かれているものも多く、埋土の下層には凝灰岩と 15 世紀から 18 世紀前半の古い時期の陶磁器が出土し、埋土の上層には安山岩と 18 世紀後半から 19 世紀前半の比較的新しい時期の陶磁器が出土していることから、柱穴は塀が立て替えられて利用され、2 時期があったのではないかと考えられる。

塀が作られた最初の時期は V 層を掘り下げていることから、V 層を造成したと思われる築城時期の柱穴と考えられる。しかしながら、中世の時期に繁栄した大内氏遺跡発掘調査概報による柱穴群の類例をみると、直径が約 50~80 cm、深さが約 30~40 cm で柱穴の底に根石が置かれているものが多くある。今回発掘調査の柱穴も直径約 40~70 cm、深さが約 20~40 cm でしまりのない砂層 (VI 層) の底に凝灰岩を据え置き利用していることから、塀が作られた最初の時期は、柱穴に根石を置いて、掘立柱を立て

ることが多い中世の時期に作られた可能性も否定できない。

次に塀が建て替えられた時期であるが、本遺跡の柱穴列の埋土は2層となっているものが多い。柱穴の上層はⅢ層の黒褐色硬質土と思われる埋土に安山岩の根石が据えられている。柱穴の上層から出土した陶磁器の時期からⅢ層を造成したのは、18世紀後半から19世紀前半で、その時期に塀が建て替えられていることが想定される。第13図は根石の材質から凝灰岩を活用したⅤ層ピット列と、安山岩を活用したⅢ層ピット列に分けた図である。根石がないものもあるため、その場合は埋土の様相から分けている。凝灰岩と安山岩の2つの根石がある柱穴や凝灰岩だけの柱穴、安山岩だけの柱穴、または根石がないものもある。塀が建てられた最初の時期(Ⅴ層)に利用された凝灰岩と、塀が建て替えられた時期(Ⅲ層)に利用された安山岩の2つの時期に分かれると考えられる。

当然、塀には、出入り口等の切れ目があったことも考えられ、塀を建て替えた時期に塀を支える控え柱が改変されたことも十分考えられる。

4 鹿児島城の柱穴

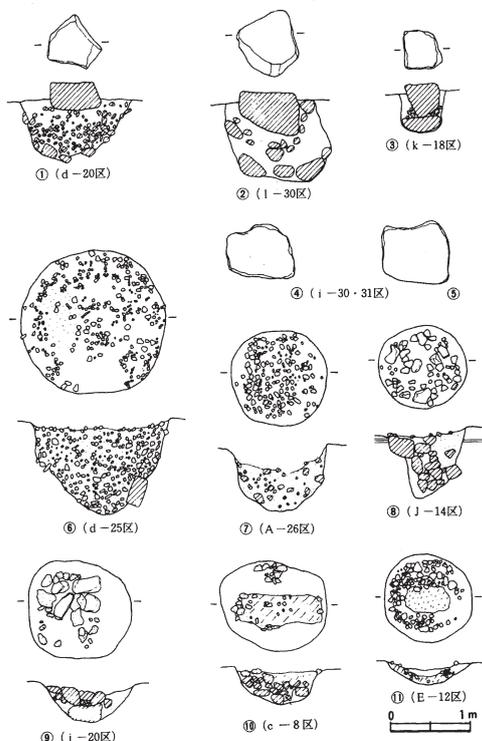
過去の鹿児島城の発掘調査をみると、本丸大奥跡の発掘調査では塀を構成するであろう柱穴が南北方向に約60cmの間隔で一直線に並んでいる。穴の径は約30cm、深さは15～25cmである。柱穴からは礎石と考えられる板

状の溶結凝灰岩が出土している。この礎石は今回調査した柱穴列の凝灰岩と似ているが、柱穴間の距離が異なる。

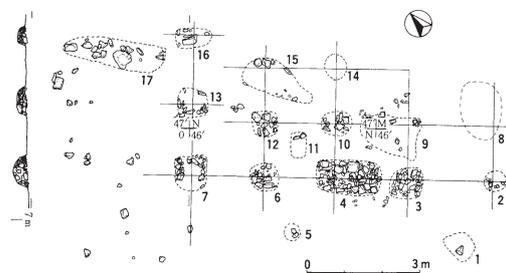
また、本丸跡の発掘調査では、建物跡と思われる礎石や根石が確認されている。礎石は安山岩質の自然石で40～80cmと大小があり、面はその石の平坦面をそのまま利用し、何ら加工を加えていない。礎石を支える根石は凝灰岩片を主に、目つぶしに玉砂利や土砂を用いて固めている。礎石はこの根石上に置かれている。安山岩質の材質や石に大小があった点は共通しているが、凝灰岩片等を用いて根石を用いて固めている点は、今回の調査では確認できなかった。

また、鹿児島市立美術館建設に伴う鹿児島(鶴丸)城二之丸跡の発掘調査では、天保年間鹿児島城下絵図によると二之丸御門を過ぎて右手に塀があり、外御庭や御台所へ抜ける塀重門が存在している、その塀と思われる根石列が確認されている。根石間の距離は東西方向では平均191cmとある。今回調査した根石間と方角がほぼ同じであるが、根石は栗石として凝灰岩片を用い、拳大の礫と共に叩きしめていて地業のようになっており、今回調査した柱穴の底に据え置き根石とは異なっている。

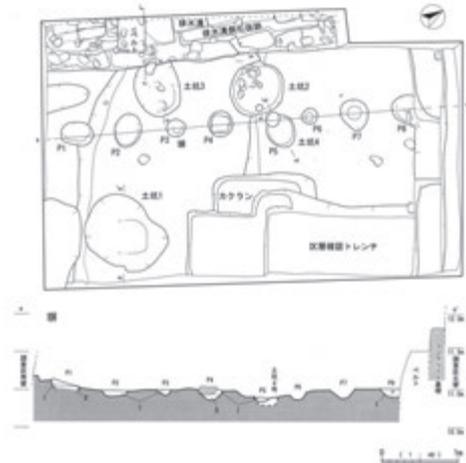
鹿児島城の柱の建て方は、本丸大奥のように礎石に柱を立てているものもあれば、本丸跡のように根石上に置かれた礎石や、小型石片を詰めた根石に柱を立てているものもある。また、鹿児島市立美術館建設に伴う鹿児島(鶴丸)城二之丸跡発掘調査のように、大きい根石はな



鹿児島(鶴丸)城本丸跡(鹿児島県教委 1983)
(S=1:100)



鹿児島(鶴丸)城二之丸跡 M-O-48' 建物跡
(鹿児島市教委 1984) (S=1:200)



鹿児島(鶴丸)城大奥跡 塀
(鹿児島県立埋セ 2022) (S=1:100)

第50図 鹿児島城の柱跡

いが、地業で固めているものもあり、鹿児島城の建物等の柱の立て方は、時期差や場所により、一様ではないことが過去の発掘調査からもわかる。

また、今回調査した柱穴の根石は上層のしまりのある黒褐色土に安山岩が置かれ、下層のしまりのない砂層に凝灰岩が置かれて利用されているものが多いが、柱穴P2（第14図）や柱穴P27・P28（第15図）のようにしまりのある黒褐色土に凝灰岩が置かれているものもある。これは凝灰岩を取り上げ、再度据え置いて再利用した可能性も考えられる。

いずれにしても、今回の発掘調査では柱穴内に根石があるため、塀の控え柱の建て方は据えられた礎石の上に柱を建てたというよりも、柱穴の底に根石を据え置き掘立柱のようにして柱を固定した可能性が高い。

5 塀の仕組みと控え柱

中世前期の塀や柵は、戦闘の主力であった騎馬に対するの防御力が必要と考えられ構築されたものが多かった。戦闘に対して山や寺院に臨時構築された防御施設も多く、痕跡が残りにくいいため、塀の構造を知るには絵巻物等の描写が重要な史料といえる。『一遍聖絵』に描かれた武士の館には、板塀と堀、弓矢を備えた矢倉門が描かれ、『後三年合戦絵詞』でも騎馬で攻め入る敵に対し、切岸の上に板塀と櫓が描かれている。戦闘形態が騎馬から歩兵に変化すると、城郭の構造も変化していく様子が描かれている。『太平記』には歩兵が城郭に攻め寄せ、堀から城壁によじ登り破壊の様子が描写されているが、『秋夜長物語絵巻』の園城寺の城郭は材木を塗り込めた土塀で、狭間を設けていて、この時代の戦闘形態をよくあらわしている。中世終わり頃の『肥前名護屋城図屏風』にも石垣の上に三角や四角の狭間が設けられた土塀が描かれ（『描かれた中世城郭』2023）、戦国から江戸時代になると土塀が主流の城郭が現れてきたといえる。

土塀には控え柱があるものもないものがあり、控え柱を作らない場合、土塀が自立して倒れないように壁を厚くしなくてはならない。控え柱は城内側に土塀を補強するための柱を設置していた。控え柱のかけ方には二種類あり、ひとつは控え柱を垂直に立てて土塀との間に貫（ぬき）と呼ばれる木をさして土塀を支えていたもの、もうひとつは土塀に控え柱を斜めにかけて突っ張りにしたものである。

今回調査した柱穴列は、城内の境となる塀の控え柱の跡と考えられる。柱穴底に根石を据え、掘立柱のしかりとした控え柱のある塀があったものと想定される。柱痕も垂直に残っている柱穴もあることから、控え柱のかけ方は、控え柱を垂直に立てて貫をさして塀を支えていたのではないかと考えられる。

第2節 木製品の出土

1 将棋盤と考えられる木製品

調査区の南西グリッド（H-81'）の土坑から陶磁器や木製品が出土した。なかでも木製品は自然科学分析の年代測定により、17世紀後半以降の将棋盤と考えられ、発掘された木製将棋盤としては、全国で4例目の可能性があることがわかった。将棋盤の出土例については、管見に及ぶ限り、現在のところ島根県高浜I遺跡出土と東京都溜池遺跡出土、高知城伝下屋敷跡出土のみで、高浜I遺跡は15世紀半ば～16世紀初頭の中世の将棋盤で、現存する最古の出土例である。溜池遺跡は18世紀～19世紀半ばの近世の将棋盤として報告されている。高知城伝下屋敷跡は出土地層から近世後期から近代初期の将棋盤として報告されている（第51図）。

三者の将棋盤を比較すると三者とも小将棋（9×9の升目）の盤であるが、溜池遺跡出土は高浜I遺跡出土より10cm程度小型という規模の違いが認められている（島根県教委2011）。三者とも升目は墨で書かれているが、溜池遺跡出土のものと高知城伝下屋敷跡出土のものは彫線に墨を入れている。

将棋盤の製造については、近世以前には専門の職人は存在せず、木工職人や大工が行っていたと考えられ、将棋盤の定尺が定まったのも近世に入ってからとされている（増川1977）。

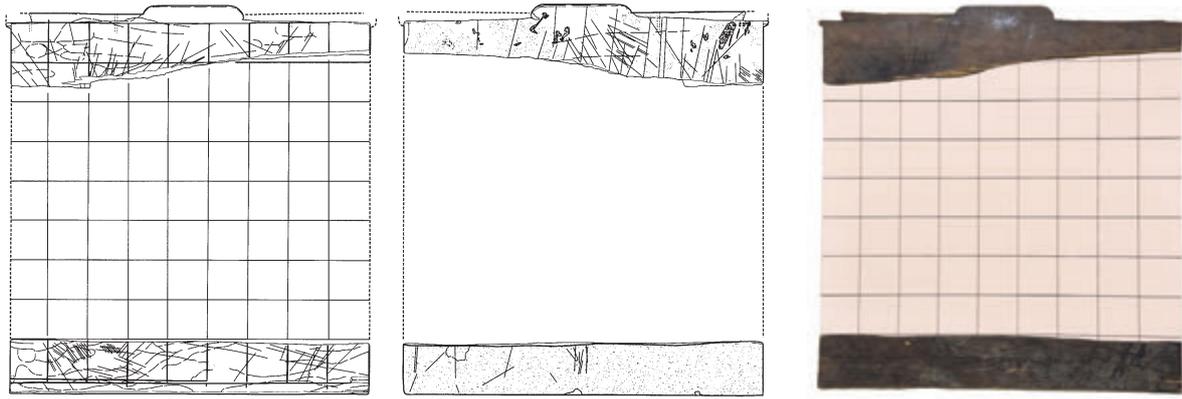
今回出土した当遺跡の資料は、溜池遺跡出土と長さがほぼ同じである。溜池遺跡出土の将棋盤が27.8×27.7cmのほぼ正方形の盤で厚さ1.3cmと報告されている。当遺跡で出土した将棋盤も約27.2×26.7cmのほぼ正方形の盤で厚さ1.7cmであり、小将棋盤の升目である9×9の升目が木製品に刻まれており、将棋盤の脚と考えられる部材も一部出土している（第51図）。全体的な長さは溜池遺跡出土と類似しており、升目に刃物で刻みを入れる点も共通している。

一方で溜池遺跡のものは材質は不明とのことで、堅く、細かい年輪が入っており、二之丸跡（マツ類）とは異なる。また、溜池遺跡出土の将棋盤は側面に釘穴があり、本来は枠のようなものが付いていたものと思われる。

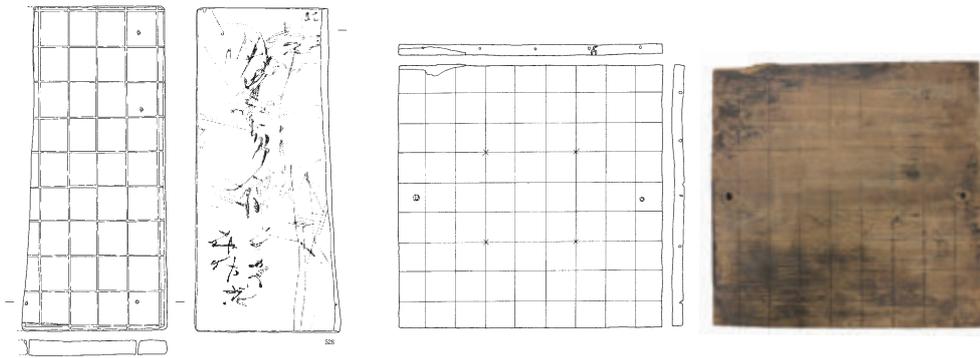
溜池遺跡から出土した駒は、高浜I遺跡の駒と比べると小さいものであった（第51図）。将棋盤の尺や升目を考慮すると、二之丸跡の駒も溜池遺跡の駒と同様の大きさであった可能性が高い。

2 将棋のはじまりと普及

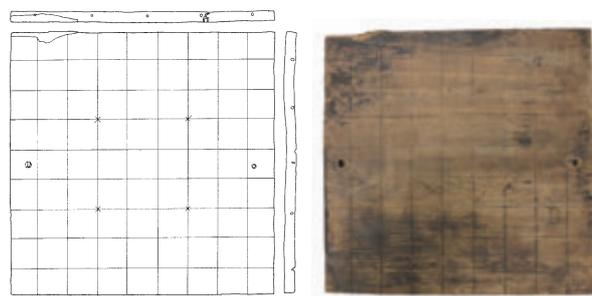
今日ある日本の将棋の起源は、古代インドで創り出されたチャトランガという盤上遊戯にあるとされる。チャトランガの原型は二人制や四人制のゲームとされ、それが長時間をかけて世界各地へ広がったとされる。日本へ将棋が伝わった経路や時期は未だ明確ではない。将棋も



高浜 I 遺跡 SK53 (島根県)



高知城伝下屋敷跡 SX15 (高知県)



溜池遺跡 (東京都)



鹿児島城二之丸跡 SK1

溜池遺跡：東京都教育委員会蔵 / 都内遺跡調査会 (1996)

高知城伝下屋敷跡：高知県文化財団埋蔵文化財センター (2002)

高浜 I 遺跡：島根県立埋蔵文化財調査センター蔵 / 島根県教委 (2011)

第 51 図 出土将棋盤

しくは将棋盤に関する近世以前の文献や絵図等の記録類は極めて少ない。

将棋の普及や変遷については、増川宏一氏によって検討されており (増川 1977・1985)、それによると将棋の最古の記録は、11 世紀までさかのぼることができる。藤原行成の記した 11 世紀初頭の『麒麟抄』には、将棋の駒の書き方を記した部分があり、11 世紀中頃の藤原明衡の『新猿楽記』には、将棋のことが技芸の一つとして記されている。鎌倉時代の写本で遺されている『二中歴』には、将棋と大将棋の説明があり、ここで初めて当時の

将棋の駒の名称や駒数、進み方、盤の升目が明らかになっている。

駒の出土例は、全国約 100 以上の遺跡で約 500 点近く確認されている。その中で奈良県興福寺旧境内出土駒が現在最古の駒と考えられ、11 世紀半ばのものとして推定されている。上述の文献等の年代や考古資料からみても、11 世紀代には将棋が存在していたことが言える。12 世紀の後半頃から上流階級では広まっていたようである。

平安時代には飛車・角の駒のない駒数 36 枚で 9×9 目の「将棋」と、駒数 68 枚「大将棋」が存在した。そ

の後も将棋には様々な型が出現し、なかでも駒数 92 枚で 12 × 12 目の「中将棋」は、公家や僧侶など上流階級を中心に普及した。最大の駒数と盤目の大局将棋は、江戸時代の三家の一つである大橋家の史料に記載されていた大型将棋で、駒数は 804 枚にのぼる。

このように日本では 7 × 7 目の小型のものから 36 × 36 目の大型のものまで何種類も考案されたが、16 世紀末頃には駒数 40 枚、盤の縦横 9 × 9 目の現在ある小将棋が遊ばれるようになり、この型が江戸時代の政策による後押しもあって普及していったと考えられている。

江戸時代には徳川家康、秀忠も将棋を好み、会を催すなどしていたようである。家康が好んだのは現在の型と同じ 9 × 9 目の小将棋であったといわれる。そして、寛永 12 (1635) 年には、将棋の上手な大橋両家・伊藤家の三家に家禄が支給されている。寛文 2 (1662) 年には将棋指衆が寺社奉行の管轄下に置かれ、段位の認定は三家により行われ、有段者は少数で権威を与えられたといわれている。将棋の能力が高いものは京都に多かったが、江戸に幕府が置かれたことにより、上手な者の往来が増し、江戸の町に将棋が普及していった。

また、将棋盤は客とこれらで遊んだり、遊びつつ密談をしたり、人を待たせるときの時間つぶしのためにもしばしば使用されていたといわれる。したがって、来客の際の社交の道具ということでも室内に置いて室礼の具としておく意味があったと考えられている。

今回の調査区は、代官所や勘定所などの役所がある周辺にあたる。人の来客の多い役所であれば、将棋盤が置かれ使用されていたことも窺える。本資料は、鹿児島でも将棋が親しまれ盛んであったことを示す貴重な資料であり、今後の調査によって、将棋の普及がさらに解明されることを期待する。

第 3 節 遺跡の残存状況

今回発掘調査した鹿児島城二之丸跡は、城の南端に位置している。本報告書の成果から境と考えられる柱穴列が確認されたことで、塀のような建築物があったことが考えられる。また、近世の包含層が確認されたことで、鹿児島城築城期や二之丸整備・拡大期における層が、非常に良好な状態で残存していることが明らかとなった。この成果は、二之丸の変遷や土地利用等を考える上で重要な成果であるといえよう。

本遺跡周辺は、良好な状態で残存している可能性が高く、鹿児島城内であることを考慮し、保護の方法は、現地で建築事務所と打合せを行い、工事の影響を受けない（基礎や梁がない）範囲は調査をそれ以上行わず、指導助言やこれまでの御楼門跡等の調査時の手法などを参考にシートで覆い、その上に土嚢をのせて保護している（第 52 図）。今後も取り扱いに十分注意する必要がある。



工事に影響を受けないため保護した部分
第 52 図 遺跡の残存状況

【主要参考文献】

- 鹿児島県教育委員会
1991『鹿児島城二之丸跡（遺構編）』鹿児島県教育委員会発掘調査報告書 55
1992『鹿児島城二之丸跡（遺物編）』鹿児島県教育委員会発掘調査報告書 60
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター
2020『鹿児島（鶴丸）城跡 - 御桜門周辺 -』
2022『鹿児島（鶴丸）城跡 - 北御門・御角櫓・能舞台ほか -』
2022『鹿児島（鶴丸）城跡 - 総括報告書 -』
- 鹿児島市教育委員会
1984『鹿児島（鶴丸）城二之丸跡』
1992『造士館・演武館跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書 13
2000『鹿児島（鶴丸）城二之丸跡 G 地点』
2020『鹿児島（鶴丸）城御厩跡』
2020『鹿児島（鶴丸）城二之丸跡 E 地点』
- 山口市教育委員会 1981『大内氏館跡 I・II・III』
都内遺跡調査会 1996『溜池遺跡』
高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002『高知城伝下屋敷跡』
高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 75 集
島根県教育委員会 2011『高浜 I 遺跡』
阿比留士朗 2022「近世鹿児島城下町についての考察」『縄文の森から』14, 鹿児島県立埋蔵文化財センター
永田恵子 2008「建築書系道具雛形における将棋盤の設計論および歴史的特質」『技術と文明』16 (1)
増川宏一 1977・1985『将棋 I・II』法政大学出版局
竹井英文・中澤克昭・新谷和之 2023『描かれた中世城郭』吉川弘文館
中井 均 2016『城館調査の手引き』山川出版社

写 真 图 版



①遺跡全景（南から撮影 左手が城山 奥が市立美術館）
②遺跡全景（北から撮影 右手が城山 奥が照國神社鳥居）



①調査区全景（手前が道路側 奥が照國神社側）
②調査区V層検出 溝状遺構（SD1）・柱穴列 ③柱穴列（半裁・完掘状況）



①西壁土層断面
②東壁土層断面

図版 4



①石列掘り下げ作業 ②柱穴完掘作業 ③瓦溜（半裁状況） ④溝状遺構（SD1）瓦出土状況
⑤溝状遺構（SD1）西から完掘状況



①調査区 H～J-79'～82' 区 (右手が溝状遺構 (SD1) 左手が柱穴列) ② SD1 陶磁器出土状況
 ③ SD1 瓦出土状況 ④ SD1 木片・陶磁器出土状況 ⑤ SK1 出土状況 (将棋盤・陶磁器)



①柱穴列検出状況（西から） ②柱穴列（半裁・完掘状況） ③P1 柱穴（根石が2つ 安山岩と凝灰岩）
④P7 柱穴（根石が1つ 安山岩） ⑤P28 柱穴（根石が1つ凝灰岩） ⑥P10 柱穴（根石がない）



①



②



③



④

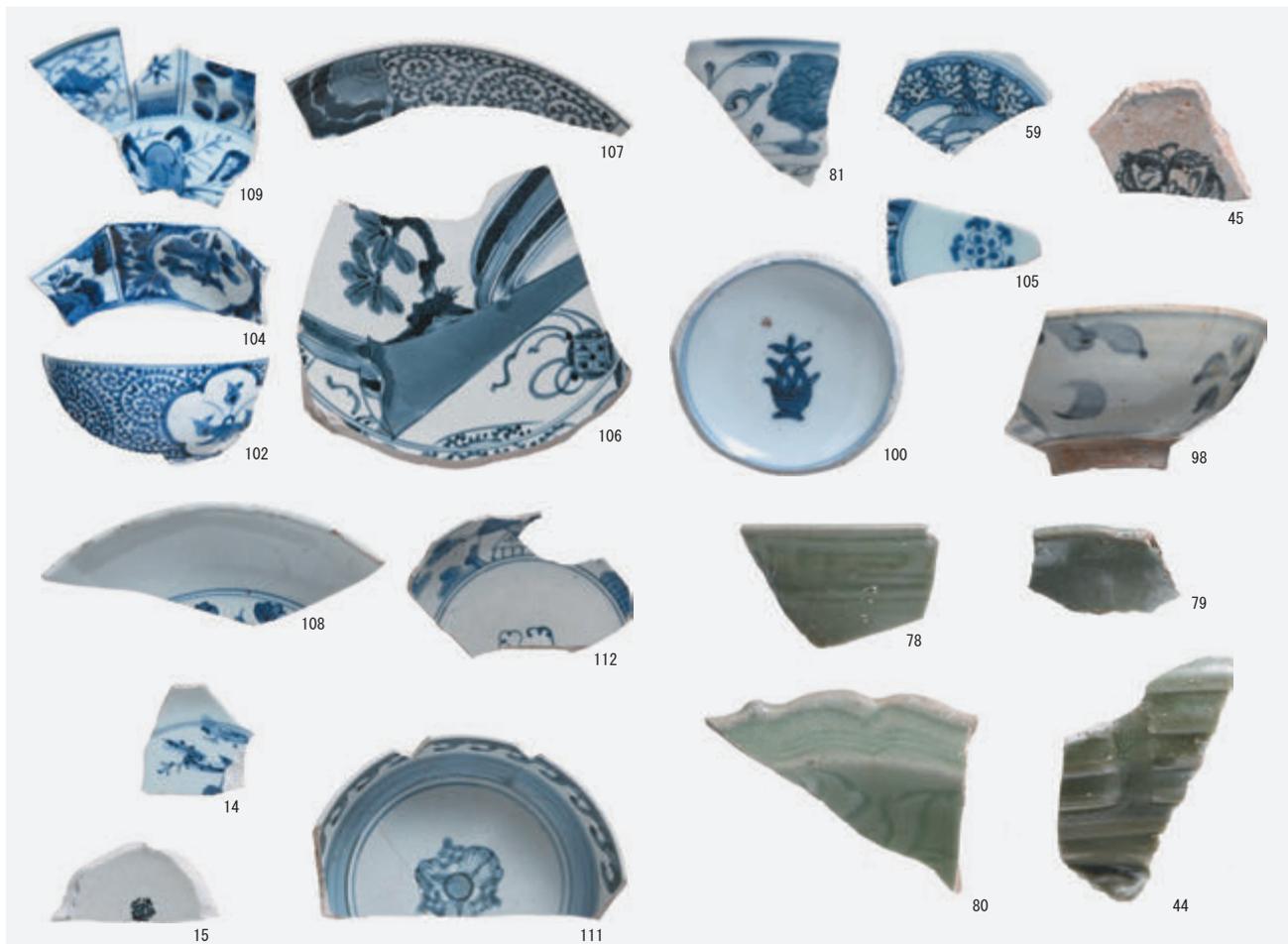


⑤

①溝状遺構 SD2 検出状況 ② SD2 東側完掘状況 ③ SD2 土師器出土状況
④ SD2 陶磁器出土状況 ⑤瓦列 検出状況



①瓦列 完掘状況（北から） ②瓦列 完掘状況（北東から） ③瓦列 完掘状況（東から）
④石組排水溝 検出状況 ⑤石組排水溝 完掘状況 ⑥石組排水溝と敷石 ⑦調査区 H ~ M-78' ~ 79'



近世遺物 1





近世遺物 3





29. 表



58. 表



58. 裏



29. 裏



156



155. 表



155. 裏

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（231）
環境保健センター城山庁舎跡地文化財調査事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

鹿児島城二之丸跡

発行年月日 2025年3月
編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-48-5811

印刷 株式会社 あすなろ印刷
〒899-0041 鹿児島市城西2-2-36
TEL 099-214-3757 FAX 099-214-3758



鹿児島県